

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター

2018 年度 事業報告書



Asama Yatsugatake Panorama Trail
—Wind Cave of Kori



「自然体験活動は、

子どもたちの創造力やチャレンジ精神を育む」

公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団

理事長 安藤 宏基

安藤スポーツ・食文化振興財団は、日清食品創業者 安藤百福が掲げた「食とスポーツは健康を支える両輪である」の理念のもとに、青少年の健全育成と食文化向上のための公益事業を行っています。日本陸上競技連盟主催の「全国小学生陸上競技交流大会」等の後援事業、新しい食品の開発に貢献する研究を支援する食創会「安藤百福賞」表彰事業、大阪池田と横浜の2つの安藤百福発明記念館（愛称：カップヌードルミュージアム）運営のほか、1983年の財団設立当初から、自然体験活動の普及に取り組んでいます。

2002年からスタートした「トム・ソーヤースクール企画コンテスト」では、「自然体験は子どもたちの体力、創造力、チャレンジ精神を育む」との考えに基づき、全国の学校や団体から自然体験活動の企画案を公募し、創造性に富んだ企画を立案した50団体を支援し、活動報告を基に優秀団体を表彰しています。これまでの17年間で、全国770団体を支援し、24万人以上の子どもたちが体験活動に参加しました。

2010年5月に、長野県小諸市に、「安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター」（略称：安藤百福センター）を設立し、自然体験活動を推進するための人材育成や、アウトドア活動の普及活動を行っています。また、自然体験活動は、どのフィールドでも「歩く」ことが基本であると考え、日本ロングトレイル協会と連携し、「歩く文化」の醸成に取り組んでいます。2018年度より北海道から九州まで、日本列島を貫く一本道の「JAPAN TRAIL プロジェクト」を推進し、現在全長1万キロを超えるルートの選定を始めています。

2016年から、新たな国民の祝日として「山の日」（8月11日）が制定・施行されました。私も微力ながら「全国山の日協議会」（谷垣禎一会長）の副会長として活動に参加させていただいておりますが、「山の日」の施行がアウトドア活動のより一層の普及・振興に繋がることを期待しています。

今後とも引き続き、ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

安藤百福記念
自然体験活動指導者養成センター

2018 年度 事業報告書



MOMOFUKU
ANDO
CENTER

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター

2018 年度 事業報告書

CONTENTS

寄稿・講演会記録

ロングトレイルは旅の道～トレイルをコネクして JAPAN TRAIL へ～ 道のない山歩きは、ミニ・アドベンチャーゲーム	中村 達	4
～地図とコンパスを駆使してルートを探す愉しみ～	節田 重節	12
信越トレイル 10 年の変遷から見た「歩く」ということ	大西 宏志	20
文化としての long-distance trails	佐藤 有希子	25
トレイルで地域資源を掘り起こす～浅間山古道 復活の道程～	安藤 伸彌	31
トレイル紹介① みちのく潮風トレイル	関 博充	36
トレイル紹介② ぐんま県境稜線トレイル	相馬 義昭	40
第 6 回ロングトレイルシンポジウム		43
小諸絶滅危惧種ビオトープ プロジェクト		97

事業報告

ロングトレイルのつくり方講座	102
ロングトレイルハイカー入門講座	104
大人のトレイル歩き旅講座	114
第 11 回橋谷晃さんと歩くトレッキング講座	133
みんなでダイヤモンド浅間を見に行こう！	135
みんなでパール浅間を見に行こう！	137
事業総括	138
安藤百福センター事務局スタッフ近況	139

巻末資料

新聞掲載記事	142
安藤百福センター運営組織	145
2018 年度実施事業	146
2018 年度研修利用状況表	147
編集後記	150

寄稿・講演会記録

ロングトレイルは旅の道

～トレイルをコネクして JAPAN TRAIL ～

昨年の11月中旬、フランスの巡礼街道に出かけてきた。初冬としては異常に寒かった。フランスの国土は平野部が多く、高速道路を走るとどこまでも農地が続いていて、農業国を実感する。また、世界でも有数のワインの産地で、コート・ドール（黄金の丘）と呼ばれる丘陵地帯のブドウ畑が、どこまでも広がっていた。

その中を、古からの巡礼街道が縦横に延びて、春秋の気候のいいシーズンには、大勢のハイカーや巡礼者がバックを背負って歩いているという。そんな風景がごく自然に生活の中に、あるいは日常のひとコマのようにして、時が流れているように思った。

トレイル（街道）はよく整備され、主要な町にはビジターセンターや観光案内所などもあり、巡礼者や旅人に情報を提供している。

ブドウ畑や牧場などを縫うように延びるトレイルは、ときには村々を、街中を通過するように設えられている。小高い丘の上には教会があり、教会のすぐ横にある小さなレストランでは、できたばかりのボジョレーヌーボが振舞われていた。私たちもバックを下ろして、勧められるままグラスに口をつけた。

巡礼街道として何百年も、多くの人々がサンティアゴ・デ・コンポステーラを目指したトレイルは、こんな風景がごく当たり前のように見られたのだろう。



フランス 巡礼街道とその付近

ロングトレイルとは

1. 網の目のようにある道の、A 点から B 点までの歩いた道をトレースしたもの
2. このルートを固有のロングトレイルとして認識を共有するもの

要約すればこのようになると考える。発案者が特定の地域で、歩きたい道、歩いてほしい道に線を引くことから始まる。その道は、数ある道の中でも歩きやすく、なんらかの必然性がある。トレースしたその道を完歩するのに、少なくとも数日を要する長い距離があること。そしてこのルートが、固有の名称が付けられたロングトレイルとして広く認識されること、などであろう。

ロングトレイルを整備する目的の最大公約数は、地域の活性化、自然環境の保護、青少年の自然体験活動の推進、健康などである。地域の活性化は自然体感型観光に集約され、そこには観光収入、雇用が期待される。自然環境の保護は、トレイルを取り巻く地域の動植物、歴史的遺産などの保全にほかならない。

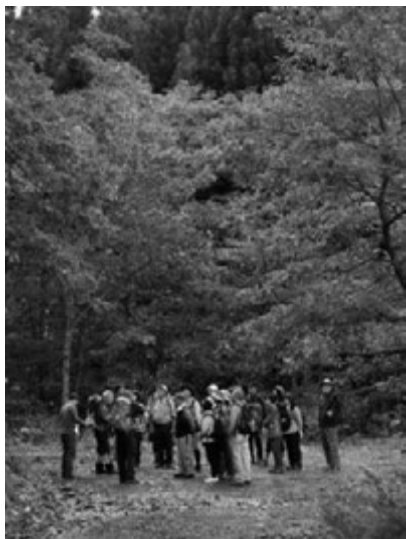
なかでも青少年の自然体験活動の推進は、まずは歩くことから始まる。歩くことはアウトドアの基本であり、歩くことで自然の多様性や変化に富む地勢などを、体で、そして五感で感じ取ることができる。さらに様々な思考が巡りめぐることだろう。これらはすべて安藤百福センターの設立目的に合致すると考える。

ロングトレイルの現況

昨年は西日本豪雨や台風などにより、各地で大きな被害を受けた。ロングトレイルも広島湾岸トレイル、大江山連峰トレイル、高島トレイルなどが被災した。現在ではおおむね復旧しているが、トレイルに至るアプローチでは倒木や斜面の崩落などが今なお残っていて、車両は一部通行できない所もある。とはいえ、関係者の懸命な復旧作業もあって、歩くには支障がないようだ。

さて、日本ロングトレイル協会の加盟団体は、一昨年度は大江山連峰トレイルや伯耆国ロングトレイルなど、昨年度はぐんま県境稜線トレイルが新たに加わって、24 トレイルとなった。今年度は 6 月に全線開通する総距離約 1,000km の「みちのく潮風トレイル」が入会予定で、さらに「佐渡島トレイル」「若狭トレイル」などが入会を検討している。

また、京都府の大江山連峰トレイルが開通したのを記念してロングトレイルフォーラムが開催されたほか、5 月には佐渡島トレイル、10 月には青森県の奥津軽トレイルでも行われ、そして本年 3 月には、とっとり横断ロングトレイルシンポジウムが開催された。これらのフォーラム・シンポジウムは、地元民にロングトレイルとは何か、整備の意味、歩き方などを幅広く周知する目的を持って行われている。



奥津軽トレイル



浅間・ハケ岳パノラマトレイル

また、8月11日の「山の日」をバックアップしている、全国山の日協議会（会長 谷垣禎一）は、地域の活性化も大きな目的にしている。ロングトレイルはまさに地域の活性化が大きな命題であり、同協議会も主要目的の一つに、ロングトレイルの普及活動を取り入れることになっている。

地域の活性化にさほど大きな予算をかけず、また、自然環境へのダメージも少なく、さらに健康、教育などを目的とするロングトレイルは、山の日 の制定理念に合致していると思われる。登山、山歩きというアクティビティだけでなく、山岳国をしっかりと認識できる意味もあると評価されている。

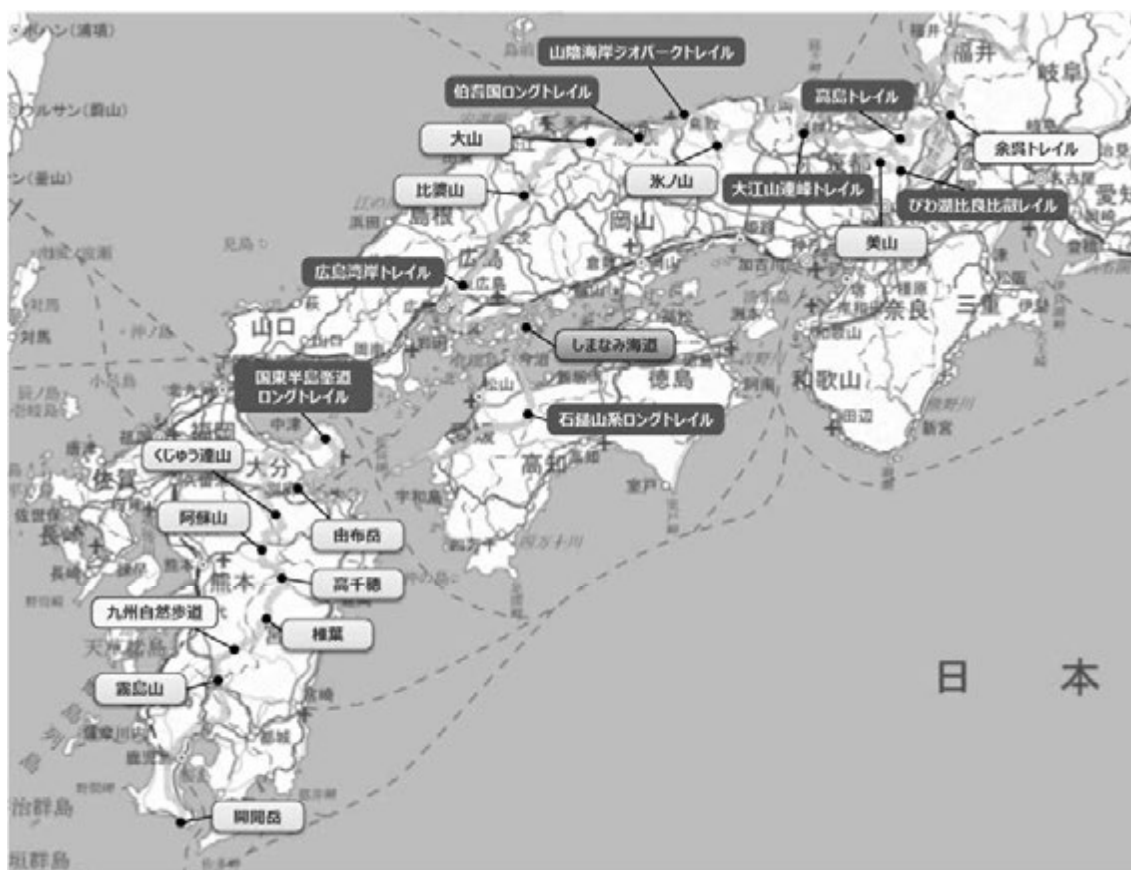
JAPAN TRAIL

～日本のグランド・デザインのイメージを創出する～

トレイルを可能な限りつなぎ、沖縄から北海道までの、まさに壮大なロングトレイルを設定しようと計画している。この名称を JAPAN TRAIL とした。JAPAN TRAIL は次代に引き継ぐことができるプロジェクトとして、多くの方々にご協力をお願いしたいと考えている。

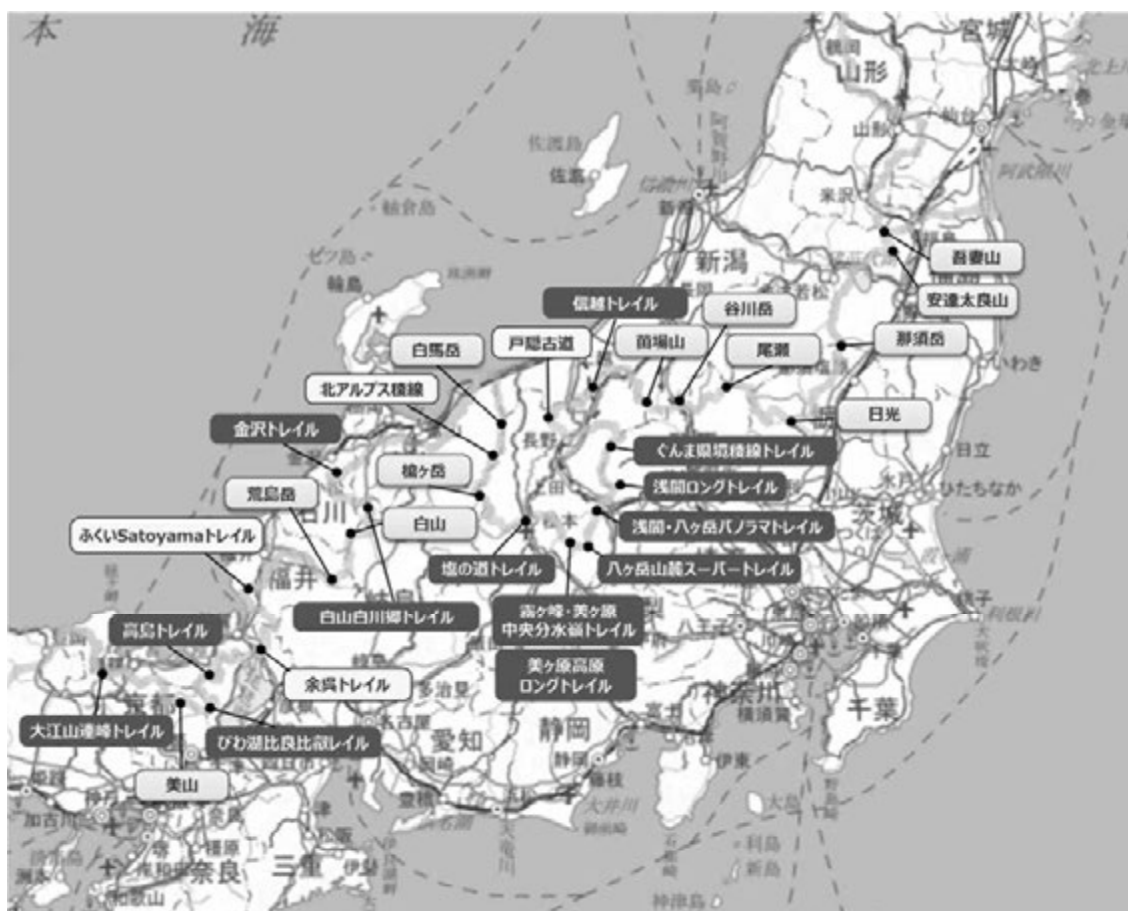
トレイルは地域によって目的が多少異なるが、おおむね地域の活性化、自然環境の保護、雇用機会の創出、青少年の自然体験活動の普及、アウトドア・レクリエーション、そして、インバウンド対応などに集約される。

JAPAN TRAIL は日本を縦断する唯一の、そして、初めてのロングトレイルであり「この道が北から南まで続くことがリアルに想像できる」ことが重要だと考えている。日本列島がロングトレイルという「歩く道」でつながれば、国土のイメージ・デザインが歩く人々の脳裏に浮かぶのでは、と考える。また、インバウンドには、日本列島の自然と文化に深く触れることができるトレイルとして注目されるのでは、と期待している。



JAPAN TRAIL の検討会は、制作委員会として安藤百福センターに事務局を設置し、随時、委員会を開催している。メンバーは山岳関係者、山岳ガイド、専門誌編集者、地図製作者のほか、オブザーバーとしてロングトレイル関係者、行政機関などが参加している。

京都府に入ってから山陰海岸ジオパークをトレースして、大江山連峰トレイルから美山町を通り、由良川源流にコースが設定できると、京都府では構想中である。由良川の源頭から滋賀県に入り、びわこ比良比叡トレイル、高島トレイルを経て福井県小浜市が検討中の若狭トレイル、もしくは滋賀県の余呉^{よご}トレイルから日本海側に抜けるルートが想定される。



8

トレイルが続く予定である。途中、呉羽^{くれは}トレイルを歩き、富山から立山を経て北アルプスを縦走するルートが候補となっている。



北アルプスのトレイル

北アルプスの縦走路は、日本海から朝日岳、白馬岳などを通り、穂高連峰から上高地へ至るコースなどが想定できる。無積雪期の北アルプスの縦走路は、世界基準から見れば最良のハイキングコース、あるいはトレッキングのルートでもあり、インバウンド対応としては、ぜひとも JAPAN TRAIL の夏季限定のルートに加えたいと考えている。ただし、穂高連峰の登下降に際しては、ヘルメットやハーネスなどの登攀具の用意や、山岳ガイドの同行なども推奨する旨を付記することも必要であろう。



塩の道



上高地から穂高連峰

また、北アルプスを歩かない場合や夏季以外は、糸魚川を起点とする塩の道トレイルを通じて塩尻に至るルートが予定されている。

上高地からは松本へ抜け（塩の道ルートと合流）、諏訪から美ヶ原・霧ヶ峰中央分水嶺トレイル、八ヶ岳山麓スーパートレイルを通して、浅間・八ヶ岳パノラマトレイル、浅間ロングトレイルなどから、戸隠、黒姫、妙高を縦断するトレイル（計画中）を経て信越トレイルと結び、延伸が計画されている苗場山からぐんま県境稜線トレイルへと至る。

そして、尾瀬を経由して日光へ進み、那須連峰、安達太良山へのルート設定を検討。さらに

北上して吾妻山あたりで、東へ進むルートと北上するルートの2方向を検討している。

一方、北上するルートは、蔵王連峰、月山、鳥海山、秋田駒ヶ岳、岩手山・八幡平・安比高原 50km トレイル、八甲田山など、東北を代表する名山と、その山麓をくまなく通るルートである。一部は奥の細道やイザベラ・バードなどが歩いた道とも重なると思われる。



北海道では渡島駒ヶ岳、ニセコ、羊蹄山を經由して、洞爺湖、支笏湖を通り、十勝方面へ向かう。十勝岳、トムラウシ山などを縦走し、十勝ロングトレイルに入る。

この JAPAN TRAIL のルートは 1 次案であり、机上で検討したものに過ぎない。とはいえ、主な山岳や地域は、かつてなんらかの形で制作委員がトレースした部分も多く、決して机上の

空論だけではない。しかしながら、内外の多くの人々が安全に楽しく歩くには、まだまだ検討や検証、さらには実査が必要であろう。

繰り返すが、これはあくまでも地図上の想定ルートであり、歩行不能な地域、危険が想定される箇所なども数多くあると思われる。また、新たにトレイルが整備されたり、地域によっては通過希望のルートや、通行が拒否される所が出現するかも知れない。

さらに、ルートはどこを通っても積雪により利用期間が限定されるため、通年歩行が可能な冬季ルートの検討も必要であろう。

そのほか様々な事情や障害で、ルートとして不適合とされる所もあると考えている。したがって、第2次、第3次案というようにルートの選定が続くであろう。

また、ルートが設定されたとしても、これは決して固定されたものではなく、ハイカーやスルーハイカー、ルートが通る地域の意見や要望などで、変更や迂回などが発生する。さらに世代や時代のほか、外的な要因での変更も想像できる。現在検討しているルートが一応の完成を迎えても、決してパーマネントではないことを認識する必要があるだろう。

古道や歴史のあるロングトレイルが、何百年もの時を経て、今なお人々に愛され続ける道として存続しているのには相応の理由がある。

JAPAN TRAIL は次の世代にバトンタッチできるスキームとして、未来に残せる自然の遺産として、醸成されていくことを期待している。

中村 達（なかむら とおる）

安藤百福センター センター長

公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団 理事

特定非営利活動法人日本ロングトレイル協議会 代表理事

一般財団法人全国山の日協議会 常務理事 ほか

道のない山歩きは、ミニ・アドベンチャーゲーム

～地図とコンパスを駆使してルートを探す愉しみ～

節田 重節（日本ロングトレイル協会会長）

登山者の強い味方だった 5 万分の 1 地形図

我々登山者にとって、地形図は絶対的信頼を置けるパートナーであり、必要不可欠な情報である。

日本山岳会の創立（1905〈明治 38〉年）が日本の近代登山の始まりと言われるが、今から 110 年以上前の黎明期には、登山用として使える地図はまだなかった。先人たちは「鎗岳、穂高山附近憶測圖」や「日本アルプス横断豫想圖」など手作りの地図を発表、後続の登山者はそれらを頼りに登っていたのである。

一方、映画『劔岳 点の記』に見られるように、明治新政府は国土防衛上の目的も含め地図作成に取り組み、西欧式測量術を導入して全国大三角測量を進めていく。それは 1884（明治 17）年、地形図作成事業が参謀本部測量局（88 年からは陸地測量部）に統合されるとさらに本格化し、日本アルプスをはじめ多くの高峰に測量部員たちの足跡が印されていくことになる。

その成果として生まれた 5 万分の 1 地形図は、1890（明治 23）年から整備が始まり、1916（大正 5）年に全国整備が完了している。そして後年、5 万図に代わって登場したのが、豊富な情報が付加された 2 万 5000 分の 1 地形図である。これは 1964（昭和 39）年の第 2 次基本測量長期計画施行から本格的な整備が始まり、1983（昭和 58）年に全国整備が完了している。なお、電子国土基本図が整備されるまでは、この地形図が国土の基本図と位置付けられてきたのである。

さて、1980（昭和 55）年ごろまで、登山者の強い味方と言えば 5 万分の 1 地形図だった。この地図を片手に、コンパス（磁石）で方位を確認しながら、特に道のないルートや積雪期の山を歩くのが、何よりの愉しみだった。現代はスマートフォンの普及により、GPS アプリを使う人が増えているが、やはり紙地図とコンパスを駆使して山を歩くのが基本である、と考えている。

地図は「見る」ものではなく、「読む」ものである。ただの紙きれだが、読み手によっては、等高線や記号などから膨大な情報を読み取ることができる。地図上に地名以外言語はないが、地図は山の形を言葉で忠実に表現して、雄弁に語り掛けてくれる。その言葉を聴けるかどうか、理解できるかどうか、登山者のセンスが問われている。地図読みが知的作業と言われる所以である。

そのような強い味方と必死に睨めっこしながら愉しんだ、忘れられない山行がいくつもあるが、ここでは夏の大雪山系・トムラウシ川の遡行と、晩冬の裏岩手スキー縦走の 2 つの山行記を紹介したい。

トムラウシ川・地獄谷で極楽温泉を発見の巻

“地獄”を目指して未知の沢を下降

美坂哲男さん(1920～2003)という温泉紀行作家がいた。筋金入りの山と温泉大好き人間で、どこでも温泉に浸かったり、水浴びをするので、付けられたニックネームが「アライグマ」。略して「クマさん」と呼ばれていた。特にひなびた山間のいで湯を好み、全国にあまたある温泉を求めて、執念のごとく旅を重ねていた。

そのクマさんと私は、山と溪谷社在職中にお付き合いができたのだが、お互いかなりの「温泉・ビール好き」とあって馬が合い、最終的には13冊もの著作を出版させていただいた。出版社の校正課に勤務していたクマさんは、入湯した温泉の数を全部克明に記録していた。それも源泉を確認した数である。そして、500湯や1,000湯、1,500湯など、節目のときは、とっておきの温泉でお祝いをするのが恒例となっていた。

温泉行脚を始めて26年、「2,000湯入湯達成」を祝う日が近付いてきた。月並みな温泉では面白くないということで、北海道・大雪山系のトムラウシ山に登って、トムラウシ温泉でお祝いしようということになった。しかも、その前の1,998湯と1,999湯を、ワイルドなヌプントムラウシ(沼ノ原)温泉と東大雪地獄谷温泉で稼ごうというプランだ。一行は主役のクマさんと私、編集部員のH君、カメラマンのMさんの4人。

昭和60(1985)年7月下旬、東京・晴海埠頭からフェリーで釧路に上陸、根室本線で新得に至り、タクシーをヌプントムラウシ温泉まで飛ばす。この温泉はヌプントムラウシ河畔に掘られた素掘りの温泉で、まずは1,998湯目をビールと盛大な焚火で祝う。

翌日は沼ノ原山を経て沼ノ原の大湿原に登り着き、さらにひと登りして、五色岳の東南東に広がる広大な五色ヶ原台地に上がった。あいにく視界が悪くなり、台地の中間地点と思われるあたりにテントを張る。その翌日は雨。地獄谷温泉への下降路を求めて懸命に偵察するが、適当なルートが見付からない。以前、北海道の山仲間たちと地獄谷温泉に下降したことのあるH君に聴くが、悪天候もあり、自信を持って判断できる下降点が見付からないまま、もう1泊。

入山4日目、今日こそは、と偵察を兼ねて出発する。五色岳方向に少し登ってから五色ヶ原を横切り、地図を睨みながら台地末端の急斜面を思い切って下降開始。道々H君に確認するが、どうも彼らが下った沢と違うようで、1本東側のスゲ沼沢と思われる。ただし、地図上で見ると、この沢も西隣の五色沢も、さらにその西の化雲^{かうん}沢も、下流の地獄谷温泉ではほぼ三俣となって合流するので、最終的にはこの沢も温泉に行き着くはずである。そうと決めたら、ひたすらヤブをこぎ、沢を駆け下る。こんな山歩きの経験がないクマさんにとっては、まさに難行苦行だったことだろう。また、H君とMさんの2本のピッケルは、いつの間にかヤブの中に消えていた。

意を決したものの、温泉に行き着かないのではないかという不安は拭い切れず、必死に地図とコンパスを睨みながらなおも下る。兩岸が真っ黄色の長いゴルジュや滑滝状の流れ、森閑として足元がスゲ類に覆われて見えない沼地など、不気味なシーンが連続する。とうとう我慢しきれず、「温泉の噴煙はまだ見えぬか」と、巨大なダケカンバの倒木に登って偵察する。

苦闘 6 時間半、ついに噴煙が見えた！ 東大雪地獄谷温泉である。3 本の沢が見事に合わさっているのも、当たり前だが地図のとおりだ。皆大喜びでザックを投げ出す。先刻までの不安が、一気に吹き飛んだ瞬間だった。早速、河原に手掘りの湯舟を造成、川水を入れて温度を調節し、クマさんに入らせていただく。クマさんの決めゼリフで言うと「大満足、大愉快」な 1999 湯目、地獄ならぬ“極楽”温泉だった。入湯後は河岸段丘の上にテントを張る。地熱のためテントの底がポカポカと暖かく、到達感とともに思い切り熟睡できた一夜であった。



地獄で極楽とはこのこと。とうとう 1999 湯目の東大雪地獄谷温泉に入り、ご満悦のクマさん

“地獄”を抜け出し、トムラウシ山へ

夜来の雨が降りやまず、トムラウシ川が少し増水している。一夜きりの極楽湯も水没しているので、朝風呂を諦めて早速、出発の準備。沼ノ原―五色ヶ原―五色岳―化雲岳―トムラウシ山と続く稜線にぐると囲まれており、ヒグマの巣窟と思われる地獄谷から脱出しなければならない。再び地図と首っ引きで遡行を開始する。

いったん本流を少し下り、最初の出合を北に折れ、ヒサゴ沼沢に入る。この沢はトムラウシ山の北北東に位置し、登頂のベースとなるヒサゴ沼から流れ出ているものだ。しばらくは穏やかな溪相の中、ジャブジャブと沢沿いに進む。ときどき小さな高巻きがあるが、人の背丈ほどもあるエゾブキをかき分けながら歩くので、いつなんどきヒグマと遭遇するかもしれないと思うと恐ろしく、できるだけ沢の中を歩いていく。もっとも、人間のクマさんならずと一緒に連れているのだが……。

北に向かっていたヒサゴ沼沢が、大きくカーブして真西に方向転換、左右に 2 本の支流を分けると雪渓が現れてきた。クマさんにアイゼンを履かせ、1 本だけ残っていた私のピッケルを渡す。やがてヒサゴ沼沢の本流は高度差 400m ほどの急崖を駆け上がり、何本かの滝を懸けながらヒサゴ沼のある台地に消えている。とても沢沿い

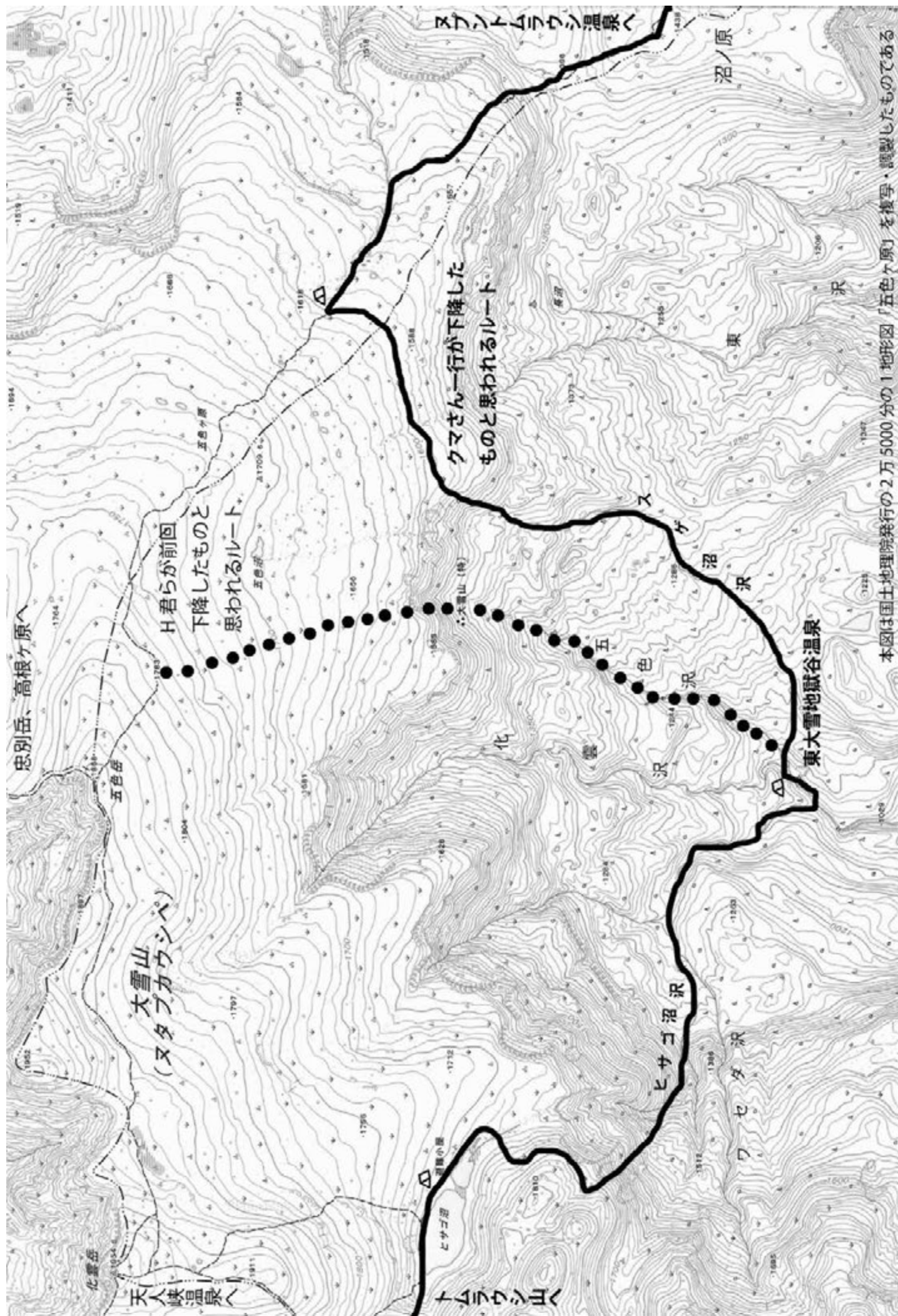


ヒグマにおびえながらヒサゴ沼沢を遡行する

には遡行できない。また地図と睨めっこして、沢の右岸の斜面をヤブこぎしながらヒサゴ沼からの落ち口を目指す。最後はハイマツをかき分け、全員へとへとになりながら沼の南岸に飛び出す。やっと“地獄”から脱出できたのだ。疲れ切った体に鞭打って、避難小屋のそばに幕営する。

入山 6 日目、最終日は長駆、ヒサゴ沼―天沼―トムラウシ山―カムイ天―トムラウシ温泉と歩き、国民宿舎・東大雪荘でクマさんの「2000 湯入湯達成」を盛大にお祝いしたのであった。

なお、下山後、子細に検討したところ、前回 H 君たちが下降したルートは、五色岳直下からほぼ真南に五色ヶ原を縦断、五色沢を下ったものと思われる。したがって、我々が下降したルートは、やはりスゲ沼沢と考えられる。※2 点の写真は『ヤマケイ・グラフィック』1985 年秋号より複写



八幡平からスキーで“裏岩手必死の彷徨”の巻

樹氷輝く八幡平の大雪原を横断

「地図のある山旅」第2話は、夏の北海道から晩冬の陸奥^{みちのく}に移る。八幡平から諸桧岳—大深岳—三ツ石山—大松倉山—犬倉山—岩手山と、2つの日本百名山を結ぶルートは、裏岩手縦走路と呼ばれている。もちろん、夏や秋も人気のルートだが、そこをスキーで縦走しようというのがこの山行の目的だった。昭和51(1976)年4月上旬、盛岡駅に降り立ったのは、編集部員のY君とカメラマンのNさん、そして私の3人。

1日目、バスで八幡平スキー場に到着、リフトを2本乗り継いで、大黒森からスキー縦走をスタートする。恵比寿森—黒谷地湿原—源太森と、樹氷の間を快適にスキーを滑らせて、八幡沼の畔に立つ陵雲荘に泊まる。ストーブと薪がある快適な小屋で、居心地の良さと2日目の天候が視界ゼロということも相まって、ついつい2泊する。

3日目、昨日来のガスが風で吹き飛ばされ、徐々に薄日が射してきた。半日でも前進しておきたい。あわてて昼食をかつ込み、身支度して飛び出す。八幡平の最高点を踏み、裏岩手縦走路に入って、まずは畚岳^{もっこ}を越える。名前のとおりモッコ（縄を網状に編んで四隅に綱を付け、土などを運ぶ道具）のように、ずんぐりむっくりした愛嬌のあるピークだ。次の諸桧岳も甘食をさらに平べったくしたような、ピークというよりは丘に近い。裏岩手縦走路は、このような調子で高度差100m前後の、なだらかな上下を繰り返しながら進む。それだけに、夏道が雪に埋まっている今、視界不良のときはルート・ハンティングに大変苦勞することになる。



源太森山頂から見た八幡平南部の樹氷群。右手のこんもりしたピークが畚岳

嶮岨森も名前ほど陰阻ではなく、簡単に通過して大深岳の登りとなる。大深岳は名前のとおり巨大な山体で、しかも一番奥まった所に鎮座している。その北側山腹にある大深山荘に潜り込んで、半日行動だった3日目を終わる。

地図と首っ引きの「尺取り虫作戦」

4日目、進行方向の空が暗い。なんとなく気が進まなかったが、とにかく出発と決定。ルートに迷いながらも大深岳の山頂らしき所に立ったが、その先は前進不可能なほどの深いガス。雪面とガスの境が全く分からない。這う這うの体で大深山荘に引き返し、まずは心を落ち着かせてひと休み、作戦を練り直す。そして昼過ぎ、空模様も少し明るくなってきたので再挑戦、なんとか大深岳の指導標を雪の中から掘り当てる。

これで現在地がはっきりした。後は難しいが地図とコンパスをフル稼働させて、慎重に方位を確認しながら進めば、なんとかなるだろう。大深岳を出て小畚山への分岐点を確認できるかどうか、本山行の最重要ポイントである。3人で40mザイルを結び合い、慎重に滑り出す。Y君が先頭で20m進むと、次にNさんが20m進んでY君に追い付く。そして、Y君がさらにその先へ20m進む。最後に私が20m前進する。こうして40mザイルを直線でいっぱい伸ばしながら方位を確認し、尺取虫のように進む作戦だ。

「ちょっと待ってくださいよ。ガスが深くてよく見えないけど、どうも左手は急な斜面のようですよ。このまま左に寄ると流されてしまうので、コンパスで確認してください」とY君。

「分かった、ちょっと待って。真南がこの方向か。下る尾根はそれよりやや東寄りだから……。よし、分かった。今度は急に左へ寄り過ぎたんだ。俺とNさんを結んだザイルの延長線上を、真っ直ぐ進んでくれ」と私。

「分かりました。しかし、どうも分岐点を過ぎてしまったような気がするんですよ。大深の頂上からどのくらい下りましたかねえ」

「地図で1.5cmぐらいだから、700から800mぐらいだろう。ガスの中を手探りで下ってるから、長く感じるんだよ」

「あれっ、進行方向左手で何か聞こえないですか？　ゴォーッて音がしてますよ」

「うん、なんか聞こえるな。飛行機じゃないな。……分かった！　松川の地熱発電所の音だろう。そうすると、分岐点はもう少し先だよ」

視界10mほどの深いガスの中を、我々3人は目と耳、鼻など五感をフル稼働させ、大股開きのボーゲンでそろりそろりと滑り降りていった。もはや稜線とは言えないような真っ白な広場のどこかで、小畚山への下降を決断しなければならない。そのまま進んでしまうと、関東森—八瀬森—曲崎山—大白森—乳頭山と続く、葛根田川源流部を馬蹄形に囲む縦走路に入ってしまうことになる。絶対西に行き過ぎてはならない。永年の「山勘」を頼りに、少々急だが思い切って南南東にルートを取り、斜滑降でズルズル下る。深いガスの海を、必死になって見透かそうと試みると、やがて突然、ガスが切れた。

「やった、やった！　コルはこの下ですよ。左手に松川温泉らしい噴煙が見えるし、コルの先

はかなり急な登りになってますよ」

前方を滑っていたY君が叫んでいる。良かった。やはり先ほどの「山勘」は間違っていなかったのだ。そこはまさしく大深岳南方の分岐点と小畚山の間のコルで、左手、東側の噴煙と音は予想したように松川地熱発電所だった。すべてが計算どおりだと確認できた瞬間、3人とも思わずその場にへたり込んで、「今日の半日は、読図のドクター・コースだったね」と握手、握手。そして、最後の力を振り絞って小畚山を越え、三ツ沼と思われる大雪原で幕営する。夜に入って降雪が本格的になった。

最終日、朝になっても雪は降りやまず、視界も今までで最悪の状態。昨日の行動で大分自信を持ったので出発を決意したものの、この先はさらに地形に特徴がない。だだっ広い三ツ石山の斜面を右往左往しながら越え、指導標を掘り起こして方位を確認し、ガスの中に三ツ石山荘を探し出す。ここまで来ればもう安心だった。八幡平でもあった、赤丸に数字入りの鉄板の指導標がしっかり立っており、我々を大松倉山、犬倉山へと導いてくれた。目を皿のようにしてガスの中で必死にルートを探していた、先刻までの時間がまるで嘘のようで、フィナーレの網張スキー場に滑り込んでいったときは、華やかで場違いな舞台に登場した、村芝居の役者のような心境だった。



大松倉山山頂から真正面の岩手山に向かって進む（下山後、翌日再び登頂したときの写真）

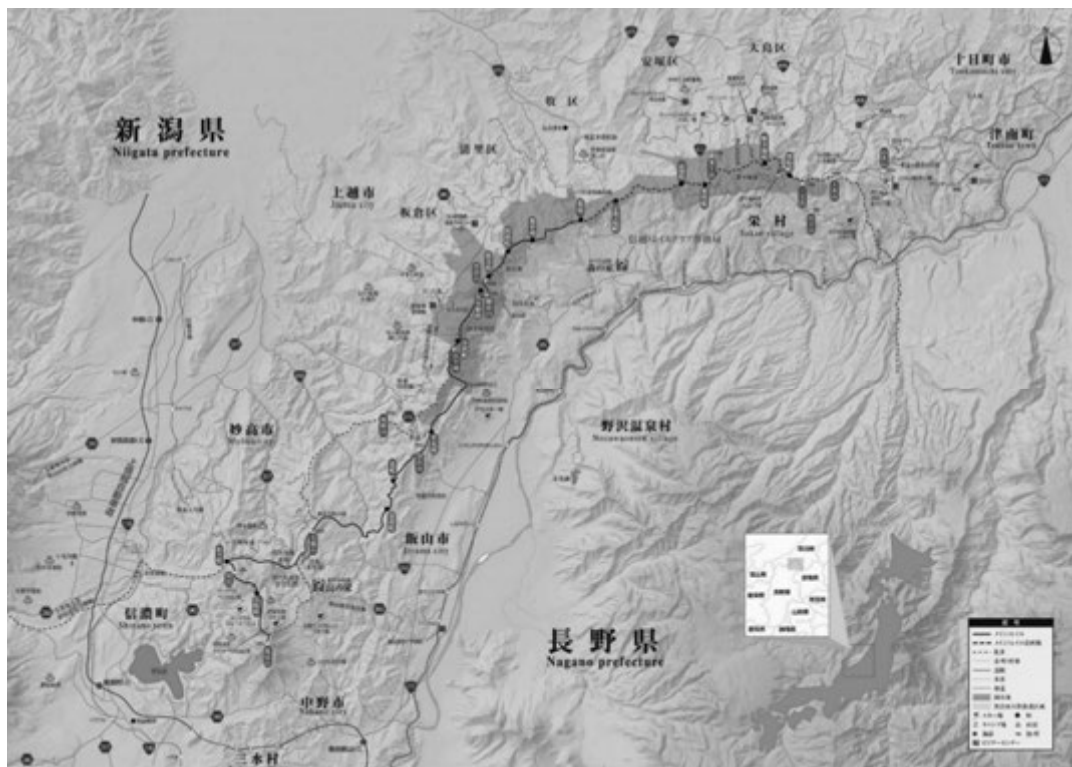
信越トレイル 10 年の変遷から見た

「歩く」ということ

NPO 法人信越トレイルクラブ事務局長 大西宏志

信越トレイルの概要

日本海から約 30km、長野と新潟の県境に、標高 1000m 級の山並みが続く^{せきだ}関田山脈がある。ここは冬には積雪が 8m を超える、世界でも有数の豪雪地帯であり、雪国ならではの自然と文化、そして、歴史が育まれた里山である。ブナ林に囲まれ、かつては信越地域の物資や人の往来が盛んで、戦国の歴史にもゆかりがある 13 の峠道があった。信越トレイルは、この関田山脈の尾根沿いに連なるトレッキング・ルートである。地域連携に関する調査事業から、新潟と長野の県境の尾根沿いにトレッキング・ルートを造る構想が生まれたのが 2000 年。2004 年には NPO 法人信越トレイルクラブが設立され、そこから自然や動植物の調査、ルート設定、トレイル維持のシステム構築などを経て、現在の全線 80km が開通したのが 2008 年 9 月。昨年で全線開通 10 周年を迎えることができた。



信越トレイル全体図

ロングトレイルはアメリカ発祥の文化であり、その「道」は山の頂上を目指すためのものではなく、多種多様な自然や、それらと共生してきた地域の文化や歴史、人々との触れ合いを楽しむための「歩く道」として造られている。信越トレイルクラブの理事であり、バックパッカ

一で作家の故加藤則芳氏の提唱により、その理念を色濃く受け継いだ信越トレイルは、豊かな関田山脈の自然や豪雪地帯の文化、郷土の食事なども含めた「歩く旅」として楽しむことができるフィールドとなっている。



信越トレイルのイメージ

信越トレイルの維持管理の特徴としては、官と民との連携がある。信越トレイルの多くの区間は国有林内に整備されている。2004 年、信越トレイルクラブと林野庁との間でトレイルの維持管理、利用に関する協定が締結されたことで、円滑な整備作業が可能となった。また、信越トレイルはエリアごとに行政および民間を含む 20 の団体により管理区域を定め、それぞれが整備を行っている。さらに整備作業は、その多くがボランティアの力によって行われている。整備作業には毎年、年間延べ 500 名ほどのボランティアの方々が参加している。地元の森林管理署の協力を得ながら、関係する県や市町村が協力し合い、そしてボランティアの方々によって、信越トレイルはこれまで維持・管理されてきた。

また、信越トレイルの理念のひとつに「生物多様性の保全」がある。重機を使用した整備や補強を意図的に排しているため、人の手が入らなければ数年で草木に覆われる。現在でも整備はマニュアルに添って、貴重な植物を保全し、必要以上の木々の伐採を行わないこと、補修する際はなるべく現地にある素材を利用すること、などが守られている。



トレイル整備ボランティアたち

ハイカーの変遷

信越トレイルの利用者は、開通当初は中高年のハイカーが多くを占めていたが、若い女性の山への関心が高まったことや「ロングトレイル」というワードが国内で注目を浴びたことで里山や低山志向の方が増え、年齢を問わず多くの方々に利用されるようになってきた。そのなかには関田山脈の景観・自然・植生に親しみ、この地域に思い入れを持って繰り返し訪れていた方も多し。

2012 年、トレイル上にテントサイトがオープンしてからは、これまで縦走登山に親しんできた方やアメリカのハイキング・カルチャーの流れを汲んだ若者など、野営しながらのスルーハイク、「長く歩くこと」を目的とするバックパッカーの姿も見られるようになり、多様なスタイルのハイカーが日本全国から訪れるようになった。ハイカーの方からは、地元の方々のハイカーに対する理解や協力によって、安心して楽しく歩ける環境が信越トレイルにはある、との高い評価をいただいている。地元の人がハイカーを受け入れてくれるからこそ、彼らは地域と関わることができ、それが信越トレイルのロングトレイルとしての大きな魅力につながっている。

ハイカーの数は年々増加しており、2018 年度は推計 3 万 8000 人の利用があった。また、北陸新幹線飯山駅・上越妙高駅の開業から 4 年が経過し、外国人ハイカーの数も徐々に増加している。外国人ハイカーは熊野古道や中山道などを歩いた経験がある方が多く、さらなる日本固有の文化や地域に触れたいとの気持ちから信越トレイルを訪れている。彼らは「歩くこと」だけに特化するわけではなく、その地域の文化や人と触れることも求めている。インバウンド系の旅行会社のツアーでは、トレイル周辺の宿泊施設に滞在するだけでなく、トレッキングと併せて、紙漉き体験やお寺巡りなど、トレイルの麓の地域性や文化を体感できる要素が組み込まれ、満足度の向上や地域活性の実績につながっている。



外国人トレkkerたち

次世代の担い手

現在、信越トレイルの整備に参加されるガイド・整備ボランティアの多くは、信越トレイル開通前後、トレイルの開削から携わってきた方々が最も多い。彼らは今も情熱と志を持ってトレイル整備に携わってくれているが、高齢化の波が避けられないのも事実である。持続性が求められるトレイルの維持管理において、トレイル運営・管理を次世代に引き継ぐことは大きな課題であり、避けられない事実である。そのようななか、少しずつではあるが、新しい整備ボランティアも増えつつある。信越の自然や信越トレイルに親しんできた周辺地域在住の方々が、仕事をリタイアされたのを機に「これから地元に役立つ活動をしたい」「これまで何度も歩いていたので、これからは整備に関わりたい」との思いから参加してくださっている方が増えてきた。また、都心など他地域からトレイル整備に参加される方もいる。これらの方々は、海外のトレイルを歩いた経験を持ち、成熟したトレイル文化やトレイルの多くがボランティアの手によって形作られていることをその地で感じ、「海外のトレイルで感じたことや受けた恩を、日本のトレイルに返したい」という思いが強く、また「歩く」ことに加え「トレイルを造る、参加する」ことにも強い関心・意識を持っている。アメリカのトレイルのコンセプトに学び、「生物多様性の保全」を核に手作りでトレイルを管理してきた信越トレイルは、こうした方々からも関心を持っていただけるようになりつつある。

苗場山への延伸

現在、信越トレイルは 2020 年秋を目途に、その全長をさらに延ばして苗場山までつなげようという、新たな局面を迎えている。ハイカーの数が年々増加しているとはいえ、地域経済への効果を考えるとまだまだ大きいとは言えない。延伸はこれに対する方策の一つであるが、それだけではなく、ハイカーがより多様な文化に触れられるという点で、より魅力的なものにな

る。これまで関田山脈というエリアにあったトレイルが苗場山まで延びることで、日本の秘境とも呼ばれる「秋山郷」という新たなエリアを通ることとなり、異なる2つのエリアを1つのトレイルが結ぶことになる。また、ロングトレイルというアウトドア・アクティビティをより楽しいものにするには「道そのものが長いこと」が重要な要素にもなる。より長距離となるトレイルはそれ自体がロマンであり、トレイルとしてのブランド力を高め、また、ハイカーの挑戦欲をかき立てる。

信越トレイルクラブ事務局では現在、延伸ルートの調査を進めている。有識者の昔話を聞き、実際にその現場に足を運ぶと、現在の信越トレイルとは全く異なる自然環境や地形があり、昔、その道を使って生活していた面影が感じられる。そのような要素が新たに加わり、よりロングトレイルとしての厚みが増すことで、信越トレイルをより一層「魅力的な道」にしていきたいと考えている。



苗場山延伸イメージ

最後に

日々の生活がますます複雑化・IT化する時代において、ロングトレイルを歩くという、ただ「長く歩く」ことに特化したシンプルなアクティビティは、人間が本来生活を営む上で必要とされる基本的な活動であり、その本質はこのような時代だからこそ、これからより一層求められていくものと考えられる。さらに「歩く」だけでなく、「地域を体感する」「トレイルをつくる」という要素も地元・ハイカー双方の意識として育っており、運営側もそうした想いに応えられる取り組みを行っていかねばならない。信越トレイルがこれから50年、100年と地域をはじめ多くの方々に愛され、引き継がれ、そして、このトレイルを介して多くの交流が生まれ、さらに誰もが安心して利用できるトレイルであり続けるために、引き続き皆様とともにこの活動を継続していきたい。

文化としての long-distance trails

佐藤 有希子（アパラチアントレイル スルーハイカー）

はじめに

私は物書きではない。昨年 AT をスルーハイク※した、ただの^{いち}ハイカーである。

この寄稿は、私個人が経験した、私的で随意的な歩き旅の一端を、私自身の思考や肌感覚をベースに切り取り、言語化したものだ。これに関わる取材行為や出典元の信頼性検証などは一切行っておらず、内容は極めて主観的であることをお断りしておく。

※1 年間で同一の long-distance trail を全線歩き通すこと。

私が歩いた AT とは

Appalachian Trail (AT、正式名称 Appalachian National Scenic Trail) は、アメリカ合衆国東部を南北に走るアパラチアン山脈沿いに設けられ、南の起点ジョージア州 Springer Mountain から北の起点メイン州 Mount Katahdin まで 14 の州に跨がる。いくつもの国立・州立公園を通り、その距離は 2,190.9 マイル (3,526km 〈2018 年時点〉) に及ぶ。人の生活圏からは比較的近く、毎年およそ 2,000 人がスルーハイクに挑戦し、その成功率は 20%程度と言われている。

1968 年にアメリカで初めて国定景観歩道に指定された AT は、1921 年に Benton MacKaye により構想が提唱され、翌年 1922 年着工、1937 年に開通した。現在は同国西部にある Pacific Crest Trail (PCT、2,653 マイル 〈4,270 km〉)、Continental Divide Trail (CDT、3,100 マイル 〈4,989 km〉) と並び、アメリカ 3 大トレイルの 1 つに数えられる。

私は 2018 年 4 月 2 日から 9 月 24 日 (現地時間)、176 日間をかけてその AT を NOBO (Northbound、北上) でスルーハイクした。期間中ゼロデイ (停滞日) を 15 日設け、日ごとのペースは平均 14 マイル弱 (約 22 km) であった。

人生の節目とスルーハイク

私が AT を知りスルーハイクに挑戦した経緯一発端は、2008 年に NHK で放映されたドキュメンタリー番組だった。GID (Gender Identity Disorder) により当時、精神的均衡を大きく欠いた私は、勤めていた会社を辞め、実家でぼんやりとテレビを眺めるだけの無為な日々を送っていた。そんなときに、大きなバックパックに衣食住のすべてを詰め込み、ウィルダネスの中を黙々と歩き続ける、薄汚れた AT スルーハイカーたちの姿が画面に映ったのだ。とてつもない距離を人間の 2 本の脚で移動する行為自体に私は驚愕し、同時に彼らが口を揃えて語る「冒険」「自分探し」「人生のリセット」というキーワードに強く惹き付けられた。

それからほどなく再就職するも、今度は残業・休日出勤の毎日。そして、東日本大震災が起こり、溜まった代休をすべて使い、2 週間のボランティア活動に出る。その際、寝泊まりに必要なテントを購入したことがきっかけで、私は山歩きを始めた。次いで AT スルーハイカーであ

り、バックパッカーで作家の加藤則芳氏（1949～2013）の存在に影響を受け、AT をモデルに造られた信越トレイル（80 km）を 2016 年にスルーハイクしたことで、AT に対する憧れが欲求へと変わり、11 年間勤めた前職に昨年、別れを告げ旅立った。

私と同様に仕事を辞めるか、転職の合間を縫いスルーハイクに来たハイカーが、AT では大半を占めていたように思う。次いで多いのは引退や卒業といった具合だ。実際、アメリカ 3 大トレイルほどの距離にもなれば、スルーハイクを達成するためには、現状の生活を一時的に停止させることとなる。長期休暇や休職を許されるとか、ホームスクールで学ぶといった環境がない限り、仕事をしながら、または学校へ通いながら数千 km を 1 年以内に歩き通すのは、簡単なことではないだろう。

また、人生で初めて long-distance trail のスルーハイクに挑戦するという者も多かった。AT を歩く理由やタイミングとして退職、引退、卒業のほか、結婚、離婚、自身の病気、身近な人の生死、チャリティ活動など、老若男女国籍問わず、何かしら「人生の節目」を挙げたことは非常に興味深い。



各々の人生について語らうひととき

ちなみに、AT は大部分が湿潤な森の中を通るため、PCT や CDT と比べ解放感が薄いと言われている。AT を選ぶハイカーには、内向的側面を持つ者が多い傾向にあるという説があるが、確かに、ときに静かな図書館にも似た雰囲気醸す AT は、じっくり考えを巡らせながら歩きたい人には適したトレイルかも知れない。

トレイルの存在感

最近、日本国内の各メディアで「ロングトレイル」という言葉を目にする機会が増えてきたが、

そこには常に「景色や自然を愛で、その土地の食べ物や歴史を楽しみながら気ままに、気軽に里山歩きをする」ふわっとしたイメージが付きまとい、どうも「トレイル」という絶対的な姿が見えず、私は違和感を覚える。

トレイルとは物理的な道であり、同時にハイカーにとって生活の場であり、戦いの場であり、心の拠り所である。ハイカーはトレイル上で水場を探し、食事を摂り、排泄をし、寝泊りを繰り返し、食料を補給し、人々と出会い別れ、息を呑む景色に目を奪われ、天候に翻弄され、陰湿な地形に喘ぎ、岩や泥や木の根に足を取られ、徒渉で冷たい水に身体をさらし、ヤブをこぎ、虫に刺され、毒性植物にかぶれ、ヘビを跨ぎ、ザックをネズミにかじられ、熊に怯え、ときには怪我を負い、体調を崩し、履いた靴を擦り減らし、汗だくになりながら、トレイルによって切れ目なく導かれ日々前へと進む。トレイルがなければ、そこにハイカーは存在し得ない。道なき道を切り開くのは、探検というまた別の分野のお話だ。



トレイルがハイカーを導く(左:バージニア州、右:メイン州)

また、アメリカにおける **long-distance trails** はその距離が長大であるが故に、ハイカーだけでなく一般の人々の目にもロマンとして映り、その存在がときとして彼らの好奇心や冒険心に火をつける。私がハイク 2 日目から 3 週間ほど行動をとにしたセクションハイカー[※]は、ペンシルベニア州にある自宅のすぐ近くに「AT という山道が通っている」ことは知っていたが、特に関心を持っていなかった。だがある日、Fontana Dam (AT 上、Great Smoky Mountains 国立公園南端のトレイルヘッド) へ観光に訪れた際、たまたま通りがかったスルーハイカーと言葉を交わし、「AT という 1 本の道がジョージア州からメイン州まで続いている」事実を知って衝撃を受け、魅了される。その後、詳しくリサーチを行い、自らも AT ハイカーとなることを選んだ。

※Long-distance trail の一部を歩くハイカーのこと。

愛着と信頼

数千キロに及ぶ long-distance trails をスルーハイクするというのは、その実、大変なことがある。時間もお金（普通の観光旅行と比べたら格段に安上がりだが）も掛かるし、それなりの体力と気力も必要だ。いくらロマンを感じるとはいえ、一般の人々にとっては少々敷居が高い。しかし、彼らを感じるその「隔たり」は、ハイカーたちに対する「敬意」へと形を変え、トレイル・エンジェルとトレイル・マジック※を出現させる。自分には到底真似することのできない、無謀とも思える旅をするハイカーたちの姿を見聞きするうちに、その挑戦を応援したいという、純粹な欲求が芽生えるのだ。そして、ハイカーたちが歩く long-distance trail が自分の暮らす地域を通っていることを誇りに思い、トレイルの存在に愛着を感じ、トレイル・エンジェルとなるのである（トレイル・エンジェルの中には、自身も過去に long-distance trails をスルーハイクやセクションハイクした経験のあるハイカーも多くいる）。

一方、ハイカーたちとはいうと、トレイル上で受ける食料や物資の援助、トレイルヘッドートレイルタウン間のヒッチハイク、休憩・宿泊・キャンプのために開放された教会や住宅、ホステル・モーター・レストラン・アウトドア用品店で受けられる自己申告制のハイカー割引、等々、トレイル・マジックを心待ちにする。トレイル・エンジェルたちに大きな信頼を寄せ、彼らの善意に支えられながら long-distance trail を歩むのである。

なお、これはアメリカ国内の話だ。そこに long-distance trail が介在し、ハイカーとトレイル・エンジェルという関係性の下に互いが信頼し合わなければ、見ず知らずの人間同士が初対面の瞬間から無条件で心を許し、絆を結ぶことは容易ではないはずだ。

※トレイル上または周辺地域において、無償でハイカーをサポートする人々とその行為・物資のこと。



トレイル・マジックで寛ぐハイカーたち

街にハイカーがいる当たり前の風景

私が半年間の旅の中で特に心地良いと感じたのは、トレイルタウンではハイカーが特別な存在ではない、ということだった。ハイカーはまるで野良猫のように自由に街を行き来し、街の住人たちはそんなハイカーの姿を見ても、特に不思議に思う様子がない。恐らくその街を訪れるハイカー人口が毎年、一定数あることが大きな理由であろうが、日本の社会であれば明らかに警戒されそうな、小汚いハイカーたち（hiker trash—親しみを込めて long-distance hikers をこう呼ぶ）が、アメリカのトレイルタウンでは緊張感なく受け入れられている。ハイカーと住人をつなぐ要素は何か。それはトレイル・エンジェルの存在ではないだろうか。

ハイカーはあくまでもハイキングを目的としてトレイルを歩き、その道すがら街に立ち寄る。確かに身形は良くないが、悪事を働くわけではない。そのことをトレイル・エンジェルは承知し、だからこそ彼らは身銭を切ってハイカーをサポートする。トレイル・エンジェルの行動や意識は、一定期間を経て街の中に伝播し、初めはハイカーの存在に対し好意的でなかった住人も、「ハイカーは怪しい人ではない」と認識していくのだろう。

加えて、少なくとも私が訪れたトレイルタウンは、どこもハイカーにとっては治安が良いように感じた。象徴的な例として、レストランに入る際バックパックの持ち込みが許されず、店の外に置いておくことが多いが、不思議なことに置き引きされる心配すらない。繰り返すが、これはアメリカ国内の話だ。トレイルタウンがほぼ片田舎ばかりということもあろうが、ハイカーが容認され、街に溶け込んでいなければ、なかなかあり得ない光景ではないか（バックパックの放つ臭いが人を遠ざけているから安全、という可能性も捨てきれないが）。

お陰でハイカーたちは、街全体にやんわりと見守られながら、ひとときのオフトレイルで安らぎを得ることができるのである。



街のコンビニエンス・ストアで束の間の休息

日本のロングトレイルに見る未来

日本にもお遍路や熊野古道、塩の道や鯖街道などの道々がすでに存在し、ロングトレイルとも称されるが、それぞれ信仰や修験、交易といった本来の目的があり、「道を歩くこと」は二次的要因である。翻って **long-distance hikers** は、「道を歩くこと」をまず求める。そのほかのことはすべて歩き旅の中に出現する二次的要因なのである。この乖離こそが、今、日本で広まる「ロングトレイル」という言葉に対して私が感じる違和感の根源なのだ。

私は AT をスルーハイキングして、**long-distance trails** は歩くハイカーがいてこそそのものであると感じた。

ウィルダネスの中では、ハイカーが繰り出す一步が生い茂る雑草を踏み、土を均し、岩を削ることで道を刻む。その道が通る街では、ハイカーの往来が住人との交流を呼び、商売が生まれて経済が回る。非常にシンプルな構造だが、そこにハイカーがいなくてはトレイルは定着しないのだ。どんなに長く立派なトレイルを造っても、ハイカーが歩かなければ「道」は消えてしまう。先に述べたとおり、トレイルがなければハイカーが存在し得ないように。

「ロングトレイル」ブームの高まりに期待する、日本国内の声は多いだろう。現に「ロングトレイル」を自らの手で造り上げようと懸命に活動する人々が各方面にいることも、私は知っている。だからこそ私は、「ロングトレイル」が私たちハイカーを「歩かせてくれる道」であって欲しいと願う。まるで地面を水が流れるように、ハイカーの脚が自然とルートに沿って向かう、そういう道であって欲しい。そして、その道をたどって、生まれ育ったこの日本の美しい景色を見、地元の方々と触れ合い、美味しいものを食べ、隠された歴史に思いを馳せ、遥かなるゴールを目指したいと思う。

日本の「ロングトレイル」が、アメリカの **long-distance trails** 文化のように醸成し、人々の生活に根付く日が待ち遠しい。

トレイルで地域資源を掘り起こす

～浅間山古道 復活の道程～

安藤伸彌（安藤百福センター事務局）

浅間山は世界有数の活火山として知られており、その雄大な山容から、富士山と見紛う※ほどの名峰として多くの人々に親しまれている。しかし、そこが古くから山岳信仰の対象とされ、多くの修験者（山伏）が登拝してきた霊山であることは、意外に知られていない。まして、そこに至るまでの古道があったことなど、人々の記憶から忘れ去られてしまっている。今回は、この古道復活の道程を通じて、トレイルによって埋もれていた地域資源を掘り起こす試みを紹介したい。

※NHK ニュース「おはよう日本」のエンディングで、浅間山を富士山と間違えるハプニングが2度発生している。1回目は2013年1月20日で、浅間山の映像に「お別れの映像は群馬県・前橋からの富士山です」と伝え、誰も訂正できないまま終了。2回目は2014年1月21日で、高崎からの映像に写る白い山に「霞んでいますが、富士山も見えています」と話してしまい、翌日「昨日のこの時間の、高崎市からの富士山と伝えたのは浅間山でした」と訂正した。

古道を探せ

ことの発端は、浅間・八ヶ岳パノラマトレイルの新コースの情報収集をしていたときだった。現在の浅間山登山口は天狗温泉浅間山荘と車坂峠の2ヶ所だが、昭和30年代初めまではバスが通れるような道はなく、ほとんどの登山者が麓の集落から歩いて行ったという。小諸からの参詣道も、古くは江戸幕府の命で作成された「信濃国絵図」（正保・元禄・天保）に記されているし、大正時代に建立された「浅間登山元標」は、今でも街外れの神社に遺されている。考えてみれば当たり前だが、確かに古道は存在していたのだ。



「元禄の信濃国絵図」より（上田市立博物館所蔵）

ところが、昔の文献を漁っても、通過する主なポイントの説明や概略図があるばかりで、地図で正確なルートが描かれているものはない。そこで、古老の話や「今昔マップ on the web」、公図などを頼りに古道を推定、できたばかりの DMO「こもろ観光局」に古道を歩くツアーを持ち掛け、調査を開始した。

見通しの利く冬季に実地踏査をしたところ、新しい舗装路に取って代られたり、高校の敷地に分断された所もあったが、逆に国土地理院の地図から抹消された古道跡をヤブの中から発見したり、道中に設置されていた道標（丁石）を約 20 基見付けたり、信仰を表す石仏・石碑がいくつも遺っていたりと、多くの収穫があった。さらに、登山道から外れた沢筋には、かつて修験者が修行に励んだという大きな洞窟があり、江戸時代の無縫塔（僧侶の墓）も見付かった。これまでは気付かなかった、あるいは気付いても意味が分からなかったものが、古道や信仰を軸に見てみると、これほど多くの見所にあふれているとは、正直驚かされた。

これと並行して文献調査も行った。郷土史家による本『浅間山信仰の歴史』などを頼りに調べを進めると、浅間山信仰の実像が次第に明らかになってきた*。浅間山の噴火は鬼の仕業とされるが、その鬼伏せに虚空蔵菩薩が本地仏として祀られたため、佐久地



修験の洞窟



虚空蔵菩薩像

方には今でも 40 基もの虚空蔵菩薩像が遺されていること、時々流行り信仰の影響を受け、垂迹神がたびたび取って代られていること、富士講や御嶽講よりも早く、室町期から一般庶民向けに登拝が行われていたこと、江戸時代の護符の版木や神楽面が今でも遺されていること、廃仏毀釈などを受け、明治初期に修験道は衰退したものの、その後、大正期の登山ブームで多くの山小屋が建てられたことなど、ほとんどの人にとって知られざる歴史を垣間見ることができる。

しかし、そこからさらに踏み込んで調べようとする（例えば、山小屋はどういった経緯でいつごろなくなったのか、遺された霊神碑がどのような人物を祀ったものなのか、学校登山はいつまで行われていたのか、など）、とたんに壁に直面する。詳細な記録がほとんど遺されておらず、人々の記憶からも消え去っているからだ。惜しむらくは、この調査の前年、最後の修験者が亡くなられてしまい、講も解散してしまったため、浅間修験の話を持直接聞くことができなかったこと。それでも、過去の聞き取りなどを参考に、その実像に迫っていった。

※江戸後期に記された『浅間山大変記』によると、修験道の開祖とされる役行者^{えんのぎょうじや}（役小角^{えんのおづね}）が持統天皇 9（695）年に浅間山に登拝し、開山したという。また、室町後期の『役行者本記』には、浅間山が「役小角経歴伝承地九十箇所中之三十二番」に取り上げられており、各地から修験者が訪れていたことが推察される。



江戸時代の護符の版木と神楽面

思わぬ反響

こうしてある程度目途が立ったところで、「浅間山古道トレイル」と銘打って、2018年の5月下旬に1泊2日でモニターツアーを開催することに決定（こもろ観光局主催、安藤百福センター協力）。準備不足で5月初めに広報を始めたため、こんなマニアックなツアーに今から人が集まるのかと、一抹の不安を禁じ得なかったが、今回は無料で参加できるとあって、なんと受付開始から2日で満員御礼となった（定員20名のところ、あっという間に50名以上の申し込みがあった）。山岳信仰や古道に興味を持つ人が増えているのは承知していたが、思わぬ反響に身の引き締まる思いであった。

その後、廃道になっていた箇所草刈りや下見を経て、あっという間に当日を迎えた。参加者の多くは首都圏からで、それだけでも

期待の高さが伺えるが、地元メディアも3社が取材に訪れた。このときはまだ浅間山の登山規制が緩和されておらず、外輪山から車坂峠にエスケープせざるを得なかったが、2日間とも絶好の好天に恵まれたこともあり、ツアーは満足度の高いものとなった。

モニタープログラム

かつて登拝された修験者の山
浅間山古道トレイル

2018年5月26日(土)～5月27日(日)

かつては神聖な山として、修験道に利用された浅間山。山頂は海も多くの一帯登山者に利用されてきた。近年の登山道整備、登山者から山頂への登山道が整備され、人気が高まって、登山道の新たな魅力を発見しよう。

■対象:中学生以上
■定員:20名(最少参加10名)
■参加費:モニター・修験道 無料
■集合:小諸駅 EN81 9:30
■解散:車坂峠 EN81 16:00

コースのポイント

- 近年の登山道整備で「小諸駅」から歩きやすい。
- 登山ガイドが、浅間山の歴史と登山の歴史、自然に伝わる故事・伝説などを案内します。
- 天気が入って暑くなるなどの危険がある。登山者に注意します。
- お天気の良い日は、浅間山の山頂まで案内いたします。

日程

9:30 小諸駅集合、2018年修験道、出発⇒八幡神社⇒天宮グラウンド(昼食)⇒15:30 天宮山頂登山経路・チェックイン

7:00 準備運動、出発⇒八幡神社(昼食)⇒Jバンド⇒16:00 車坂峠到着、解散(バス乗降)

お申し込みの窓口
一般社団法人 こもろ観光局
〒386-0001 長野県小諸市小諸1-1-1
TEL: 0267-22-1234 FAX: 0267-46-9077

主催:一般社団法人 こもろ観光局
協力:安藤百福センター

モニターツアーのチラシ

そのため、終了して間もなく、少なくとも参加者の7名がブログやSNSに投稿し、感動を共有した。アンケートでも「普通に登山するだけでは絶対に知らないポイントがたくさんあり、興味がある人にはたまらない内容だった」「修験者や昔の方の想いや苦労を感じながら、タイムスリップしたような感覚でトレイルを楽しめた」「今まで何度も歩いている登山道なのに、初めて見るもの、知ることが本当に多く、驚いたと同時に、説明を聞くことにより違った見方で歩くことができた」といったコメントが寄せられ、メディアを見た人からは、早くも次回についての問い合わせがあったという。



朝日新聞 長野版 (2018. 6. 3)



参加者が作成したイラスト

環浅間の活性化へ

今回はモニターツアーだったため、古道が日常的に復活したわけではない。実際、まだ古道を知る人はほとんどいないため、夏の間に草が生い茂り、歩ける状態ではない箇所もあった。道標の整備などもこれからだが、一部を浅間・八ヶ岳パノラマトレイルのコースに組み込むことで、認知度を上げていきたいと考えている。

安藤百福センターでは、浅間山の新たな魅力を発掘しようと、数年前から「ダイヤモンド浅間」「パール浅間」のツアーを行っているが、この古道トレイルも、そうした取り組みの一つと位置付けることが可能だ。幸いにも、このモニターツアーの3ヶ月後に登山規制が緩和され、登山者が大挙押し寄せるようになったが、それがいつまでも続かないのは、浅間山の歴史が物語っている。登山だけではなく魅力的なプランを用意しておくことは、地域観光の活性化には不可欠である。

この古道トレイルにインスピレーションを受け、こもろ観光局では3月下旬から「こもろ天狗」※の斬新なPR動画を流しているし、この夏のダイヤモンド浅間ツアーでは、かつての「浅間山宵の参拝」（真夜中に登って早朝に登頂する習わし）を復活させようと考えている。『山と溪谷』2019年6月号にも、浅間山が見開き4ページにわたって取り上げられ、古道トレイルも紹介されているが、火山と百名山だけではない、浅間山の魅力を知っていただければ幸いである。

また、浅間山の北麓は2016年に日本ジオパークに認定されており（南麓にも広げる構想がある）、新たな登山道の整備も進められているが、これが実現すれば浅間山を周回するトレイル構想が現実味を帯びてくる。安藤百福センターとしても、浅間山ジオパーク推進協議会と連携して北麓のダイヤモンド浅間・パール浅間ツアーを始めており、環浅間の活性化につなげていければ、と思っている。

古道トレイルのツアー本番は、1年の充電期間を経て、いよいよ6月上旬に行われる。調査は地道に継続しており、眠っている地域資源をさらに掘り起こすべく努力している（ガイド用の説明資料は、A4版ですでに100頁を超えている）。幻とも言える信仰の歴史を探ることで見えてきた世界に、多くの人が誘われ、古くて新しいトレイルが歩かれるようになることを願っている。

※浅間山には、大天狗「^{こんべいぼう}金平坊」がいるとされ、嘘つきや盗人などの不心得者が入山すると、谷底に突き落とされたり、首をねじ切られたりするという伝説がある。江戸後期に出回った「日本天狗番付」では、東日本前頭十枚目になるほど知名度があったという（浅間連峰の剣ヶ峰は、かつて「天狗岳」と呼ばれ、大天狗の住処とされていた）。



浅間山の噴火口（現在は立入禁止だが、かつてはお鉢めぐりが盛んに行われたという）

みちのく潮風トレイル

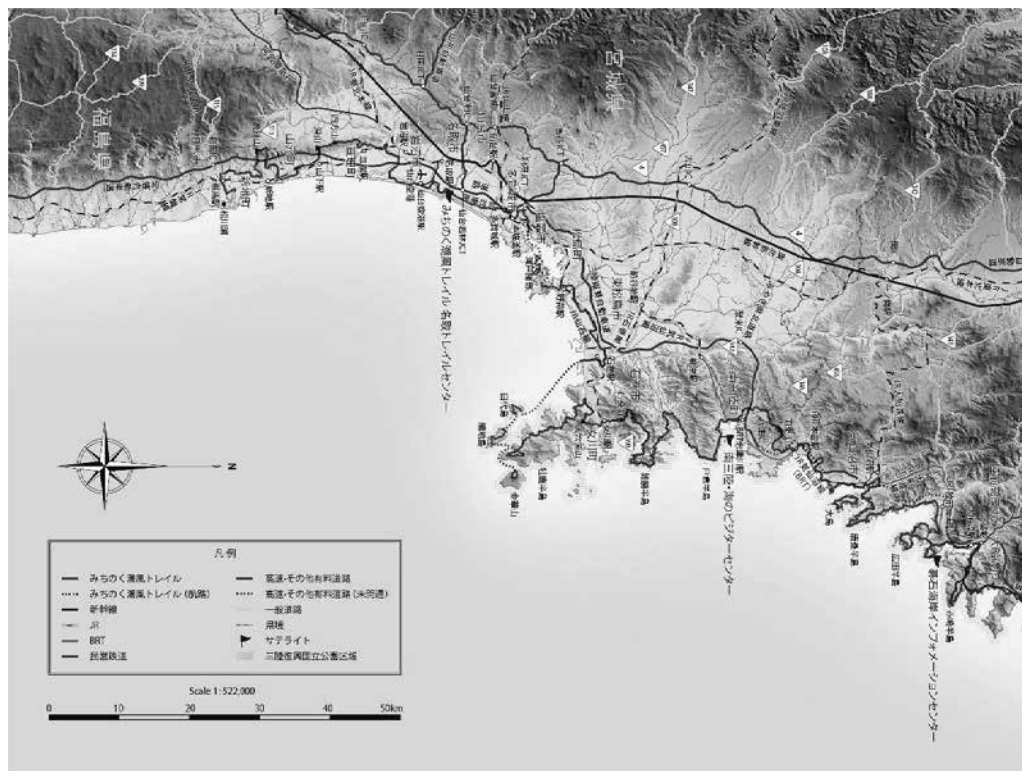
特定非営利活動法人みちのくトレイルクラブ事務局長 関 博充

1,000km を超えるロングトレイルの誕生

青森県八戸市から福島県相馬市にかけての沿岸部を中心に、全長 1,000km を超える「みちのく潮風トレイル」が、2019 年 6 月 9 日に全線開通する。この事業は、2011 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震の後、環境省が被災地において進めてきた「グリーン復興プロジェクト」の一つである。地域住民と協議しながらトレイルのルートを策定し、2013 年 11 月以降、順次開通させながら進め、間もなく一本につながろうとしている。

長い距離を歩く旅の醍醐味は、生活に必要な最低限の道具一式を背負い、季節が移ろうほどの長い期間、自らの脚で旅を続けることである。1,000km もの道程を一度に歩くには、1 ヶ月半以上の月日を要する。

ところで「みちのく」とは、「みちのおく」が訛^{なま}ったものとされる。古事記には「道奥」と記載があり、「みちのおく」と訓じた。この「道」は、7 世紀後半に律令政府によって制定された「五畿七道」と呼ばれる行政区分に由来する。畿内から山間を東に向い、下野国（現在の栃木県）を通る「東山道」がある。その「道」の「奥」、都から遠い奥が「道奥国」であり、その後「陸奥国」と表記されるようになる。次章では、「道の奥」に続く 1,000km を超える道を紹介する。



みちのく潮風トレイル・ルート全図（南部）

多様な性格の路線

「みちのく潮風トレイル」の最南端は、福島県相馬市松川浦である。ここから宮城県石巻市西部までは、東北地方最大の仙台平野を北上するルートである。最終氷河期が終わるおよそ1万年前以降、いくつもの河川から運ばれた土砂の堆積などによって、徐々に海が後退してできた平野で、ほかのエリアに比べ空が広い。広大な砂浜が広がる仙台湾は、緩やかに弧を描く海岸線が美しい。なお、道奥（陸奥）国の政治的中心施設、「国府」とされる郡山官衙遺跡（仙台市）、多賀城跡（多賀城市）はこのエリアにある。

宮城県石巻市街を抜けると、北上山地の最南端、牡鹿半島に入る。ここから岩手県宮古市までのエリアは、リアス海岸を堪能できる。この地におけるリアス海岸は、およそ1万年前に、山間の谷間の奥まで海が入り込んでできた地形で、海に突出したような半島と深い湾が繰り返す、ギザギザの海岸線が特徴である。ルートも半島と湾に沿うようにギザギザしており、潮風を感じるには絶好のロケーションである。

岩手県宮古市からトレイル最北端の青森県八戸市蕪島^{かぶ}までは、海に断崖が直面する場所が多く、直線的な海岸線に変わる。数十万年前の波打ち際でできた平坦な面が、徐々に地上に現れてできた海岸段丘が分布する。八戸市蕪島周辺は十数mの段丘だが、岩手県田野畑村周辺の段丘は標高差200m近くに及ぶ。そうした段丘に刻まれた深い谷が何度も現れるため、高低差を楽しめるハードな区間と言える。



みちのく潮風トレイル・ルート全図（北部）

こうした大地と海が生み出す絶景だけでなく、それらに育まれた動植物、そして、人々の暮らしや文化を歩く速度で楽しめる。世界有数の漁場である三陸沖の美味しい魚介類も、四季を通じて満喫できるのも大きな魅力である。また、1,000km と長い「道」であるが故に、地域ごとの違いにも気付くことができる。東北沿岸の様々な豊かさを、「みちのく潮風トレイル」を通して体感していただければと願う。

官民による管理運営体制の構築

「みちのく潮風トレイル」の最大の価値は、歩き始めたこの道が、その先 1,000km にわたり 1 本につながっていることであろう。既述のとおり、この地域の自然は豊かである。そのため、管理や整備を怠るとすぐに道が自然に還ってしまう。トレイルは、造るのは簡単で維持が困難と言われるが、部分的に道が途絶えてしまうことなく、訪れる人々が常に安心してトレイルを歩けるよう、官民の力を合わせた持続可能な維持管理体制がこの 4 年間検討されてきた。環境省、ルートが通る 4 県 28 市町村の地方公共団体、サテライト[※]と呼ばれる施設を運営する 6 つの民間団体、そして、地域住民・団体等が構成員となり、協働して道を守る体制が整いつつある。この体制を統括する施設が、宮城県名取市閑上^{みやぎけんなとりしゆりあげ}に建設された「みちのく潮風トレイル 名取トレイルセンター」であり、運営を私たち、「みちのくトレイルクラブ」が任されている。トレイル全線の情報の収集・集約と全線で共有、ハイカーに向けた発信、地域関係者との連携・連絡調整などを行い、より多くの方の協力を得ながら、東北の「歩く旅」の文化の醸成を目指している。

※三陸復興国立公園内のビジターセンターやインフォメーションセンターなど

道を育てる

「みちのく潮風トレイル」を、すでに歩き始めているハイカーも数多い。多くの関係者の連携、協力がなければ一本道としてつながり続けるのは難しい。上記管理体制のほか、この「道」や長距離を「歩く旅」を応援してくれる地域の人々、ハイカーがたくさんおり、沿線各地で国内外のハイカーを迎える体制を整えているが、まだ課題も多い。

多くのハイカーが歩く道は、国内外問わず、数十年から千数百年という時間を経て現在の姿になっている。「道の奥」にできたこの「道」を、急がずに世代を超えてじっくり育てていけるよう、この道、この地を愛するたくさんの方々の熱意や想いを結集させていきたい。



北山崎自然遊歩道〔黒崎漁港〕（岩手県普代村）



荒海水浴場（岩手県山田町）



種差海岸（青森県八戸市）



階上牧場（青森県階上町）



田束山（宮城県南三陸町）



中村神社（福島県相馬市）

画像提供：環境省、NPO 法人みちのくトレイルクラブ

ぐんま県境稜線トレイル

群馬県生活文化スポーツ部スポーツ振興課 相馬 義昭

「天空の分水嶺を歩く」稜線ロングトレイル

ぐんま県境稜線トレイル（以下「稜線トレイル」と言う）は、群馬県と新潟県、長野県との県境約 100km にわたる稜線をルートとして設定したロングトレイルであり、稜線の長さは国内最長となる。

所在地は、「日本一のモグラ駅」として名高い JR 上越線土合駅^{どあい}近くの白毛門登山口（みなかみ町）を東の起点とし、野反湖（中之条町）、山田峠（草津町）などを経由し、西の起点となる鳥居峠（嬬恋村）に至る。これは中央分水嶺とも重なる。

また、日本百名山の谷川岳（1977m）や四阿山（2354m）、日本二百名山の仙ノ倉山（2026m）、白砂山（2139m）のほか、上ノ倉山（2107m）、横手山（2307m）といった 2000m 級の高山を中心に構成されていることから、比較的上級者向けの本格的な山岳ルートがメインとなっており、まさに天空を歩いているような感覚、稜線ならではの絶景を楽しむことができる。



高山植物では、朝日岳のホソバヒナウスユキソウや平標山付近のチングルマ、野反湖やカモシカ平のニッコウキスゲなどが多くのハイカーを楽しませている。

周辺観光資源と組み合わせた地域活性化

現在、群馬県では、稜線トレイルを便宜上、谷川エリア、三国・四方^{しま}エリア、野反湖^{のぞり}エリア、草津温泉・長野志賀高原エリア、万座・鹿沢エリアの 5 つのエリアに分けた上で、それぞれのエリアでモデルコースを設定し、PR を行っている。一度に全線踏破するよりも、モデルコースごとに楽しんでいただき、数多くこの地域に訪れていただこうという趣旨である。

トレイル周辺には、水上温泉や湯桧曽温泉、法師温泉などを含む「みなかみ 18 湯」（みなかみ町）のほか、国民保養温泉地第 1 号の四万温泉（中之条町）、日本三名泉の一つ草津温泉（草津町）、乳白色の湯で有名な万座温泉（嬬恋村）といった名湯が点在する。



また、この地域は温泉以外にも優れた自然環境を活用した観光業も盛んであり、ラフティングやキャニオニングといったウォーター・アクテ

イビティのほか、バックカントリー・スキーや山スキーが多くの観光客に楽しまれている。

以上のような、温泉などの既存観光資源と稜線トレイルを組み合わせることで誘客を図り、地域活性化を目指そうという試みが、稜線トレイル事業の発端である。

これまでの取り組み

稜線トレイル事業は、2016年4月から始まった。

ほとんどのルートは、すでに利用されている地元市町村管理の登山道や一般道で構成されている一方、三坂峠から白砂山の約10kmが未開通区間であったため、新たな登山道整備が課題であった。さらに、稜線トレイルを活用した地域活性化を目指す以上、地元の理解や誘客のためのPR手法も、もう一つの課題であった。

以上の課題を踏まえ、同年6月、地域全体で事業推進を図るため、群馬県や関係4町村、環境省、林野庁、山岳団体、地元観光協会等を構成員とした「ぐんま県境稜線トレイル検討委員会」が設立された。この組織の活動を通じて、関係機関との調整や県内町村の理解を大きく進めることができた。

また、新潟県や長野県の市町村や民間団体からも、稜線トレイル事業に理解を示していただいたことから、稜線トレイルを契機とした広域連携の新たな枠組みを構築することができた。なお、これまでの主な取り組みは以下のとおりである。

■2016年度

- ・講演会【講師：田中陽希さん】の開催（6月）
- ・全線現地調査の実施（7月～10月）
- ・四阿山モニター・ツアーの実施（10月）
- ・稜線トレイル推進シンポジウムの開催（3月）
- ・ルートマップの作成（3月）



■2017年度

- ・検討委員会総会の開催（6月）
- ・講演会【講師：萩原浩司さん】の開催（6月）
- ・正式名称発表（8月）
- ・三坂峠～白砂山における国有林借受のための測量調査（7月～10月）
- ・講演会【講師：木村 宏さん】の開催（11月）

■2018年度

- ・PR動画の作成（5月）
- ・ロゴマークの作成（5月）
- ・検討委員会が「活用促進協議会」に改組（6月）
- ・講演会【講師：貫田宗男さん】の開催（6月）
- ・三坂峠～白砂山における登山道整備（6月～7月）



- ・ルートマップ改訂版の作成（8月）
- ・全線開通（8月11日）
- ・みなかみ町、中之条町、嬭恋村における全線開通記念ツアー開催（8月～10月）
- ・新規開通区間における避難小屋整備のための測量設計調査（9月～10月）

課題と今後の取り組み

2018年8月、三坂峠～白砂山に新たな登山道が整備されたが、約10kmにわたってエスケープ・ルートがなく、縦走に8時間以上要する。また、水場は1ヶ所あるものの、天候によっては涸れる恐れがある。そのような環境から「上級者向け」という注意喚起を行っているものの、その安全対策が急務となっている。そのため、2019年中に、ほぼ中間地点に当たるムジナ平に避難小屋を整備することとなった。なお、ムジナ平は、唯一の水場も近く、晴れば富士山も見える絶好の場所である。上級者の方にはぜひ訪れていただきたいスポットである。

また、地域観光資源と結び付けた活用手法の検討や国内外からの誘客、二次交通といった課題もあるが、今後、稜線トレイル活用促進協議会（2018年6月、検討委員会から改組）の中で知恵を出し合いながら検討していきたい。

事業化されてから、まだ3年が経ったところである。今後は、登山道の安全性向上を図りつつ、稜線トレイル事業に関心を持っていただける方々からの協力を得ながら、国内最長の稜線を力強くアピールし、魅力あるロングトレイルとして育てていきたい。



天空の分水嶺を歩く
ぐんま県境
稜線トレイル



第6回ロングトレイルシンポジウム

～トレイル文化を語る～

- 【日時】2019年2月23日（土）13:30～17:30
- 【会場】安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター（略称：安藤百福センター）
- 【主催】特定非営利活動法人 日本ロングトレイル協会
- 【共催】公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団（略称：安藤財団）
安藤百福センター
- 【後援】環境省、観光庁、長野県、長野県教育委員会、小諸市、小諸市教育委員会
一般財団法人 全国山の日協議会
- 【特別協賛】ミズノ株式会社

ご挨拶 安藤 宏基

（公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団理事長、日清食品ホールディングス株式会社
代表取締役社長・CEO、特定非営利活動法人 日本ロングトレイル協会名誉会長）

安藤スポーツ・食文化振興財団の理事長を務めております、安藤宏基と申します。

この財団につきましては、安藤百福^{ももふく}が創設しました。これは、日清食品の創業者の安藤百福ですけれども、今はNHKの朝ドラ「まんぷく」に出ております、「萬平」というのが私の父・安藤百福であります。「まんぷく」は、その妻・仁子^{まきこ}がヒロインとなっているドラマです。

創業者は、スポーツや自然体験が子どもや若者たちにとって大変重要だと思い、今から三十数年前に財団を創ることになりました。その中で、スポーツ大会や自然体験活動を支援し、食文化の向上に取り組んできました。また、カップヌードルミュージアムの設立をはじめ、食を創造するということも含めて、青少年の心身育成ということに重点を置き、私財を提供して財団を創りました。

そういうことで、このロングトレイルシンポジウムも後援をさせていただいているところで。創業者は野外での活動、特に歩くことが大変重要なことだと考えておりました。のちほど発表があると思いますが、日本を縦断する1万kmにもわたる長大なスケールのロングトレイルを開設するという計画もあると聞いております。当時、もちろん創業者は想像もしていなかったと思いますが、皆様方のご協力によりまして、そのような方向に今、進みつつあるということは、財団を創った趣旨に添っていると大変喜んでおります。

私も父の代からいろいろ行っていることがありまして、この財団の理事長もそうなんですけれども、本業は日清食品の社長で、責任者であります。そういう中でチキンラーメンを作っ



おりまして、ちょうど今年で 60 年になります。半世紀以上にわたって、60 年間も皆様方に支持され、売れているというは大変光栄なことです。60 年間の中で今が一番、過去最高の売り上げとなっており、これはまさに「まんぷく」効果かと思っております（拍手）。

本当に、皆様方にお礼を申し上げなきゃいけないところで、大変ありがたいことであります。そういう現状ですが、これからまた時代もどんどん変わっていくでしょうから、消費者の皆様方の嗜好に合わせて、新しい商品をどんどん作っていきたいと思っております。

ところで、またドラマに戻りますが、ちょっと恥ずかしいんですけど「源ちゃん」という子どもがいて、あれが私なんです（笑）。なんだかわんぱく小僧なんですけれど、実は本人はおとなしく、正義感の強い子どもでした（笑）。

この後も西村元貴さんという俳優が私の役をやってくれるそうなんですけれども、なかなかハンサム・ガイで、彼はいい演技をしてくれると期待しています。それはともかく、今日はロングトレイルの話でしたね（笑）。

日清食品はもう一つ、大坂なおみ選手と錦織圭選手をサポートしています。テニスの好きな方はもちろんご存じかと思うんですけども、とにかく日本選手がテニス・プレーヤーとして世界で戦えるようになったことを、大変喜んでおります。

地道ですけども、2 人とも日清食品の所属ですから社員という形になっており、サポートさせていただいております。大坂なおみ選手は本当によく頑張ってくれて、このようにメジャー・タイトルを 2 つも取るようになったわけですが、これも皆様方が応援してくれ、励ましてくれている結果だと思っております、大変ありがたいことだと感謝しております。

創業者は食品を作っておりましたので、食べることばかりを考えていたんですけど、やはり健康づくりにはスポーツが重要だと。そして、スポーツそのものも重要だけれども、自然体験も子どもの心身を育成していく上では、非常に重要だと思っておりました。そういう点から、「トム・ソーヤースクール企画コンテスト」を主催しております。

皆さん方にお配りしたパンフレットをご覧ください。財団は 4 つの事業を行っておりますが、まずはスポーツ関係です。子どもたちの陸上競技活動を支援しています。

次に自然体験活動では、「トム・ソーヤースクール企画コンテスト」に加えて、ロングトレイルの支援も重要な事業として行っております。

それから食文化活動につきましては、チキンラーメンよりもっと素晴らしい食品を発明する方も出てくるだろうということで、発明者や研究者に対しての表彰事業を行っています。

もう一つは発明記念館運営事業で、記念館は横浜とインスタントラーメン発祥の地、大阪・池田にあります。どうやったらこのような発明ができるのか、子どもたちにベンチャー・マインド、すなわち起業家として挑戦する気持ちというものを持って欲しいという創業者の願いに基づいて運営しております。

それらの内容につきましては、6 ページ以降に細かく出ておりますので、のちほどお読みいただければと思います。そして、12 ページと 13 ページが、ここ安藤百福センターの紹介でございます。この施設は、自然体験活動の指導者を養成するというのが主な事業で、今も続け

で行っております。そして、近年力を入れているのがロングトレイルです。

それから、ここでは小諸ツリーハウスプロジェクトも行っております。13 ページ右下にあります。

このようなことで、「食育」ということは食品分野で一生懸命やっておりますけれども、この歩くという「歩育」が大変重要なことだと考えております。若者は別としても、やはり私の年代になりますと、もう歩かないと体調が悪くなります。歩けるということは、やはり大変重要なことで、何よりも健康の基礎だと思っております。このあたりのことも含めて、これからロングトレイルで日本を縦断する「JAPAN TRAIL 構想」としてまとめていただくことを願っております。委員会は中村達代表理事をはじめ節田重節会長、日本山岳ガイド協会の磯野剛太理事長など、皆様方で運営していただいております。

全国各地でトレイルを管理運営している皆さま方、そして、その中でもボランティアで協力していただいている方も大勢いらっしゃると思いますが、そういう方々の協力により、この道が「JAPAN TRAIL」として北から南までつながるということも、そんなに遠くない時期にできるのではなかろうかと、大いに期待しているところでございます。

本当に今日は、「まんぷく」効果をはじめ、皆様方にお礼を申し上げることばかりでして、心から感謝申し上げる次第です。ロングトレイルというのは、このようにいくら絵に描いても意味はなく、実現していく上においては多くの協力が必要だと思うんですね。それを皆様方がボランティアで行ってくださっているということは、大変ありがたいことだと思っております。私は、これなくしてトレイルはつながらないと信じております。

トレイルにとって地域の歴史や文化も重要です。郷土料理などの食文化も大事な要素ですね。そして、このロングトレイルを歩いたとき、素晴らしい光景を見て歩けた上に、気分爽快になったということも重要だと思います。そういうところを皆さま方に設計していただいて、そこに携わる多くの人々にその道を整備してもらい、管理運営していただくという活動は多々あると思います。そういうことが副次的に大きな効果をもたらすということで、一つの産業にもつながっていくのではないかと考えております。

そういう中で、皆さま方の努力に対してお礼を申し上げる次第です。このシンポジウムも今回が第 6 回ということで、「JAPAN TRAIL」も早く完成するようにと願うんですけれども、完成するにはまだ 10 年かかる、と中村達代表理事はおっしゃっています。本当に気長な話で、インスタントラーメン・メーカーには耐えられないところです（笑）。できる限り早い完成をお願い申し上げます。

本日は環境省大臣官房の鳥居敏男審議官にお越しいただいておりますし、小泉俊博・小諸市長も来ていただいております。また、環境省をはじめ観光庁、長野県など、多くの皆さま方のご協力により、このようなシンポジウムを開くことができました。そして、ロングトレイル関係者の皆さま方が 120 人もお集まりくださいました。素晴らしいシンポジウムになりますことを願っております。

これをもって挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました（拍手）。

来賓ご挨拶 鳥居 敏男（環境省大臣官房審議官）

環境省の鳥居でございます。このロングトレイルシンポジウムは第6回ということですが、全国各地から多くの方々がお集まりになっているそうで、日本のロングトレイルを盛り上げていこうという思いがひしひしと伝わってくるように思います。

私ども環境省では、実は長距離自然歩道というものを全国に整備しております。それを最初にご紹介したいと思います。

実はまだ環境庁でもない、当時、厚生省の時代の昭和44（1969）年、ちょうど今から50年ぐらい前ですね、44年の1月に「長距離自然歩道整備構想」というのを策定いたしました。

その整備の目的をお話しさせていただきますと、「国土を縦断、横断または循環し、多くの人々が四季を通じて手軽に、楽しくかつ安全に国土の優れた風景地等を歩くことにより、沿線の豊かな自然環境や自然景観、さらには歴史や文化に触れ、国土や風土を再認識し、併せて自然保護に対する意識を高めること」というのが、この目的に記されているところでございます。

今考えても、この目的が現在に通ずるところがあるな、というふうに思う次第です。その後、最初に大阪から東京をつなぐ東海自然歩道というのが約1700km整備されまして、その後順次、九州、中国、四国というふうに整備されまして、最後に北海道が整備されて、全国で今、2万6800kmぐらいの長距離自然歩道が整備されております。これには50年かかりました。

ただ、いろいろ反省点があります。それはどういうことかと言いますと、行政が中心になって造り過ぎたということもあって、やっぱり地元の方の愛着がちょっと少ないんです。例えば、歩いている人が「この長距離自然歩道を、今度はこっちへ行きたいんだけど、どうしたらいいですか？」と道を聞いても、地元の人だって答えられないことが多いということなんです。

東日本大震災から間もなく8年経つわけでございますけれども、実は東北地方の太平洋沿岸に「みちのく潮風トレイル」というのを、復興の一助になるように設定しました。お手元の資料の中にも、開通の記念シンポジウムや式典の案内を入れさせていただいていますけれども、今年の6月9日に全線開通という見込みが立ちました。約900kmを超えて、おそらく1,000kmも超えるのではないかと思います。

それを設定する上で、実は先ほど申しましたような過去の反省に立って、この「みちのく潮風トレイル」は、ハイカーの方々が歩かれるとき、どういう所を見せたいですか、ということを経験した方々からいろいろお聞きして、何度も何度も地域でワークショップをしながら路線を決めました。もちろん設定には時間がかかったんですけども、その分、地元の方々にも愛着ができて、また、そこを訪れる方との交流も生まれ、復興の一助になればな、と考えているところでございます。

今日この後、みちのくトレイルクラブの相澤久美さんの方からご報告があるということですが、その管理についても、ほかの長距離自然歩道にも見ない、ユニークな形での管理を



考えているところでございます。

近年になって、日本ロングトレイル協会という組織ができ、いろいろな所で地域発のロングトレイルができつつあるというのは、非常に喜ばしいことだと思います。今、ちょうどインバウンドとして、海外からたくさんのお客さんが日本の素晴らしい自然や豊かな歴史を求めていると思いますし、日本もこれからさらに高齢化社会が進んでいくわけですから、健康志向という側面もあり、ますますそういう「歩くニーズ」というのは増えると思います。

そういう中で、こういう活動がどんどん活性化していったら、このロングトレイルが日本中に広がっていくことを祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。本日は、本当におめでとうございます（拍手）。

来賓ご挨拶 小泉 俊博（小諸市長）

地元小諸市長の小泉でございます。本日は皆さん、日本全国からここ小諸においでくださいませ、ありがとうございます。

安藤百福センターがここにできまして、さらに日本ロングトレイル協会が事務局を置くということで、地元として本当にうれしく思っているところであります。今回は第6回のロングトレイルシンポジウムということで、小諸市民を代表して、心から歓迎を申し上げたいと思います。

先ほど、中村センター長から「小泉市長、この後に発表があるかと思いますが、とにかく日本ロングトレイル協会の本部がここにあり、また、JAPAN TRAIL という新たなトレイルの拠点がここに来るんですよ」という説明がありました。その中で「この地元にいる子どもたちに、北の方に向かって行けば、ここから北海道にこの道がつながっているんだ。それから南の方へ行けば、九州、沖縄までつながるんだよ。そういう壮大な想像力や夢を抱いてもらうことが、子どもたちにとって大きな励ましになり、心の豊かさを学んでもらうことになるんだ」というお話をいただき、本当にありがたいなと思っております。

今日、この小諸に来るにあたって、地元でない方々は、2月の小諸ですので、もうちょっと雪があるんじゃないかな、ということを想像されて来た方がいらっしゃるかもしれません。ご案内のとおり、今年は雪が例年に比べて少なく困っています。小諸の場合は、水がすべて湧き水であったり、井戸水でまかなっておりますので、何十年か後には水不足ということも考えられるのかな、というふうに考えています。

また、ロングトレイルを開設するにあたって、この地元でもそうなんですが、里山が開発され太陽光発電が設置されるということで、環境と経済との共生という問題が発生します。そういう点で、地元自治体としても困っている部分があったりします。今日、鳥居審議官が環境省からおいでということで、ちょっと差し出がましかったんですが、国との連携のなかで、そういう部分もしっかりやっていきたいな、ということで先ほどお願いをしたところであります。



いずれにしても、この自然や歴史、文化、食文化など様々なことを学べる、このロングトレイルというものが、この小諸につながっているということは、地元としても本当に誇りに思っております。

全国各地でご活躍の皆さま、どうか今後ますますご活躍されますことをご祈念申し上げますとともに、日本ロングトレイル協会がますますご発展いただきますようお願い申し上げまして、私からの歓迎の挨拶といたしたいと思います。本日はよろしくお願いいたします（拍手）。

報告 ①「ロングトレイルの現況について」

中村 達（日本ロングトレイル協会代表理事、安藤百福センター センター長）

最近、安藤百福センターは「まんぷく」で、さらに有名になりました。よく見学に来られる方がいます。さっと入ってこられて、「安藤百福あるで。ラーメン食べられへんのか」と言って帰って行かれます。もう「売ったろうか」と思うんですけど、そういうわけにはいかないんですね（笑）。

この日本ロングトレイル協会というのは、全国のトレイルに入っているネットワーク組織ですが、2011年に創りました。最初は5つのトレイルが集まったんですが、今は24団体です。どんどん増えてきてまして、これからも相当増えてくるだろうなと思っています。

これが協会のロゴマークです。日清食品さんに頼んでデザインを作ってもらいました。こういうイメージが私たちのトレイルです。

現在、この地図にありますように、これだけのトレイルが全国にございます。長さは、平均で大体100kmぐらいです。最短が40km、最長が280kmぐらいのトレイルが、今、全国に24あります。皆さん、一生懸命活動されております。

そのほかに佐渡島にもトレイルを造ろうという動きがありますし、地図上に実際に出ていませんけど、淡路島にもあります。それから、先ほど関係者からご説明があった「みちのく潮風トレイル」、これは900kmの予定がまた延びて1000kmになったらしいですね。どんどん延びていくんですね。

これが加盟団体以外の提携トレイルです。こういう形で、その輪は全国に広がっています。もう皆さんはご存じと思いますが、簡単に言えば「山旅の道」でして、できれば年間通して歩けた方がいいと思います。

トレイルは、一つは地域の活性化に寄与する、あるいは観光の活性化に寄与する、というのが狙いです。それから、子どもや青少年たちにも歩いて欲しい、というのが大きな目的です。

さて、これはもう何回もお見せしているんですけど、2012年に発表した『日経トレンドィ』で、「2013年の流行」としてナンバーワンになったのがロングトレイルです。これ以降、急に



ブレイクしまして、大きな声では言えませんが、某有名タレントから電話がありまして、「昼のワイドショーに出てくれ」と言ってきました。「いやいや、まだ早いから」と言ってお断りしましたけど……（笑）。

そして、実はこれもたびたび書いていますけれど、日本の場合は、インバウンドを想定した場合もそうですが、外国人が歩くとそれを追い掛けて日本人が歩くと、どうもそういうきらいがあります。全部ではないんですが、日本人のメンタリティーにあるんじゃないかな、と思っています。

「日本アルプス」という名前を付けたのも、実は外国人なんですね。明治初期のころに、お雇い外国人が 3,000 人ぐらい日本に来まして、そのうちの一人、ウィリアム・ガウランドという方が、大阪の造幣局へ招かれるんですね。彼は山が好きでしたから、日本の山を方々歩きに行くんです。そして、飛騨山脈にも行きました。「おお、高い山がある。これは日本のアルプスだ」ということで「日本アルプス」と名前を付けました。それをイギリスに帰って、「日本にも高い山があった。日本アルプスという名前を付けた」と自分の著書に書くんです。それを読んだ日本人が、「日本にもアルプスがあるんだ」ということになるわけですね。

そういう逆輸入みたいな傾向があって、外国から言われると「そうか」って納得してしまうのが、どうもまだ日本人のメンタリティーの中に少し残っているのかな、という気がします。

この写真が日本のトレイルのイメージですね。これは北アルプスの道なんですが、僕は個人的には、これが日本では最高のトレイルだと思います。日本だと夏の北アルプスなども「登山」と言うんですけど、ヨーロッパとか世界基準からすると、雪のない氷河から下がこういう道ですから、こういう所は全部「トレイル」として認識され、いわゆる「ハイキング」の世界です。だから、外国の方がここに来ますと、「素晴らしいトレイルがあるじゃないか」というふうにおっしゃいます。それが日本のトレイルです。ただし、冬は全く状況が異なります。ハイキングとは別の世界です。

それでは、我々の協会に加盟している日本のトレイルをスライドで見ていきましょう。これは北海道の北根室ランチウェイです。牧場の中も歩ける素晴らしいトレイルです。これは八ヶ岳山麓スーパートレイルです。すぐ下に集落があるんですね。この写真のように、雪のときもスノーシューで歩けます。

これは日本で最初にできたロングトレイル、信越トレイルです。そして、これが高島トレイルです。トレイルの中で高島が一番商売がうまい、って言われているんです。なんでかというところ、「高島屋の発祥の地だから」とって誰かが言ってましたけど（笑）。必ずお弁当があります。今、トレイルにおける一つのビジネスモデル、とまでは言いませんけど、なっているのがお弁当ですね。

これは霧ヶ峰・美ヶ原中央分水嶺トレイルです。そして、これは浅間・八ヶ岳パノラマトレイルですね。安藤百福センターがあって、この周りに約 140km のトレイルを造っています。車で 5 分ぐらいですが、センターから台地が上がってもらったら、北アルプスが全部見えます。穂高から白馬まで見えますし、八ヶ岳も見えます。場所によっては、富士山がちらっと見える

所があるんです。

これは塩の道トレイルです。糸魚川から塩尻まで続く道ですね。白川郷でもトレイルを造っています。ここでも必ずお弁当が付きます。この弁当、トヨタ白川郷自然學校が作ったんですけど、1,200 円は高いって意見したんですよ。「普通、800 円だ」と言いました（笑）。次に、これは金沢トレイルですね。金沢の街中から山間部に続くトレイルです。そして、これは鳥取県が造っている山陰海岸ジオパークトレイルです。

最後に、みちのく潮風トレイルができる前に、ちょっと見学させていただきました。こういう所にトレイルが設定されるんですね。ここにもお弁当があります。佐渡島にもトレイルを造る動きがあり、いろいろと模索中です。実際に歩ける部分もありますが、ここはカタクリの大群落です。春は高山植物の宝庫で、もうびっくりしますね。

こういうトレイルが全国にたくさんありますので、先ほど小泉市長さんから、安藤理事長からも話でしたが、これらを全部結んで、日本の南から北まで一本のトレイルでつながらうだ、というようなことをずっと前から考えておりました。このようなことを考えている人というのは、実は日本にたくさんいらっしゃるんですね。そこで、我々もせっかくこれだけのトレイルがあるんですから、そこを全部つないで、北海道から九州、沖縄まで歩ける道があったらいいよね、というふうに考えました。

そこで、ロングトレイル協会とは別のスキームを作りまして、委員会として勉強しようということで、「JAPAN TRAIL プロジェクト会議」というのを立ち上げました。何度か勉強会をしまして、ほぼこういうルートでどうだろうかということで、まずはたたき台を作りました。

これが「JAPAN TRAIL」のロゴです。これも日清食品のデザインチームに作っていただきました。

これが私たちの協会に入っているトレイルです。このぐらいのトレイルが今、開設されています。それらをつなぐと、ほぼこういう図になるだろうと思います。そして、現実問題としてこれらには全部道があります。ただし、多くのトレイルが、大体 11 月の中ごろから、たぶん積雪のため通行不能だろうと思います。

それらを少し調整しまして、こういう感じで仮にまとめてみました。九州の南端からスタートしまして、一部九州自然歩道を歩かせていただいて、九重連山から国東半島の峯道トレイルを回って四国に渡ります。佐田岬半島から石鎚山系ロングトレイルを経て、しまなみ海道で瀬戸内海を渡り広島湾岸トレイルへ。それから中国山地を越えて鳥取県のジオパークトレイルに結びます。実は鳥取県では、とっとり横断ロングトレイルが造られました。来月の 15 日に、そのトレイルのフォーラムやシンポジウムがあります。

さらに山陰海岸に沿って兵庫県に入り、京都府に入ると去年の 3 月にできた大江山連峰トレイルにつながります。それから滋賀・福井県境の高島トレイル、北陸に入って白山白川郷トレイル、これはトヨタ自動車の自然學校が今、一生懸命やっています。そして、金沢トレイルがあります。

次に北アルプスとなります。実は、海外の人たちにとってもこれは面白いだろうなというの

が、日本海の親不知海岸から朝日岳に登って、北アルプスを縦断していく長大なコースです。最後は槍ヶ岳や穂高岳に登り、上高地から松本に抜けます。それとは別に、北アルプスが歩けないシーズンのために塩の道トレイルを用意し、複線化を検討しているところです。

あと、長野県内はもうロングトレイルがたくさんありますので、それをつなぎながらぐると回っていきます。そして、安藤百福センターに来まして浅間連峰に上がり、ぐんま県境稜線トレイルから尾瀬・日光方面へ向かいます。

日光からは那須連峰や吾妻連峰を経て米沢盆地まで行きます。この辺りから2つに分かれて、みちのく潮風トレイルを歩く海岸コースと、月山や鳥海山の麓をたどって横手盆地に出る山岳コースを考えています。なかには芭蕉の奥の細道やイザベラ・バードが歩いた道をトレースすることも考えられるかな、とも思っています。

その先は八幡平や八甲田山、奥津軽トレイルなどを経て北海道に渡ります。北海道は道南から道東へ横断するように歩き、最後は知床半島で終わる。というような、あくまでもこれは構想でございます。細部を検討して線を引いたわけではありませんが、こういうものができたらいいな、と夢を膨らませている段階です。

先ほど小諸市長さんもお話になりましたけれど、子どもたちがここへ来て、あるいは外国人がここへ来て、この道が北海道または九州までつながっているんだ、というふうなことが実感できれば、素晴らしいと思います。そういう夢のある事業をしっかりと根付かせることが大事な、と考えております。

残念ながら、日本人の考え方にはパートワークしかないんですね。東海道新幹線は東京―大阪間で終わってしまうし、山陽新幹線も博多まで、東北新幹線も新青森まででした。高速道路もそうですね。それが、実は全部つながっているんだという概念が日本人の中にできれば、国土に対する、あるいは日本の国に対するイメージが変わっていくのではないかなと思います。それが私の個人的な目的です。

これを造るには相当時間がかかります。先ほど安藤理事長が、「そんなん、もっと早よやれ」というふうにおっしゃっているんですけど、「カップヌードルみたいにはいきません」と心の中で申し上げているんです（笑）。

そんなことで、そういう形でできればいいな、ということを思っています。

この間、外国からのお客さんで、世界中のトレイルを歩かれているワールド・トレイルズ・ネットワークの会長が来られて、この話をしたら「素晴らしい」と。「自分たちのネットワークは世界中に広がっているので、ぜひその連中を連れて、JAPAN TRAIL を歩きに来るよ」というふうに言っていただきました。

以上のようなことでして、少しずつですが実現していければいいな、と思います。もちろん、これは確定したわけではありません。専門家の方がたくさんいらっしゃいますので、これから皆さんといろいろご相談しながら、あるいはそれぞれの地域とご相談しながら、国とも相談しながら、JAPAN TRAIL をきちっと形造っていきたいと考えております。ただし、この作業はエンドレスです。50 年先、100 年先まで続くようなスキームにしたいな、と思っております。

日本には1,200年も続く信仰の道があります。スペイン巡礼街道は800年ですね。イギリスのフットパスは300年です。アメリカのアパラチアン・トレイルは70年です。そのぐらい時間がかかるんです。しっかり腰を据えて、未来に続くような道になれば、日本のロングトレイルもうまく機能していくだろうというふうに思います。

ぜひ皆様のご協力をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました（拍手）。

座談会「登山文化を支えてきた道と山小屋」

小池 岳彦（双六小屋主人） 山口 孝 （涸沢ヒュッテ主人）
米川 正利（黒百合ヒュッテ主人） 節田 重節（日本ロングトレイル協会 会長）
コーディネーター 若菜 晃子（エディター）



左から若菜氏、節田氏、米川氏、山口氏、小池氏

○若菜：この座談会では、「登山文化を支えてきた道と山小屋」と題しまして、ご登壇者の皆さまにお話を伺いたいと思っております。

皆さまご存じのとおり、今、たびたびお話にありましたけれども、ロングトレイルの「トレイル」というのは「道」という意味でして、北アルプスや八ヶ岳はもちろん、日本中にいろいろな登山道があります。登山者や山小屋の方々など、私どもが日ごろ親しんできた、昔から人々に愛されてきた道というのは、大きな意味で、本当に素晴らしい日本のトレイルの代表で、もうすでに整備されたトレイルの一つだと思います。

では、その道は一体どのようにして造られてきたのか。また、今まで長い間、どうやって保たれてきたのかということ、ここでは「道」という観点に基づいて、各山域の代表者の方々にいらっしゃる山小屋のご主人に、歴史的な話題や問題点を語っていただきたいと思っております。

それでは、ご登壇者の皆さまをご紹介します。まず北アルプスから、穂高連峰

の人気スポット、涸沢ヒュッテのご主人、山口孝さんです。

○山口：よろしくお願いいたします（拍手）。

○若菜：涸沢ヒュッテは登山者にとって大変憧れの小屋の一つでして、もうすでにテレビとかマンガで、涸沢ヒュッテの山口さんのお名前はよくご存じだと思います。山小屋経営とともに登山者の安全をずっと支えていらっしゃるしまして、遭難救助でも大変活躍をされている名物社長さんでいらっしゃいます。

続きまして、北アルプスの飛騨側で4軒の山小屋を経営されている双六小屋チェーンがありますが、その3代目でいらっしゃる小池岳彦さんです。

○小池：小池です。どうぞよろしくお願いいたします（拍手）。

○若菜：双六小屋ないし双六岳においでになった方はよくご存じだと思うんですけども、双六周辺の道は大変美しくて、歩きやすく、風景もちょっと日本離れしているといえますか、とても素晴らしい山域です。双六小屋はこれまで代々、道直しにも非常にこだわっていらっしゃいまして、そのあたりも若手経営者のお一人でいらっしゃる小池さんに、お話を伺いたいと思っております。

それから、もうお一方は、日本ロングトレイル協会の副会長でいらっしゃる米川正利さんです。深い森と静かな池が大変美しい北八ヶ岳で、黒百合ヒュッテなど、登山者にとってなくてはならない3軒の小屋を長年経営していらっしゃる、名実ともに“八ヶ岳のお父さん”といえますか、ボスでいらっしゃいます。よろしくお願いいたします。

○米川：米川です。どうぞよろしく（拍手）。

○若菜：それでは、最後にオブザーバーをご紹介します。先ほどもご紹介がありましたように、このシンポジウムではもう毎度おなじみの方でいらっしゃる、山と溪谷社に40年間在職されて、北アルプスや八ヶ岳など、日本の山やトレイルのいろいろな所を知り尽くしておられる、日本ロングトレイル協会会長の節田重節さんです。

○節田：どうも皆さん、こんにちは。本日はたくさんの方においでいただきまして、誠にありがとうございます（拍手）。

○若菜：申し遅れましたが、司会を務めさせていただきます、若菜晃子です。フリーランスの編集者でございますが、以前、山と溪谷社に勤めておりまして、本日は元上司である節田さんから、「お前がやりなさい」というふうにお達しがございまして（笑）、ここに座っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします（拍手）。

それでは、自己紹介も兼ねまして、それぞれの山小屋の歴史を簡単にお教えいただきたいと思います。ここはやはりお齡の順で、米川さんからお願いしたいと思います。

○米川：ご紹介にあずかりました米川でございます。私は八ヶ岳が好きで、八ヶ岳に住みついております。小学校へ上がる前から登っていますので、今まで優に70年は登っているということになります。

登っている間に、うちの山小屋を建てました。山小屋を建てたと言っても、私の先代、うちの母親なんです、46歳のときに建てました。なんで建てたのか、いまだに理由が分からない

んですけど、多分生活のためだと思っています。そのころ、北八ヶ岳というのは、峠道は結構きれいに開いていたんですが、稜線上には道がなく、登山者もいないという状況で、そんなときにどうして山小屋を作ったのか、信じられないようなこともたくさんありました。

ただ、どういうわけか、私どもの山小屋を建ててから 10 年も経たないうちに登山ブームになりまして、そのおかげでなんとか山小屋で生活ができるようになったということです。私どもの黒百合ヒュッテは昭和 31（1956）年の創業ですが、始めてすぐ、母親は 10 年で死にまして、その後の 2 代目が私で、今は私の息子がやっております。

あと蓼科山荘というのもやっているんですが、蓼科山の頂上から少し下りた、將軍平という所にあります。この山荘はもう 30 年ほど経営しています。それから最近、私どもの方でやっているのが双子池ヒュッテという小屋で、この 3 軒を経営しています。

やはりこれを建てたのはかなり古くからで、昭和の 30 年ぐらいなんですけど、いずれにしてもあまり道ができていない時代でして、特に北八ヶ岳は南八ヶ岳に比べると、かなり登山者の数も少なく、経営的には厳しいスタートでした。それでもその後の登山ブームによって、八ヶ岳全体からしたら登山者も増え、山小屋も増えていったんです。

そのようなわけで、自分たちで登山道を開きながら今日に至っているということです。

○若菜：続いて山口さん、お願いいたします。

○山口：涸沢ヒュッテの山口と申します。

私の伯母が昔から山が好きでして、朋文堂という山の出版をしていた会社で編集長をしていました。そこでいろいろな雑誌を出しており、毎月のように山へ出かけては取材したりしていました。彼女は私の母のお姉さんなので、私もしょっちゅう山に連れていかれました。

涸沢ヒュッテがなぜあの場所にできたのかというと、その伯母から聞いた話ですが、長野県の偉い人と穂高を歩いていて、「この場所に山小屋を建てたら、絶対見晴らしがいいし、最高だよね」という話になって、あそこに建てたんですね。昭和 26（1951）年ごろだと聞いています。

それで、眺望はすごくいいんですけれども、なんせ雪崩通りの 1 丁目 1 番地と申しますか、本当に周りは全部穂高の山に囲まれていて、お椀かすり鉢の一番底に涸沢ヒュッテという山小屋を作ったんですね。なので、雪崩で 2、3 回ほど流されました。それで、雪崩からこの小屋を守るにはどうしたらいいかということで、周りに石積みをやりましたが、その石積みも流されたりして、最後はもうヘリコプターを使って 2〜3,000 個ぐらいの石を積み上げて建物を守ってきたという、本当に大変な場所に建ててしまったんです。

しかし、小屋の周りは穂高連峰の 4 座、北穂、涸沢岳、奥穂、そして前穂という、3000m 級の素晴らしい山々に囲まれているので、それを眺める場所としては、やっぱり最高の場所かな、と感じております。

私どもは 4 月 16 日から小屋開けに入るんですが、とにかく雪が多い場所なので、建物が「なんとか持ってくれよ」と願うばかりで、入山前は毎日、ちょっとヤキモキしているんです。小屋開けをするには、20 人が行って、大体 10 日かかるんですね。こんな山の中で、こんな大き

な山小屋で、これだけ雪掘りに苦勞する山小屋はまずないんじゃないかな、と私は思っています。

そういう場所で今までずっと小屋番というか、生活をしてきたもので、いろいろな経験をさせてもらいました。そんなわけで、今日私が登山道についてお話できるのは、私のホームグラウンドである横尾から涸沢の道しか分かりませんが、そのへんのところを、皆さんにちょっとお話しできればいいな、と思って来ました。よろしくお願いします（拍手）。

○若菜：それでは小池さん、お願いいたします。

○小池：改めまして、こんにちは。双六小屋の小池と言います。私は北アルプスの飛騨（岐阜県）側で4軒の小屋をやっております。下からわさび平、鏡平、双六、黒部五郎の4軒です。黒部五郎は富山県に入りますが……。

小屋の歴史をとということで、双六小屋は、ご存じない方もいらっしゃるかもしれませんが槍ヶ岳の西側にありまして、双六岳や黒部五郎岳、鷲羽岳、水晶岳、笠ヶ岳など、名山に囲まれて水も豊富で、お花畑がすごくきれいな所です。私は「アルプスの楽園」と呼んでおります。

私の祖父の時代、昭和10（1935）年に、今は高山市なんですが、当時の上宝村^{かみたから}が村の年間予算の10分の1という大金を投じて双六小屋を建てました。最初は村営でした。しかし、その後戦争が始まって荒れ果ててしまいました。うちの祖父は義清というんですが、大正時代に槍ヶ岳に登るほど山が好きでして、それで、「荒れ果てた小屋をなんとかしてくれんか」と村の方から頼まれまして、昭和25（1950）年から経営を始めました。

当時、家族は相当びっくりしたそうで、また、小屋には何もないので、食器や鍋、釜、布団など、あらゆるものを小屋に持って行ってしまうので、もうすごく困ったと、伯母さんから何回も聞かされました。

その次に、一番下のわさび平小屋を建てたのが昭和27（1952）年です。わさび平は新穂高温泉から大体1時間半ぐらいの所ですが、ブナの原生林に囲まれた、とてもすがすがしい場所です。小池新道という道を造るための荷継ぎ小屋として小さな小屋を建て、その後、昭和32（1957）年ごろから登山者にも泊まっていただくようになった、と聞いております。

その次に、そこから約4時間で鏡平という場所に着くんですが、そちらに昭和40（1965）年に鏡平山荘を建てたということです。この山荘は、初めてヘリコプターを使って建てたと聞いております。大体そのころから、どこの小屋もヘリコプターを使い出したと聞いています。小屋が建つ前は一部の猟師しか知らないような秘境で、兎ヶ原と呼ばれていたそうです。うちの祖父がそのころ行ったときに、池に映り込む槍・穂高連峰のすごい景色に惚れ込んで、ここに小屋を建てる、と決意したということです。家族はかなわなかったそうですが……（笑）。

最後に一番奥地なんですけど、黒部五郎小舎という小屋があります。北アルプス南部でも最奥地で、大体2日かけないと行けない場所です。こちらは「アルプスの少女ハイジ」の舞台のような、美しい草原に立っています。

黒部五郎岳は、深田久弥さんの『日本百名山』にも選ばれているんですが、カールの景観が素晴らしい所です。氷河地形の名残でカール内に岩がごろごろしており、その間に雪渓が残り、

花や水の流れが大変きれいと人気です。

僕も今回のためにちょっと調べたんですけど、こちらが最初に建ったのは大正 12 (1923) 年らしく、その後は今、三俣山荘を経営している伊藤正一さんが昭和 30 (1955) 年ごろから営業し、さらにその後、上高地で西糸屋山荘を経営している奥原教永さんが昭和 47 (1972) 年から経営、そして、昭和 63 (1988) 年からうちの父がやっております。ちょっと長くなって、すみません (拍手)。

○司会：いいえ、ありがとうございます。私は大変興味深くお聞きしました。

それでは節田さん、お願いいたします。この方は山小屋をお持ちではありません。

○節田：改めまして、節田です。ヤマケイで 40 年間、山の雑誌や書籍、ビデオなどを作っております。言ってみれば、山で遊びながら給料をもらっておりまして、大変幸せな人生でございました。

そんなわけで、北アルプスや八ヶ岳の山小屋のビールを大分消費させていただきましたので (笑)、今日は少しでも恩返しできるかなということで、お三方をお呼び申し上げました。後ほど足りないところを補足解説させていただきます。

○若菜：ありがとうございます。それでは今、山小屋ができるまでの簡単な歴史をお話しいただいたんですけども、この後は、それぞれの山小屋周辺の登山道がどのようにしてできたのかということを、その歴史と作業的なことも含めて、今度は若手の小池さんからお話を伺わせていただければ、と思います。

○小池：開業当時、双六小屋へ行くのは、高原川の支流に金木戸川という川がありますが、ここに新しく営林署の森林鉄道ができたので、それに乗って、それからまた沢を遡っていき、山を越え、また陰しく深い双六谷という谷に入り、15 時間とか 20 時間とかかかるようなルートをたどっていく行程だったようです。

途中に吊り橋や籠の渡しといって、ワイヤーを引っ張って渡るようなものがあり、うちの父から「すごい怖かったんや」という話をたくさん聞きました。そんな状況だったので、当時は年間で 50 人ほどしかお客さんが来ないし、ヘリコプターなどないので、物資を運ぶにも全部人力でした。

小屋を手伝っていた叔父さんが布団を運んだときは、雨が降ってきて、布団がびしょびしょに濡れて、もう重くなって、「あのときはもう、本当に大変だった」という話を何度も聞かされました。

そんなこんなで、道が良くなしないと小屋を営業していくのはなんともならんということで、うちの祖父が昭和 28 (1953) 年に新穂高温泉からの道を造ろうということで、村の人々にも手伝ってもらい、丸 2 年かけて独力で道を開きました。昭和 30 (1955) 年のことで、やっと小池新道が開通したわけです。

当時は測量などもいい加減だったので、真っ直ぐに最短ルートをつけるのにも、遠くの山に人を立たせて、「上へ行け、下へ行け」とかっていうふうに旗を振らせて、道を造っている人間は双眼鏡でそれを見て、その指示どおりに道を造っていったそうです。トラバース・ルートと

いう、稜線の下を真っ直ぐ斜めに横切る道なんかは、そういうふうにして造ったと聞いています。

しかし、道は毎年崩れるので、3歩進んでは2歩下がるみたいな感じで、毎年壊れては直し、直しては壊れを繰り返し、こつこつと手入れをしてきたのが今の小池新道です。

○若菜：ありがとうございます。旗を振って何度も指示をされていたという、まるで戦国時代か何かのようですね(笑)。すごく大変な思いをされてできた新道に、小池さんのお名前がそのまま残ったということですね。

○小池：はい、そうです。

○若菜：素晴らしいです。

○小池：今も一生懸命直しています。

○若菜：そうですか(笑)。それと布団の話がありましたけれども、小池さんの小屋に行って布団を見たら、ちょっとそのことを思い出しそうな気がしますけども……。

それでは、山口さんいかがでしょうか。

○山口：私が山小屋にデビューしたころは、まだヘリコプターの荷上げが始まっていない時代でしたので、「小屋番の仕事はなんだ」というと、もう毎日、横尾まで荷物を背負いに行くことでした。いわゆる歩荷^{ぽっか}で荷上げする時代でして、ずっと毎日やらされていました。横尾まで下り1時間、上り3時間、往復で4時間を毎日ですね。荷物を着ける時間が1時間かかるので、トータル5時間かけて毎日の食糧を上げるために涸沢から下りていきました。雨が降ろうと槍が降ろうと行かされたのです。

私の上にまだ元気な小林銀一さんという「親分」がいまして、「風邪引いて具合が悪い」と言うと、「そんなもの、歩荷行って汗かけば治るわ」と。今でも夢に見て結構うなされる日が続いているんですが……。同じ道を毎日横尾まで行かされると、もう飽きちゃうんですね。

でも、やっぱり行って来る間のその5時間というのは、親分とも顔を合わせないし、ひと言も文句を言われなくて済むので、つらいんだけど、これなら行った方が気が楽、という感じでした。その道は登山道というよりは、もう私たちの生活道ですね。もう毎日毎日行かされて、どういうわけか次第に荷物が増えてくるんですね。体重はどんどん落ちていくのに、荷物だけはどんどん大きくなって……。

昼ごろまでに山小屋に着かないと、もうその日に出す食糧がないということになるので、だから歩荷は毎日ということです。特に新鮮な食糧が中心で、生野菜とか卵など、本当にもう転んだら割っちゃうようなものはベテランが背負います。

大体、初めての人には40kgぐらいから始めるんですね。それで1週間たって50kg、で、次の1週間たって60kg、徐々に10kgずつぐらい増やしていくんですよ。そうすると、ひと月経つと大体、自分の体重は楽に背負えるようになります。これはもう、どんな人でも担げます。そういう毎日が続けているとできるようになるので、私が一番調子のいいときは、100kgもの荷物を背負いました。

そのときは、もう立つのに本当に力を使って、大変な思いをしました。横尾から涸沢までの

コースタイムは、普通の登山者で3時間のコースなんですね。で、我々も60kgか70kgの荷物だと、普通3時間ぐらいで行くんですが、80kg、100kgとなると、やっぱり5時間ぐらいかかりましたね。

それを毎日やったおかげで、今や腰も膝もうボロボロになっていまして、最近、ちょっとつらいなと思っています。そんなわけですから、ずっと毎日荷上げをやってきたもので、登山道については自分で直すのがもう当たり前、というふうに思っていました。

しかし今では、山小屋はヘリコプターがなかったらもう営業できないという、本当に大事な輸送手段となっています。東邦航空という、山に熟練している、私もレスキューで何百回と一緒に行動した仲間がいる、本当に素晴らしい会社があるんです。ところが、ちょっとここ2、3年、皆さんご存じのように、大きなヘリを落としたり、優秀なパイロットを亡くしたりしまして、もう値上げしないとやっていけない、ということで値上がりして、山小屋も非常に困っているところです。

そんな時代に私はずっと山小屋に携わってきましたので、ヘリが飛ばなかったら、自分たちで背負って行くわ、という心構えでした。ただ、昔はそうやっていたんですけど、今はもう寄る年波で、ちょっとそういうわけにはいかなくなりました。

その先の山小屋に続く山道を登っているとき、その道を歩くと、この先の山小屋はどういう姿勢で経営しているかということが、大体分かります。だから、立派な道はもちろんですが、立派な道じゃなくても、こまめに手入れをしている道を見ると、この先の山小屋の人はちゃんとやっているな、と思います。皆さんも多分、それはお分かりだと思いますが。

山小屋に続く道というのは、我々が毎日通っているというか、毎日上ったり下ったりしているわけで、いわば山小屋の生命線なのです。したがって、小屋番がこまめに、めげずに直すのが一番いいかな、というふうに思っています。今でも私は上り下りのたびに、しょっちゅう気にかけています。普通に行けば、そのコースタイムどおりに行っちゃうんですが、やっぱり手を出さないと気が済まなくなってきた、もうそのまま素手で直しながら通ったりしております。○若菜：布団の次は食糧でして、それも100kgを背負っていたというのは、ちょっと大変な作業だなと、改めて感服いたしました。でも、今おっしゃったように、道の先にある山小屋のことは、その道の良し悪しによってよく分かるという言葉は、まさにそのとおりだなと思います。涸沢ヒュッテに登る道は本当に歩きやすく、もう誰でも歩けるというような道ですものね。改めて、道がどのように維持されているのかを勉強させていただきました。

それでは、米川さんお願いいたします。

○米川：私も山口さんと同じで、ヘリがないときからずっと荷物を背負ってきました。やはり100kgの荷物を背負ったりしていましたが、そのおかげで腰をやられ、今はもうヨボヨボの状態です。

八ヶ岳自体は、東京と名古屋から意外に近いものですから、山の初心者が多く来るということで、道の整備はしっかりしなければいけない山域なんです。

昔は八ヶ岳というと、山小屋の客引きが多かったとかで、正直あまり良い評判は聞いており

ません。登山者の荷物を「持ってあげるよ」とか言って、奪うようにして勝手に自分の小屋まで持って行っちゃうので、もう登山者は必ずその人に付いて行かなきゃいけないことになってしまったそうです。「客引き小屋」などと、ありがたくない名前を頂戴していたとか（笑）。

そんな状態ではありましたが、やはり山小屋経営者も従業員の人たちも、道が良ければ多くの登山者が来るということで、そういう客引きの人たちも、道だけはきれいにしていたそうです。

私の小さいころは、どちらかと言うと八ヶ岳は宗教登山の山でして、信者の方が結構多かったものです。八ヶ岳は南八ツと北八ツがありますけれども、特に南八ヶ岳は、明治から昭和初期にかけて、そういう信者の人がたくさん登っていたものですから、そのおかげでかなり道が整備されていたということです。

南八ツはすごい岩山で、男性的というかダイナミックな山です。一方、北八ツの方は池がたくさんあったり、森が深いということで、女性的なんです。これは宗教とは関係なく、結構女性の登山者も多かったということで、地元の青年団とか山岳会の人たちが、それなりに整備してくれていたということです。

それから北八ツの場合は、昭和 30 年代に国定公園になるんですけど、国定公園ということで意外と県から予算が出たり、市町村から登山道の整備費が出たので、山小屋の人たちがその予算をいただいて整備をしておりました。それがかなり助かっており、現在も続いております。

それからもう一つは、国有林ということで、現在の森林管理署が管理をしていたものですから、国有林の中を監視して歩く巡視路という目的もあって、森林管理署で結構手を入れてくれていたものです。これは大変ありがたいことで、ちょっと小屋から遠ざかった所は、皆で共同でやろうということで、誰かが音頭を取って道の整備をかなりするようになりました。

やはり道が良いと、良い方へ良い方へと登山者が集まるものですから、これは商売としても結構大切なことで、お客さんを呼び込むためにも道直しは一生懸命やらなきゃいけないと、そういう認識が浸透していきました。

ただ、ここでちょっと問題として出てきたのは、森林管理署の管理が「自然管理」という方式に変わり、巡視路とか登山道の方にほとんど予算が割けないという状況です。水害などで登山道が崩壊したりしたときは、閉鎖するしかないということもありますので、このへんが大きな問題です。昔は一生懸命管理していただいたものですが、最近はそういう問題が出てきて、「じゃあ、自分らで」と言ってもなかなか難しく、「閉鎖しろ」と言われると登山者も山小屋も非常に困るという、そんなことが起こっております。

でも、八ヶ岳はここ小諸からも見えますけど、本当に身近に登りやすい山ですので、できれば入山する登山者自身も気が付いたら、ちょっとしたことで手を加えていただきたいと、そんなふうに思います。

○若菜：ありがとうございます。やはり登山道というのは、その小屋の方々の手によって大切に保護されて、維持されているのだなということが、今のお話を伺ってよく分かりました。

でも、先ほど話が出た問題点として、行政的に予算がないと道を封鎖するというようなお話がありましたけれども、そういった問題というのは、涸沢周辺でもあったりするのでしょうか。

○山口：登山道の整備は、基本的に私は山小屋の仕事だと思っています。私がやっている仕事については、もうお金もいらないし、口も出さないでくれと、俺が一番よく知っているんだから、ということで、今までやってきています。ただ、最近はなかなか私みたいにやる人がいなくなりまして、あと 2〜3 人、石積みのできる、私と同じ山のパトロールの人がいるんですが、今やその人たちがメインです。だから、そういう登山道を維持管理する技術の伝承というものも、皆で考えていかなきゃいけないかな、というふうに思っております。

とにかく私が若いころ、山岳救助隊の中に石屋さんがいまして、その人から教わったんです。私が 1 時間かけて、そばにあった、このテーブルの半分ぐらいの石をやっと持って行ったら、その人はものの 5 秒ぐらいで、ばしっとはめ込んでしまう。そして、「はい、次持ってこい」ですから、もうこっちは間に合うわけじゃないですね。

でも、その人がそうやってびしっと置いた石は、積んでからもう 40 年近く経つんですが、びくともしません。これは、私はもう芸術作品と言うか、有名作家の作品と言うか、もう世界遺産並みの道かなと、最近感じています。

だから、見た目がきれいで、いい道だなと思っても、下りで登山靴で上からガンガンやったら石が飛ぶような道は駄目ですね。一番いいのは、大きな石をばしっと置いたら、それでもう何十年も持つ。そんないい仕事ができるとき。自己満足の世界ですけど、歩くたびに「これは俺が積んだ石なんだ」って、一人でにやにやしながら歩いたりしています。

このように、石積みで階段を造ったりして登山道を整備することは、要するに登山者も迷わないし、その道のおかげでもう高山植物の踏み荒らしもなくなるので、これはすごく大事なことで、と思っています。

○若菜：その石 1 つ置くのにも、やっぱり技と知恵が……。

○山口：それもね、よその山から持って来たような石は駄目です。やっぱりそこに、そばにある石でないと。

○若菜：その石じゃないと？

○山口：センスあふれる目で選んだ、その石じゃないと駄目（笑）。

○若菜：でも、その技術の伝承というのは、非常に大事な問題だということですね。それは今、まさにトレイルを造っていらっしゃる方々にも共通する問題なんだと思います。

小池さんはいかがでしょう。

○小池：山口さんの話には、非常に共感するところが多いです。私も今、飛騨に帰って山小屋をやるようになって 15 年ぐらいになるんですが、最初のころは下手くそで、父と一緒にいたりもしたんですけど、あんまり教えてもらった記憶はないんです。私が石畳の道みたいな階段を造ったんですけど、誰も通ってくれなくて。それで父に「お前の造ったものは、道に見えん」と言われて、もうすごく悔しい思いをしました。それからいろいろ考えて考えて、今では絶対もうそこしか歩けないような、絶対そこを通りたくなるような道を造ってやろうと思っ

て、努力しています。

でも、作業が終わって見ていて、実際にそこを登山者が通ってくれたときは、もうすごくうれしくて、「やった。狙いどおりだ」と陰ながら喜んでいます。そういうことが楽しみで、また来年もトライしてみようと考えています。もう、ただのオタクみたいな感じですが……。

○一同：(笑)。

○山口：大人のジグソー・パズルみたいな。

○若菜：そういうことだったとは存じませんで……。

○山口：もう本当に飯を食うのも忘れるぐらい、夢中になります。

○若菜：そんなに道を造るのが好き？

○小池：もう、すごくよく分かります。

○山口：道直しの面白さが分かったら。

○小池：はい。で、石がばしッと決まったときは、すごくうれしくて。

○若菜：もう職人の域ですかねえ。

○小池：その道がもう何年も残っているのがとても嬉しくて、逆に崩されるともう、すごく寂しくて。

○若菜：また積みに行っちゃう？

○小池：そうなんです。それで、崩れないよう、うちでは水切りを入れています。

○山口：それは大事だよ。

○小池：流されないように水切りを入れているんですが、水切りというのは、雨降りのときに点検しないと分からないので、雨降りにわざわざ行ってみます。で、ただの子どもの水遊びみたいな感じになっちゃうんですけど、登山道に流れている水が切られて、それがすごく役に立っているのを見るのが楽しいんです。現在、たくさん水切りを入れたので、登山道が大分傷まなくなったから、そうすると、ほかの所にも手を掛けられるので、すごく楽しいな、と思っています。

あと問題点として先ほども出た話ですが、うちの方も最近、ゲリラ豪雨などで雨がすごいと潤れ沢が濁流になって、登山者から「命からがら徒渉^{とつわう}してきたよ」って言われることがあります。確かにそういう場所が2ヶ所くらいあるので、橋を架けることになります。普段は水が何もない所に橋が架かっているので、「なんであそこに橋があるんですか？」って言われるような場所が、大雨のときはすごい水かさになって危ないから、ひどいときは、橋が流されても困るので、小屋のスタッフが見に行くんです。

それと、大雨のときは小屋で引き止めるんですけど、実際聞いてくれなくて、強引に行っちゃうんです。予定もあるかとは思いますが……。それではちょっと困ってしまうので、ひどいときに撮った動画なんかを小屋で見せるようにしたら、聞いてはくれるようになったんですけど、今度は「いつ行ったらいいですか、もういいですか、もう行ってもいいですか」ってしつこく言われて、ますます困ってしまいます。結局、またスタッフが現地を見に行くようにしているんです。

そうすると、スタッフにも危険が及ぶので、登山道の上にカメラでも設置して、小屋で状況を把握できるようになるといいな、と思うんですが、電波も必要ですし、許可などいろいろな手続きが必要なので、こういうことも市や県、遭対協、関係官庁など、行政の方の協力が得られるとすごくいいな、と常々思っています。ドローンが飛ばせればいいんですけど、雨で視界の悪い日は、多分ドローンは飛ばないですよ。

○若菜：そうですね、ドローンは難しいでしょうね。

○小池：でも、山口さんが言われたように、市や県や国の道なんですけれど、基本的には自分たちの道なので、自分の通勤道でもあるし、何かあると結局、救助にも行かないといけないし、もし死亡事故でも起きると悲しいので、やっぱり自分で歩きやすくしようという気持ちは、すごくあります。

○若菜：非常に大きな責任を持って、小屋の方々が道を整備してくださっているということがよく分かりました。

それでは、ここで節田さんから補足として、パワーポイントを見ながら少し解説をしていただきます。

○節田：それでは、本当に駆け足で日本の山小屋とか、道の歴史をご案内させていただきます。先ほど米川さんのお話にもありましたけれども、日本の登山史というのを振り返りますと、ほとんど宗教登山から始まっているわけですね。現代でも、まだ白山とか八海山、石鎚山などでは、信仰登山として登られる信者の方々の姿が見られます。

宗教登山から始まりまして、次第にいわゆる近代登山に移行していくわけですが、それをどこで区切るかというのは難しいんですが、一応、日本で最初にできた山岳会、日本山岳会の創立を近代登山の始まりとしましょう。

この山岳会は明治 38（1905）年に誕生していて、間もなく 120 年になります。これは、上高地にレリーフがありますウォルター・ウェストンのアドバイスで、7 人の方が創立者となってスタートしています。

それでは、登山者の強い味方となる山小屋というのは、どこから始まっているのだろうかということになりますが、日本で一番古い山小屋は、立山の室堂山荘です。もちろん、「室堂」というのは、もともと普通名詞でして、宗教登山の人たちが泊まるお堂が「室堂」なんです、今や固有名詞化して、立山や白山の地名、山小屋名に付けられています。

江戸時代中期にできた室堂山荘というのは 2 棟ありましたが、それ以前に、多分室町時代からなんらかの建物があったのだろう、と言われております。この山荘は、その江戸時代からの建物を少し直して、昭和初期から営業していました。当初は室堂小屋と呼んでいたのですが、現在は室堂山荘と言っています。次に、これは室堂小屋と呼ばれていた時代に、江戸時代の柱が 3 本ほど残っていた写真ですね。実際に営業小屋として使っていました。また、これが江戸時代の形でもって復元された建物で、向こうに茶色く見えるのが、現代の室堂山荘です。この建物はその隣に文化財として残されております。

今のは宗教登山のための山小屋でしたが、では、純粹に登山者のための山小屋というのはい

つごろできたかと言いますと、皆さんご存じの白馬岳にある白馬山荘です。これはもともと測量の人たちが石室を造って、簡易宿泊施設として使っていました。そこを白馬村の松沢貞逸さんという方が、まだ 17 歳だったそうですが一念発起しまして、本邦初の営業小屋を始めました。

これは昭和 8（1933）年の写真です。いわゆる第 1 次の登山ブームが大正末期から昭和初期に起こりました。それを当て込んで造ったというんですが、もうこのころに、こんなに立派な施設の山小屋を建てていらっしゃいました。今でも建物が残っていますが、もともと白馬駅のすぐ前で、「山木」という旅館をやっていた、その息子さんなんですね。現在は白馬館という会社になっていますが、この白馬山荘をはじめ白馬岳周辺で 7 軒の山小屋を経営しています。



これが先ほど小池さんが話していた双六小屋の昭和 15（1940）年の写真で、建ててすぐのものですね。鉤の手になっていまして、現在の小屋と形がよく似ていると思います。

そして、これが先ほど話題に上った鏡平山荘ですね。槍・穂高連峰の展望が素晴らしく、非常にきれいな所です。昭和 40（1965）年ですから、これは建ててすぐの写真ですね。ちょうどこのころが第 2 次登山ブームの末期です。

これが山口さんの所、涸沢ヒュッテの昭和 26（1951）年の写真ですね。

○山口：そうですね、最初の小屋です。

○節田：もうほとんど開業時の写真ですね。こういうすり鉢状の、いわゆるカール地形の底にモレーンという石が溜まるんですが、その丘の上に立っております。ですから、左右どこからでも雪崩が来るような所に建っているんですね。

これが玄関ですか。今のヒュッテから見ると、本当にかわいらしい山小屋ですね。2 回ほど雪崩でやられているそうです。

これが米川さんの所の昭和 31 (1956) 年の写真ですね。これは開業当初ですかね？

○米川：そうです。最初のときです。

○節田：昭和 31 年というのは、日本隊が 8000m のマナスルに初登頂した年ですね。年配の方はご存じですが、井上靖の小説『氷壁』が朝日新聞で連載されて、第 2 次の登山ブームになった年です。このときの登山ブームは大変なものでした。おかげで、米川さんの所はお金持ちになったとか (笑)。

○山口：あれはお母さん？

○米川：ええ、そうです。あ、これは私です。

○節田：サービスカットを入れておきました。これはちょっとお金持ちになった米川さんです (笑)。現在の山小屋と、先ほどお話がありました北八ヶ岳の森ですね。こんなきれいな森林の中にある、おしゃれな山小屋です。

それでは、登山道の方のお話も少ししておきます。北アルプスにはいろいろな新道があります。「新しい道」と書いて「新道」と言います。もう時代が大分経っていますので、「新道」とは言えないぐらいになっている道もあるんですが……。

面白いのは、「立山新道」というのがあったんです。日本ではかなり初期の有料道路ですね。戦国時代の武将で富山城主・佐々成政が針ノ木峠やザラ峠を越えて、浜松の徳川家康に援助を求めに行くのですが、彼が 2 回、雪の針ノ木峠とザラ峠を越えたと言われています。

これが歴史上有名な針ノ木峠です。東へ行くと大町の方へ下りますし、西へ行くと黒部川に下り、次のザラ峠につながります。

これがそのザラ峠です。東は黒部川へ、西は富山に通じていました。このルートは立山連峰と後立山連峰にある、それぞれ大きな峠を 2 つ越えないといけないんですね。さらに黒部川を横断しなきゃいけないという大変な道だったんですが、そこに有料道路を開設しております。明治 13 (1880) 年の話です。

ところが、残念ながらこの立山新道は、2 シーズンで会社が倒産してしまいました。鉄道ができて、それと補修費がかさんで、とても維持できなかったということですね。

次の写真は、針ノ木峠を越えたお雇い外国人です。ウォルター・ウェストンはもちろん通っていますし、外交官として有名なアーネスト・サトウも歩いています。それと、先ほど中村さんの話にも出てきましたが、日本アルプスの命名者のウィリアム・ガウランドも越えています。これはパージヴァル・ローエルさんという方の写真で、一番後ろの方だと思います。こんな感じで峠越えをしていたわけですね。有料道路がつぶれて、登山者のための道になったということです。

これは日本山岳会ができた翌年ですね、機関誌の『山岳』という雑誌があるんですが、そちらに発表された略図で、日本アルプスを想像して書いてあるんですね。日本山岳会を創ったお一人で、高頭式さんという大変なお金持ちの、越後の旦那さまがおられます。その方が、まだ地図がない時代だったものですから、文献と登山者の報告から想像して、日本アルプスの地図を作っております。

これは林並木さんという、四高（第四高等学校）、今で言う金沢大学の教授だった方が、槍・穂高周辺を歩いて描いた地図です。こんな地図を頼りに、当時の登山者は歩いていたということですね。槍・穂高連峰は難しくて、多分最後まで残っていたと思うんですが、槍・穂高を縦走できたのは明治 42（1909）年ですね。確か上高地から槍まで、鵜殿正雄さんという方が縦走しています。

皆さん、映画『劔岳 点の記』を見られた方も多いと思いますが、ああいう感じでアルプスを全部測量して、5 万分の 1 の地形図を作っていく作業が進んでいました。1900 年ちょうどぐらいには、もう大体測量が終わりまして、大正時代の頭には、5 万分の 1 図がほぼそろって、登山者も大分情報が豊かになったということです。

次の道は、燕岳から槍ヶ岳へ行く途中、大天井岳という所から先が非常に難路だったんですね。そこにこの小林喜作さんが道を造りました。喜作さんはもともと穂高町牧の猟師で、その人が独力で、確か 3 年ぐらいかけて造りました。「喜作新道」と名付けられ、有名な表銀座縦走コースの一部となっております。『あゝ野麦峠』を書かれた山本茂実さんの小説にもなっております。そのとき使った道具がこの写真ですね。

これは比較的新しい道ですが、白馬岳の先の朝日岳という山から、日本海まで行く道ができております。現在では糸魚川市になっておりますが、青海町という町がありまして、そこに「デンカ」の工場があります。昔の名前で言うと電気化学工業ですね。

そのデンカの社員だった小野健さんという方が独力で、中間の犬ヶ岳という山まで道を付けました。その後、さらにそこから延ばして行って、役所にも大分いじめられたそうですが、なんとか朝日岳までつなげました。そうしますと、もう槍・穂高から日本海まで歩ける、立派なロングトレイルになっているわけです。これは比較的新しいもので、1971 年の夏に全通しています。

最後に、北アルプスで「新道」と名前の付くものを挙げてみました。これだけいろいろな道があります。一番新しいのは、2006 年にできた雲切新道です。これは短いものなんですが、従来の道は仙人谷という谷筋を通っており、非常に危険で、遭難事故も多かったものですから、尾根道に造り替えたものです。

また、伊藤新道というのがありますが、高瀬川から湯俣温泉を経て三俣山荘に通じている立派な道があったんですけども、地形が大変厳しい所だったので維持管理も難しく、残念ながらもう廃道になっています。

下から 3 番目に重太郎新道というのがありますが、人のお名前です。奥飛騨の名ガイドであった今田重太郎さんが、上高地から岳沢を経て直接穂高へ登る、非常に険しい道を切り開いております。この方は道造りのプロでして、山口さんのヒュッテがある涸沢から穂高へ行くザイテングラートという、ちょっと険しい尾根道があるんですが、それも造っております。また、飛騨側から穂高岳山荘へ直登する白出沢ルートというのがあるんですが、そちらの道も大変な努力をして造っていらっしゃいます。

こんなふうにして、「新道」とは言っても古いものもあるんですが、先人たちが血のにじむよ

うな努力をした結果、現代の登山者がいろいろお好みのコースを歩けるようになったということです。

すみません、駆け足で説明させていただきました。では、本題に戻してください。

○若菜：ありがとうございます。もう聞けば聞くほど大変な時間と労力のかかった登山道、一步一步踏み締め、噛み締めないと申し訳ないような気分ですね。

それでは、少し話題を変えまして、そういった登山道を歩いている登山者の傾向ですが、どのような現状にあるのかということ、各山域ごとに簡単にお話しいただければ、と思います。

では、小池さんからお願いいたします。

○小池：最近の登山者なんですが、到着が遅い人が目立ちます。足を痛めたり、怪我をされたり、体調が悪かったりした場合は仕方ないと思うんですけど、もともと計画時点ですごく欲張りな人がいっぱいいて、それで遅くなるので、ちょっと困っていますね。

やっぱり小屋に着くのは午後3時前、遅くとも4時までと言われているんですけど、なぜかと言うと、万が一何かあったときにヘリなど救助要請をしようと思うと、明るいうちでないと対応ができないのです。日没の2〜3時間前というのが大切で、早めに小屋に着くように、という理由になっているのです。やっぱり何かあって手遅れになると、こちらもすごく残念なので、日没の3時間ぐらい前には小屋に着くようにしてほしいな、と常々思っています。

あと、夜中に歩く人がいるんですが、あれもやめてほしいですね。いろいろな登山の形態があるかと思うんですけど、北アルプスは夜に歩くものではないと思います。危ないですし、花とかも見えなくて踏み荒らしてしまうと思うんですよ。あと、やっぱり夜行性の熊にも遭うので、個人的にはやめてほしいな、と思っています。

もう一つ、私が小さいころにはなかったんですけど、そう決めつけるのはちょっと良くないかもしれませんが、最近山登りを始めた方は「登り優先」という言葉を知らないんだと思うんです。下りで止まってくれないので、それこそ、山口さんが100kgの荷物を背負って歩いているときに、下って来る人が止まってくれなかったら、山口さんが止まるのはつらいと思うんですよ。なので、やっぱり「登り優先」という言葉を、もうちょっと分かってほしいというか、知ってほしいな、と思います。

○若菜：山口さん、いかがですか？

○山口：今、小池さんが言われましたが、基本的には登り優先で、あとは臨機応変で対応すべきなんですよ。それぞれのパーティの疲れ具合とか、個人か団体かとか、その都度状況が異なるので、お互いに声を掛け合いながら判断すべきです。基本は登り優先ですが、場所と状況によっては下りの人が先に下りてもいいかなと思います。それはお互いさまで、空けてもらったら「すみませんね。じゃあ、お先に失礼します」と、そういう声掛けをすることも、山では非常に大事な、と思います。

それと、団体もいっぺんに20人、30人を1人で連れて歩くのは、やめてもらいたいと思いますね。できたらパーティを10人ずつぐらいに分けて、なるべくならその間もちょっとずつ間隔を空けながら歩くと、ほかの登山者も助かります。30人、40人がすれ違うのを待ってい

ると、本当に 5 分、10 分はすぐに経ってしまうので……。

それで、私もあちこちで言っているんですけど、すれ違いで避けるときは、必ず山側で休んで待機すること。登りの人でも下りの人でも、とにかくすれ違う人を待つときは、必ず山側で待つようにしましょう。

また、休む場所は、落石がありそうな沢筋では駄目です。これが基本ですよ。休むんだったら、大体尾根筋で休むようにしなきゃ。落石があった場合は、やっぱり石というのは沢に飛び込んでくる確率が結構高いので、そういう目配りも大事かな、というふうに感じています。

昨今の登山者はどういうふうに見えますか、という質問ですが、言うことを聞いてくれる人も結構いるんですが、一方、私の年代も含めて、昔、結構山をやっていた人が「俺はこれだけ登ってきたんだ」と言って、かなりブランクがあるのに、その当時の勢いのままで登って来ちゃう人がいますね。

3 年ぐらい前ですか、屏風岩を登っていた 70 歳近い人が、2 人で登っていたのですが 1 人がもう動けなくなって、結局、涸沢にいる救助隊の者が駆けつけて、屏風岩の岩壁からなんとか救助しました。ところが、救助隊が着いた途端になんて言ったかという、一言「遅い！」って言ったんだそうです。「救助に来るのが遅い」ということです。私はその場にはいなかったんですが、「これはもう、もう一晩ぐらい吊るしておこうかな」と思ったことでしょう。

そういう、なまじっか昔、山を登っていた人に限って、自分の若いころのイメージのままに振舞う人がときどきいます。私がそのとき現場にいたら、本当にもう蹴飛ばしてやろうかな、と思ったことでしょう。

いろいろな山の先輩がいますけれど、山での事故というのは昔も今も、絶対なくならないと思うんですが、基本的には自分のミスなんですね。地形判断ミス、天候判断ミス、行動判断ミス等々、やっぱりあくまでも自己責任の範疇で、ミスは自分自身が受け止めるしかないんです。ただ、どのくらいの人が、その自己責任という言葉を理解しているかな、という不安はありますね。

私が救助に行ったりしますと、まずその要救助者と私が話す会話は、「あなた、本当に大丈夫ですか。どうなんですか？」って。「あ、すみません、本当に救助をお願いします。助けてください」、「分かりました。じゃあ、これから私が手を出しますので、私の言うとおりにしてください」と。

ところが、なかには「ちょっと休んでいけば、なんとか行けると思うので……」とか、あとは「県警のヘリは無料なので、それを呼んでくれ」とか、いろいろあります。昔は民間の東邦航空のヘリをバンバン飛ばしてやっていたので、1 回飛ぶと 50～60 万円が飛んじゃうんですね。しかも、山岳保険に入っていればそれらを全部ペイできるのですが、保険に入っていない、お金の無い人に限ってそういうふうに言ってきます。

そんなわけで、「県警のヘリを呼べ」と言うような要救助者については、私たちは「悪いけど、小屋番の仕事が大分忙しいから、すぐ小屋に戻ります」と言って引き返します。

で、後になって「すみません、やっぱりお願いします。助けてください」という人が結構い

るんです。山のモラルを現場で説教しなきゃいけない時代になっちゃって、寂しい限りです。それで今は、何か事故があったときには、救助隊が現場に誓約書のような書類を持って行き、亡くなった人にはサインはもらえませんが、連れ合いとか仲間の人に、一応一筆書いてもらうような時代になってしまいました。ちょっと嘆かわしいな、という感じがします。

○若菜：米川さんの方は、いかがでしょうか。

○米川：同じようなことなんですけど、ジグザグに道が付いている所を近道しようとして、高山植物や苔なんかを平気で踏んづけて、直線で上り下りしちゃうんです。まさに踏み荒らしですね。呼吸を整えてゆっくり登ればいいんですけど、そういう登り方ができなくて、特に下りは真っ直ぐ下りちゃうという、そういう人がかなり増えてますね。

それから八ヶ岳の場合は、グリーンロープは必ず通行止めということになっているんですけど、その意味を知らないものだから、平気で潜って入って行っちゃうとか。特に女の人が多いように思います。「通行止めですよ」と、普段なら分かるはずなんですけれどね。あと、写真を撮る人もそうなんです。自分の撮りたい場所に入って行きたくて、やっぱりグリーンロープを平気で越して行くことがあります。そして、花がすごくきれいに咲いているということに気付かず踏んでいく。そういう心ないというか、そういう気持ちの人がいるのは、ちょっと残念で仕方ないですね。

○若菜：ありがとうございます。ところで、節田さんは、2009年に北海道のトムラウシ山で起こった大量遭難の、事故調査特別委員会の座長をなさっていらっしゃいましたが、遭難は登山者の自覚の問題だと思いますが、そういったものに関しては、どういったご意見をお持ちでしょうか。

○節田：トムラウシ山の遭難からちょうど10年経ちましたけれども、2009年の7月16日ですね。あれはツアー登山客とガイド合わせて8人、単独行の登山者が1人、さらに別ツアーの登山客が1人で、1つの山域で1日に10人が亡くなったという、夏山では珍しい大量遭難でした。ただ、ツアー登山における遭難ですので、一般の登山とはちょっと違うケースかな、と思います。いずれにせよ、あれは悪天候によるものでして、一義的にはガイドの気象判断ミスが原因の、いわゆる気象遭難と言えます。

夏山でも疲労凍死することがある、というのは昔からよく言われていたんですけども、この遭難によって低体温症の恐ろしさを目の当たりにし、皆さんの記憶に深く刻まれたのではないかと思います。

とは言っても、実は悪天候で遭難するケースというのは、意外と少ないんです。大体15%ぐらいです。あとは山口さんが言ったように、ほとんど本人のケアレスミスみたいな遭難が多いですね。

例えば、長野県の遭難統計を見ますと、転滑落が30%です。年寄りが多いんでしょうけど、転倒が23%。そして、最近多いのが道迷いですね。道迷いの結果、転滑落というケースも多分あると思うんですが、それらが遭難のほとんどですね。ですから、かなり個人的なミスから起こっている遭難が多いということですね。そのほか死亡事故につながるのが、持病がある

のに山へ来て、症状が悪化して亡くなるというケースが、結構目立っております。

これらを総括して言いますと、要するに、登りたい山と登れる山がミスマッチになっているからですね。現在、これだけいろいろな情報がたくさん手に入りますので、皆さんついつい、自分でも行けそうに思っちゃうんでしょね。ヤマケイがきれいな写真を載せるからいけないのかもしれませんが……。

そのように、山と自分の実力とのミスマッチが一番大きな遭難原因だろうということで、まず長野県で、遭難対策の検討会を開きまして、各山について難易度別のグレーディング化を進めました。この長野県の例が全国の主要山岳県に広がっておりまして、ほぼ各県で整いつつあります。そして、長野県ではさらに山のグレードだけではなく、各ルートごとのグレーディング化も進めていこうとしております。

いずれにせよ、遭難を減らすには、残念ながら特効薬はありません。回り道になりますけれども、教育や啓蒙活動を繰り返していくしかないと思います。そして、一番の問題は、現代の登山者はほとんど未組織登山者だということです。私や若菜君がヤマケイを作っていたころは、山岳部や山岳会に所属する組織登山者が結構いたんですけど、最近はおそらく5%もいないのではないかと思います。山岳会などの組織が衰退したり、高齢化したりしていますので。

要するに、山を学ぶ場が非常に少なくなっているということです。全国的な組織である日本山岳・スポーツクライミング協会や日本山岳会、日本勤労者山岳連盟などの活動にも期待したいと思いますし、登山用具店などもツアーを兼ねて、結構登山教室をやっていますし、登山やトレッキングが専門のツアー会社も、そういうところを心掛けていただいて、常に山を学べる場を作ってあげることが大事な、と思います。

○若菜：やはり主催する側も登山道を作るとか、トレイルを引くとか、素晴らしい山旅を企画するだけでなく、教育・啓蒙活動も併せて必要だということですね。

○節田：そうですね。

○若菜：ところで、近年はインバウンドが増えたということで、海外の観光客の方も非常にたくさん来日されており、統計でも、2018年には3,000万人を超えたというふうに伺っています。そして、海外の方々もだんだん滞在型や体験型の旅にシフトしてきていると聞いていますが、現状、各山域ではどのような感じでいらっしゃいますか。

山口さん、涸沢周辺はいかがですか？

○山口：涸沢や穂高については、涸沢経由で穂高に登る外国人は、私の実感ではそんなに増えていません。ただ、ほとんど韓国の人が多いんですが、韓国の人に来るコースはもう決まっているんです。1泊目が上高地から槍沢を上がって槍ヶ岳山荘。それで、2泊目が、雨が降ろうと槍が降ろうと朝から出て行って、大キレットを越えて北穂高小屋はごみ捨て場。さらに進んで、涸沢岳を越えて穂高岳山荘まで。

○若菜：どんな天気でも？

○山口：そうなんです。それで次の日は奥穂の頂上に登って、紀美子平から岳沢を経由し、上高地に下山というのが定番コースです。槍・穂高を縦走するにはどうかな、という感じの人も

含めて、年間 2,000 人ぐらいいるようですね。この間、槍ヶ岳山荘の 4 代目の穂荻大輔君が言っていました。

○若菜：そんなにいるんですか。

○山口：ええ。それと、大キレットを歩いたことのある人は、皆さん分かると思うんですけど、厳しい道ですから、1 人のガイドが連れて行けるのは 10 人、10 人も多いな、5 人ぐらいがいいのかな、と思います。南岳からずっと大キレットの岩稜を歩いて北穂に上がるまでの、あのコースは、もう落ちたら飛騨側も信州側も、どちらも即死というような場所なので、そういう所をあんふうに歩かれては……。しかも、その人たちの行動が、結構バラバラなんですね。遭難がないのが不思議なくらいで、ちょっと問題になっています。でも、韓国の人は兵役があるせいか、体力があるように感じます。

○若菜：小池さんはいかがですか？ やはり問題が生じておりますでしょうか。

○小池：やはり皆さん、富士山とか槍・穂高、劔岳などに行かれると思うので、うちもあんまりいらっしやらないんですけど、立山から槍ヶ岳に縦走するコースが、結構海外の人に紹介されているそうで、そのコースでいらっしやる方がいます。後はちょっと天気が悪くなって、槍ヶ岳から双六の方に下りてくる方がいらっしやることはあるのですが、そんなに多くはないです。

でも、多くないわりには問題もあって、コバイケイソウが咲いている時期に、10～15 人の団体がお花畑に入り込んで写真を撮っているんですよ。注意をしたいんですけど、さすがに人数も多いし、言葉も通じないので、ちょっと怖いなと思ってやめてしまったこともあります。

あと、うちのテント場でのことですが、韓国の人たちが 7 人パーティでいらっしやって、テントが何張かあったらしいんですけど、物を投げ合って喧嘩したらしいんです。本気の喧嘩をして。その物が別の日本人のテントに飛んで来てはぶつかるので、小屋に「注意してください」って何回か来たんです。そうこうしているうちに流血事件になって、なかには診療所に運ばれて、頭を 7 針か 8 針縫ってもらった人もいました。

○若菜：なんだか、すごく現実味のある話ですね（笑）。

○小池：それには続きがあって、次の日の朝、小屋に来て「俺は病院に行きたいから、ヘリを呼んでくれ」と。「ヘリはポリスマンが乗って来るだろうから、そいつに加害者を逮捕させろ」って。皆「えっ？」と目が点でした。言葉も通じないのでもう大変で、たまたま小屋にいた日本在住で、日本語をしゃべれる韓国の方がすごい勢いで怒ってくれて、そしたらしゅんとなって、結局は仲間と一緒に帰って行きましたけれど、すごく迷惑でした。

どうしてなのでしょうかね。国民性なのか、教育の問題なのか、ちょっとよく分からないんですけど、そんなことが山であると、それこそ警察も来られないので、下であるよりも怖いですね、本当に。

○若菜：海外の方に対しても、一定の啓蒙活動というか、そういう山を歩く上でのマナーなんかを知らしめる必要があるのかな、と思います。現実に関わった問題を披歴していただくと、余計にそのように感じますね。

米川さんはいかがですか。最近、皇太子殿下をご案内なさったというお話を伺いましたけど。
○米川：いや、いろいろ大変だったんですよ。やはり2日間ずっと付きっきりで、侍従の人たちが、わりと離れて歩きますので、結局、2人だけで話すわけですから、かなり気も遣いますし、とても知識の豊富な方だと聞いていたので、一生懸命勉強しました。

○若菜：事前学習をしたと……。

○米川：ただ、良かったのは、夜もご一緒して、コップ酒を飲んだのがとても嬉しかったです。

○若菜：素晴らしいですね。

○米川：ええ。

○若菜：話はインバウンドに戻りますが、どうしても問題点が先立ってしまうんですが、海外の方にとっては、日本のトレイルはとても美しく、親しみ深いものではないかな、というふうに思うんです。日本のトレイルはどちらかと言うと、先ほど中村さんがおっしゃっていたように、ウォーキングのカテゴリーに含まれるものであって、マウンテニアリングとはちょっと違うというふうに思いますけれども……。そういう意味で、海外の方がどのように認識しているか、そのあたり節田さん、どのように思われますか。

○節田：先ほど中村代表の話にもありましたように、日本の山は雪がなければ、本当に欧米で言うウォーキングの世界だと思います。特にヨーロッパでは、アルピニストの世界とハイカーの世界がはっきり分かれていますので、彼らにすれば、日本の夏山はもう明らかにウォーキングの世界ですね。

ヨーロッパでも同じような形で、最近注目されているのが、アルプス版のロングトレイルです。例えば、「オート・ルート」という道があるんですが、モンブランの麓のシャモニからマッターホルンの麓のツェルマットまで歩くトレイルで、フランス語で「高い道」という意味です。これはスキー・ツアーのコースとしても人気が高いものです。

そのほか、一番有名なのは、「ツール・ド・モンブラン」ですね。モンブラン山群をぐるっと一周するハイキングコースで、そのほか、モンテローザとかマッターホルンをそれぞれ一周するコースもあります。日本の山小屋と同じように設備が整っていて、おいしい料理とワインが提供されるのも魅力ですね。もちろん、日帰りのハイキングが最も盛んなんですけれども、そういう長い山旅もヨーロッパでも流行っているのが現状です。そういう人たちにとって、日本の北アルプスや八ヶ岳の縦走というのは、もう本当に、ぴったりウォーキングの世界じゃないかと思います。

山口さんのお話では、槍・穂高ではキムチの匂いが漂っているみたいですが、いずれ欧米のハイカーが増えてくるんじゃないかと思います。

○若菜：ありがとうございます。一朝一夕でそういった流れはできないと思うんですけれども、少しでも日本の山と山小屋、そして、トレイルの素晴らしさが、国内外の多くの方に実感していただければいいな、というふうに思っております。やはりその先駆けとなるのは、北アルプスだったり八ヶ岳だったり、日本の登山の歴史を創り上げてきた山域だと思いますので。

それでは、最後にひと言ずつ、山小屋を経営していらっしゃる皆さまに、やりがいや楽しさ

をお教えいただいて、このディスカッションを締めさせていただきたいと思います。

○小池：やはり小屋が良かった、道が良かった、と言ってくれるのが嬉しいですね。あとは、不便な場所で、下界で当たり前のようにあるような物がないので、苦勞して、工夫して、知恵を絞って、それで課題を解決できたときの達成感は、本当にすごいと思います。

それから、四季の自然を味わえることでしょうか。残雪から始まって花が咲いて、紅葉して、初雪が来て、と。そして、朝焼けや夕映えが見えたり、ブロッケンや雲海が出現したり、それから山のすべてを味わえるのが、とても魅力的ですし、そのような環境で働けることにやりがいを感じています。

○節田：小池さんはサラリーマンをしていて、お父さんに言われても、なかなか山へ上がって来なかったんだけど、じゃあ、小屋に入って正解だったの？

○小池：はい、楽しくやってます（一同笑）。

山小屋稼業が大変なのはよく分かっていたので、自分にできるかな、というのが一番気掛かりで、大分躊躇はしたんですけど、僕しかやる者がいなかったの、今は腹をくくって一生懸命やっています。楽しいです。

○山口：今、小池さんが言いましたけれども、やはり山小屋で仕事をしている人も、どうせ仕事をするなら楽しくやるのが一番ですね。そうすると、やはり来てくれるお客さんも、この小屋はなんか明るくて楽しそうだな、というふう感じてくれて、また来てくれるのかな、と思います。

私が山小屋に入り、さらに経営に携わって 50 年近くなるんですけども、最近すごく感じているのは、山の良さですね。すみません、手前味噌になりますが、これは昨日できたばかりの新しいパンフレットなんです。できたてのほやほやで、まだ湯気が出ているんですが（笑）、裏のページにあるのが、秋の涸沢ヒュッテの朝焼けの写真なんです。

1 週間に 1 回ぐらいしか、こういうシーンは見られないんですけども、このように紅葉が残っているときで、東日本大震災があった年でした。東北の仙台の方ですが、お母様がいらっしゃっていて、それで、帰り際に「良かった。本当にありがとうございました」と言うんです。「えっ、どうしたんですか？」「いや、震災で本当に落ち込んでいたんですけども、娘が『せっかくだから、お母さん行ってきなさいよ』と言って送り出してくれたんです。この穂高の、この美しさを見たときに、生きる喜びが出てきました」と。

「あっ、山って人にそういうものを与える所なんだ。俺たちも結構いい仕事をしているんじゃないかな」というのを、そのとき本当に感じました。

いろいろな所で災害が起きたりしていますけれども、やはり山に来ると、何か生きる喜びが湧いてくるんだな、というように、最近ひしひしと感じております。

○若菜：ありがとうございます。

○米川：お二方にもう言われましたけれども、本当に四季を通じて山に入っていること自体が楽しみだし、喜びだし、本当に山の良さをしみじみ感じています。私ももう 80 歳に近いんですけど、今でも山小屋に入っていることを後悔していませんし、登って来る人とお話する

とか、それから友だちになるとか、そういうことができるのは、山小屋が一番理想的な場所じゃないかと思うんです。だからこそ、飽きないんだと思います。もし、ずっと山小屋に入っていられるんだったら、下界よりは山小屋の方がはるかにいいと思っております。

○若菜：ありがとうございました。では、最後に節田さん、ひと言お願いいたします。

○節田：米川さんは、小屋へ上がると飲み過ぎるので、息子に止められているんです。「もう来るな」って（笑）。

こんな形で、おじさんたち3人、一生懸命山小屋を経営し、道直しに励んでいます。1軒の山小屋にも、1本の道にもそれぞれ歴史が刻まれています。もちろん、自然景観を鑑賞することは大きな魅力ですけれども、ときどきはこういった山の歴史にも心を通わせながら歩いていただければ、と思っております。ぜひ、山でお会いしましょう。

○若菜：ご登壇者の皆さん、ありがとうございました。これでこのディスカッションを終わらせていただきたいと思います。本日はありがとうございました（拍手）。

講演 「テ・アラロア～ニュージーランド ロングトレイルの旅～」

金井 麻美（登山ガイド）

登山ガイドの金井麻美と申します。先ほどはインバウンドのお話がありましたけれども、私の方は逆ですね。私自身が海外に行って歩いたトレイルの話をさせていただきます。

その前に、簡単に自己紹介をさせていただきます。私は登山ガイドをしております、神奈川県に住んでおります。神奈川県というのは、丹沢山地ですとか箱根ですとか、山があるんですけれども、あまり高くない山々ばかりですので、やはり夏はアルプスに行くことが多いです。今日お越しいただいている山小屋にもお世話になっております。そして、冬になりますと、地元の丹沢や箱根をガイドしております。

今日は「テ・アラロア」という、ニュージーランドのロングトレイルについて、海外のロングトレイルの事例としてお話いたします。

私とニュージーランドのロングトレイルとの出会いですけれども、少し前になりまして、2012年にニュージーランドの国立公園をトレッキングしていたときに、初めて「テ・アラロア」というロングトレイルに出会いました。その国立公園も「テ・アラロア」のルートの一部だったんですね。そこで、そのロングトレイルを歩こうとしているトレッカーから、いろいろ話を聞きまして、私もぜひ歩いてみたい、いろいろな世界を見てみたい、ということで、2013年から歩き始めました。

私の場合は、一度でそのトレイルを歩き切ったわけではなくて、分割して歩きました。一度で歩くトレッカーの皆さんのことを「スルー・ウォーカー」とか、「スルー・ハイカー」と言ったりするようなんですけど、私の場合は「セクション・ウォーカー」ですね。セクションに分け



て歩きましたので、セクション・ウォーカーとして 3,000km の旅をしてまいりました。

では、スタートいたしますが、4 項目に分けてお話してまいります。1 つ目が「ニュージーランドの概要」ということで、先ほどから日本のお話を中心になっていましたので、まずはニュージーランドがどんな所かということ、簡単にお話いたします。

2 番目に「テ・アラロア」というロングトレイルの概要をお話いたしまして、3 番目に「トレイルの衣食住+α」のお話をさせていただきます。そして、4 番目が「楽しみ方」ということで、まとめて替えさせていただきます。

まずは「ニュージーランドの概要」ということで、ニュージーランドがどんな所なのか、というお話をさせていただきます。

ニュージーランドは、この地図の水色の部分です。ニュージーランドは日本と同じように島国でして、形も少し日本に似ていますかね。南北に細長い、島々が集まった国になっております。たまにオーストラリアをニュージーランドと間違っている方がいらっしゃいますが……。

一方、日本との違いになりますけれども、日本は北半球にあります、ニュージーランドは南半球にありますので、季節が逆になっております。ちょうど今は、夏の終わりぐらいになります。あと、日本との違いをお教えしますと、日本というのはユーラシア大陸に非常に近いんですね。朝鮮半島、中国に非常に近い所に位置しているんですけども、それに対してニュージーランドは、一番近い大陸がオーストラリア大陸になっていまして、それも 2,000km も離れております。その次に近い大陸が南極大陸になりまして、約 2,600km 離れております。ですので、日本のような島国で、南北に長い国ではあるんですけども、大陸が近くにないということで、陸の孤島のような島々の集まった国です。先進国でこれだけ大陸に近くない国というのは、ニュージーランドだけかと思います。

では、次に行きます。ちょっと簡単にニュージーランドとはこんな国ですよ、というご案内をしてまいります。面積が 26 万 8,860km² ということで、大きさがよく分からないと思いますが、日本よりも小さめの国です。日本の北海道を抜かしたぐらいの国土の広さ、というふうに思ってください。

その中の人口が 487 万人ということですが、それは一体どれぐらいの人数なのかと言いますと、兵庫県の西宮市の人口の 10 倍と同じぐらいということです。でも、これもちょっと分かりづらいですかね。とにかく、人口は日本よりもかなり少ないということです。

環境は、先ほど大陸からはかなり離れていますよ、とお話したんですけども、環太平洋造山帯に属して、数百 km にわたる山脈、活火山の山々、フィヨルドなど、変化に富んだ自然環境があります。また、気候は西岸海洋性気候で、気温の格差が少ないということで、日本よりも冬と夏の気温差が少ないという気候になっております。

続きまして「トレイルの概要」をお話いたします。この「テ・アラロア」という言葉は、不思議な響きかなと思うんですけども、この意味が、英語では「the long pathway」となり、ロングトレイルそのままなんです。すなわち、先住民族のマオリ族の言葉で、「テ・アラロア」とは「ロングトレイル」という意味だそうです。

ちなみに、ニュージーランドの先住民族のマオリ族は、ハワイアンと同じポリネシア系の太平洋の民族で、1,000年ぐらい前にニュージーランドに渡って来た、と言われております。

では、そのロングトレイルの距離、所要時間、所要日数ですが、どれぐらいかと言いますと、約3,000kmになっております。3,000kmを4ヶ月から6ヶ月ぐらいで歩くのが平均、とされております。

これも3,000kmと言うと、ちょっとイメージが湧きづらいかもしれませんが、日本縦断に置き換えますと、北海道、本州、九州を縦断する距離とほぼ同じぐらい、とのことですよ。それを4ヶ月から6ヶ月ぐらいかけて歩く方が多いんですけども、計算してみますと、1日当たり25km歩くと120日で完歩できるので、約4ヶ月ということになるんですが、1日25kmってすごい距離ですよ。平地でもかなり大変な距離になるかと思います。

実際は、登山道の状況ですとか、歩いているトレイルが道路なのか山岳地帯なのかとか、天気や体調によって左右されますので、平均的には5ヶ月から6ヶ月ぐらいで歩く方が多いんじゃないかな、と思います。

私の場合をお伝えしますと、先ほどお話ししましたように、スルー・ハイクではなくセクション・ハイクで、4年かけて歩きました。4年の間、ずっと歩いていたわけではなくて、お休みを取って、毎年通って完歩したということです。大体1回行って1ヶ月、2ヶ月滞在して歩く。そして、また次の年にその続きからスタートするということをして歩きましたので、トータルで半年ぐらいかかったかな、と思います。

先ほどセクション・ハイクなどの話をしたんですが、「テ・アラロア」に関しましては、私の印象としてはスルー・ハイクで歩くトレッカーが多いかな、と思いました。私のようにセクションで歩いていたのは、地元のニュージーランドの方々が多かったような印象があります。

では、次にニュージーランドの地図を拡大してみました。これはトレイルの全体像になります。数字が書いてありますが、この数字が一番北のゼロという所、ケープ・レインガという岬があるんですが、そこからの距離になっていまして、一番南がブラフという南端の町の、スターリング・ポイントという所になっています。

これを見ますと、トレイルがはじめ、北島の北ですと海岸沿いを通っていたり、その後は内陸を通ることが分かると思います。また、この青い線は川のパートで、カヌーで川を下る川のトレイルになっています。

後は北島と南島の間には橋がないので、そこはフェリーで渡ることになります。そのほか、下にも青い線があったり、この地図にはないパートで、徒渉をしたりとか、川を下るセクションもあります。

北がゼロで、南が3,000になっているんですが、どちらからスタートしてもいいんです。クラシックなのは北から南に行くルートのようなんですが、私が出会ったウォーカーの中には、逆の方も結構いましたね。北上ハイクもいましたので、どちらから歩いても、それほど標高差は変わらないのかもしれないですね。

後は赤い実線です。陸のトレイルなんですけれども、この赤の中には、後でお伝えしますが、

いろいろなトレイルが含まれています。いわゆる山岳地帯を歩いたりとか、林道を歩いたりとか、道路なんかも含まれていて、この陸のトレイルになっています。

次に、この「テ・アラロア」の歴史について簡単にご紹介します。テ・アラロア・トラストが中心になって、既存のトレイルをつなぎながら距離を延ばしていった、2011年12月に全区間開通したとのこと。そのうち2300kmはもともとあったトレイルで、残りの700kmが新規に開拓したトレイルとなっています。

ニュージーランドという国はアウトドア大国で、「テ・アラロア」が開通する以前からトレイルがたくさんあったんですけれども、ニュージーランドの作家ジェフ・チャペルさんという男性が、ニュージーランドを横断するトレイルの構想を新聞で発表して、それをきっかけにテ・アラロア・トラストを立ち上げて、トレイルを整備し、開通に至ったとのこと。

ジェフ・チャペルさんは作家として、その開通に至るまでのエピソードを本にしておりますので、ご興味がある方はぜひ探してみてください。タイトルは、そのまま『Te Araroa』だったと思います。

テ・アラロア・トラストは、現在もトレイルの整備をしたり、トレイルの公式ガイドブックや公式ホームページを管理運営しています。ホームページもしっかりしたものでして、そこには地図もダウンロードできるようになっていますので、私の場合、こんな感じでA4の紙に両面で張ったりとか、最後の方は、紙をけちるのと同時に無駄にしないように、両面で4枚、1枚で4枚の地図が見られるようにしたりして活用しました。

では、次に行きます。先ほどの地図の左上にこのマークがあったと思うんですが、こちらが「テ・アラロア」のトレイルのマークになっています。トレイル上には、このマークのほかに、ちょっと見づらいかもしれないんですけど、真ん中に棒が立っていて、棒にオレンジ色のトライアングルが組み合わせてあるマークも見られることがあります。このマークが付いているトレイルというのは、ニュージーランドの自然保護局が管理しているトレイル、ということになっています。

先ほどお伝えしたように、「テ・アラロア」は既存のトレイルと、新しく造ったトレイルが混じっていますので、新しく造ったトレイルには、基本的には先ほどのトラストのマーク、昔からあったトレイルには、この自然保護局のマークが付いています。ニュージーランドではDOCって言うんですけども、Department of Conservationの略です。なので、トレイルでは、先ほどのトラストのマークか、このオレンジ色のマークを追って歩くことになります。

先ほども地図を見ながらお話ししましたが、様々な環境を歩くトレイルということで、いろいろなシーンがありまして、海岸だったり、草原だったり、森の中だったり、アルパインのエリアだったり、川の中だったり、牧場だったり、町中だったり、大学のキャンパスの中にも「テ・アラロア」のトレイルが通っています。大学のキャンパスを通り抜けるというのは、日本ではなかなかないかもしれないんですけども、オークランドというニュージーランド最大の都市にあるオークランド大学の中も、トレイルのコースになっていたりします。

では、実際にトレイルの様子を見ていきましょう。こんな感じでビーチを歩くセクションが

あります。先ほどお話に出た、みちのく潮風トレイルのように、日本のトレイルでもビーチを歩くセクションがありましたが、ニュージーランドでもこういったビーチ歩きがあります。一方、北島のトレイルで結構多いのが、このように道路を歩くセクションで、国道1号線の横を歩きます。

そのほか、森の中もいろいろな森がありまして、このような亜熱帯を思わせるような森や、大きなシダがある森とか、後はこのように苔むした、非常に美しいというか、不気味な森のトレイルもあります。私はとても好きなんですが、こういった森の中も歩きます。これは、屋久島以上に雨が降ると言われるタラロアという所の森なんですけれども、ブナの木がこんなふうに苔むしています。

そして、こんな感じの気持ちが良い草原の中を歩くセクションが、南島には多くあります。後はその上の世界ですね。アルパインということで、草も生えないような所を、峠越えのときには歩いたりもします。

続きまして、「トレイルの衣食住+α」ということで、実際にどんな装備で歩いて、どんな所に寝泊まりしているのか、ということをお話していきます。

衣食住の中の「住」から見ていきますと、ハットかテントか、町中ではバックパッカーズに泊まったり、民泊したりとか、それらを利用して旅をしていました。ハットというのは、ニュージーランドらしい特徴的な宿泊場所だと思うんですけども、日本で言うと避難小屋になります。ただ、日本の避難小屋というのは、基本的には避難する小屋ということで、お手洗いがなかったり、水がなかったりとか、そういった環境が多いかと思うんですけども、ニュージーランドでは、このハットもいろいろなカテゴリーがありまして、水があるけどトイレがないハットがあったり、薪ストーブがあっってお手洗いがあって、建物の中にも蛇口があるようなハットがあったりとか、カテゴリーが分かれています。

有人か無人かといいますと、「テ・アラロア」で立ち寄るような小屋は、基本的には無人の小屋でして、カテゴリーで言いますと「スタンダード・ハット」という、寝るためのマットレス、トイレ、水、場合によっては薪ストーブがあるような小屋が、トレイル上にはたくさんあります。

実際にどんな所か、見ていきます。これは、ネルソン・レイクス国立公園の小屋なんですけど、こんな感じの、気持ちがいいロケーションにあります。このハットは少し大きな、30人以上泊まれるハットになっていて、もちろん内側に水道があったり、お手洗いも確か水洗だったかな。比較的大きな小屋ですが、この小屋も無人小屋です。

対して、こんな小屋もあります。この小屋も、先ほどお伝えしたように「スタンダード・ハット」といって、水とトイレの提供がある小屋なんですけど、2人専用ですね。マットレスが2つ、2段ベッドが2つあるだけの小屋なんですけれども、水はありますね。左手にレインウォーターをためているタンクがあるんですけど、水がありますので、こちらの小屋も「スタンダード・ハット」のカテゴリーになっています。

もうちょっと大きな小屋の内部を見てみましょう。こちらは1枚目に見た小屋と同じぐらい

のランクの小屋なのですが、真ん中にストーブがあって、皆が濡れた衣服を干しています。大きなテーブルがあって、多分炊事をしていると思うんですが、奥に人がいますね。大きな小屋になると、これぐらいきれいな所もあります。

ベッドルームはこんな感じで、マットレスがあります。「スタンダード・ハット」以上になると、このようにマットレスがありますので、寝袋は必要なんですが、マットは持って行かなくてもいいんですね。こんな感じの3段ベッドの小屋にも泊まったりしました。

ちなみに、ハットはカテゴリーによって有料だったり、無料だったりしますので、興味がある方は、ぜひDOCのサイトを見てください。

ハットがないトレイル・セクションというのもあったんですけども、そういうときには、やはりテントを張って泊まっていたみたいです。特に北島の北部は高い山がないということで、逆にハットがなかったんですね。なので、そうすると水も担いで行って、稜線上でテントを張って泊まるっていうことも結構ありました。

テント泊も楽しいですね。これは、焚火をしても大丈夫な所で焚火をして、テントを張ってご飯を食べるところです。テントはプライベート空間があるということで、トレイル上でいきなりテントを張って、泊まっていたカップルなんかにも会いました。

次が衣食住の中の「食」ということで、基本はドライフードが中心になります。そして、町中に下りたときに、欲するものを食べられるだけ食べていました。ドライフードなんですが、ニュージーランドも日本と同じように、アルファ米とか乾燥のお味噌汁のような、フリーズドライの食品が結構充実してまして、お米もありますし、後はお湯を入ただけで食べられるような、パスタの類なんかも結構ありました。

そして、私が非常にお世話になったのが「出前一丁」。確か香港かシンガポールで作っている「出前一丁」が、ニュージーランドのスーパーで結構売ってまして、見付けると必ず買って食べていました。どんなふうに食べているかというと、食堂でお湯を沸かして入れるだけのことが多いんですが、こんな感じで、小屋に着いたらまずお湯を沸かして、お湯を注いで、食事の支度をします。水と同じぐらい大事なのが、燃料としてのこのガスでしたね。

朝食には、シリアルを食べることが多かったです。ドライミルクというのが売っているんですけども、ドライミルクにシリアルとかドライフルーツを入れて食べていました。

私はドライフード中心の軽量化重視だったんですが、先ほどの一緒にキャンプしたアレックスという男の子なんかは、ドライフードは高いということで、普通にパスタを食べていました。なので、トレイル上では持てれば何を食べてもいいんじゃないですかね。彼はひたすらパスタを食べていました。

次に衣食住の「衣」ということで、基本は日本の山と同じですね。レイヤリング、すなわち重ね着で調整しています。まずベース・レイヤーですね。そして、肌着の上にミッド・レイヤー、フリースを着て、寒いときにはアウターを着たりして調節します。このレイヤリング以上にニュージーランドで悩ましかったのが、足元ですかね。日本のロングトレイルも恐らく同じかと思うんですけども、いろいろな状況のトレイルがありますので、快適な靴というのがそ

のときどきで違うということで、いつも悩んで、最後まで悩んでいました。

これが私の靴なんです、この年は北島の道路をたくさん歩くセクションを歩くということだったので、ローカットの、一応ゴアテックスの靴を履いて行ったんですが、意外にドロドロの山岳地帯もあって、後悔した道なんです。トレイルによっては、そういったローカットのハイキング・シューズが快適だったりするんですが、ニュージーランドも日本と同じように険しい山並みもあつたりしますので、そうするとトレッキング・ブーツとか、登山靴がいいかな、というシーンも多々ありました。で、徒渉のときには脱いで、こんな感じで裸足で渡ることもありました。

靴というのは、衣類以上にたくさん持てないですよ。持っても登山靴、もしくはトレッキング・シューズとサンダルという組み合わせになると思うんですけども、よく下調べをして、慎重に選びたいな、と思いました。

最後に「楽しみ方」ということで、まとめて替えさせていただきます。「テ・アラロア」というトレイルは、比較的新しいトレイルです。2011年に開通して、まだまだこれから知られていくトレイルなんですけれども、本当に独りぼっちのことが結構ありました。日本の山でも、歩いているときは独りだけでも、小屋とかテント場ではほかのハイカーと会話したりとか、そういった感じで皆さん歩かれていると思うんですが、ニュージーランドのトレイルでは、人口も少なかったり、まだまだこのトレイルがメジャーとは言えないということで、本当に独りぼっちで歩くことも多かったんです。

独りぼっちで不安だったり、寂しくなったりすることも、もちろんあったんですけども、何よりもこんなすごい景色を自分だけで独占している幸せっていうのを私は感じていまして、最高のぜいたくだなって思って、エンジョイしていました。

一方で、一期一会も大切にすると、すごく毎日が充実していました。なんせ人に会わないので、出会った人の顔が本当に忘れられなくて……。出会う人というのは、もちろん同じトレイルを歩いているハイカーだったり、後は地元の人々ですね。先ほどご覧いただきましたように、トレイルが結構うねうねしていまして、船を使って渡るパートとかもあるんですね。そうすると、自分が船を持っていなかったり、カヌーをすぐに手配できなかったりすると、地元の人にそのセクションはお願いするというか、船に乗せていただいたり、民泊させていただいたりとか、そういったことがたびたびありました。これはなかなか経験できないことですし、本当に一期一会ということで、この瞬間の出会いとか、機会というのは二度とないんだな、といつも思っていました。それが今の自分の人生の糧にもなっていますので、孤独を味わいながらも出会いも大切に。そんな楽しみ方ができれば、とても素晴らしいトレイル・ウォークになるかな、というふうに思います。

最後に、一期一会ということで、この瞬間もこのときしかないということで、自分が出会ったすてきな瞬間の写真をご覧いただきまして、終わりのご挨拶に代えさせていただきます。

こんな感じの朝焼けというのもありました。私しか見ていなかったんですけども、素晴らしい朝焼けの朝でした。こういう動物との出会いも、とても貴重でした。ニュージーランドと

いうのは、コウモリしか哺乳類がいなかった島でして、鳥たちの楽園なんですね。種類にもよりますけれども、本当に鳥が手の届く所まで来てくれるんです。来てくれると言うと、ちょっと変なんですけれども、実際は自分の縄張りを主張しているんだという話もあります。本当にこんな経験はなかなかないと思います。これはニュージーランド・ロビンという鳥です。本当に珍しそうに私の顔を見て、見つめ合っていました。

これは、前日に同じテントに泊まったハイカーたちの写真です。本当に素晴らしい天気で、彼らはテントを乾かしているんですけれども、なんと爽やかで、素晴らしい朝だったんですね。そんな忘れられない1枚です。

これが最後のカットで、ザックを背負って歩いていったという記念の写真です。では、駆け足になりましたけれども、「テ・アラロア」の話をさせていただきました。ご清聴ありがとうございました（拍手）。

トレイル報告① みちのく潮風トレイル

相澤 久美（みちのくトレイルクラブ 常務理事）

みちのくトレイルクラブの常務理事をしております相澤と申します。今回、シンポジウムにお招きいただきましたが、実は私、3年前に最初にこちらにお伺いいたしましたときは、トレイルの「ト」の字も知らない状態で、いろいろなトレイルの皆さんから勉強させていただいて、その後、みちのく潮風トレイルの管理運営計画の策定に携わってまいりました。



私は建築家として、あと編集者、それから映画のプロデューサーという、いくつかの顔を持って活動しているんですが、編集者という肩書の中で、東日本大震災以降、災害支援のフリーペーパーを作る活動をしていました。それで東北にずっと通っていたなかで、様々なご縁があって、みちのく潮風トレイル事業に関わることになりました。それまでは、いろいろな方と一緒に建築であったり、本であったり、映画であったり、様々なものを協働して作るということをして、ずっと行ってきておりました。

これが、みちのく潮風トレイルの地図です。右端が青森県、左端の方が福島県になっております。2015年の5月7日に、環境省が「グリーン復興ビジョン」を発表して、その中でずっとトレイルの計画が行われてきました。

そして、2019年の6月9日、東北沿岸4県28市町村が1本につながるようになっております。今回お配りしている資料の中に、6月9日の全線開通式の情報も入っていると思いますので、よろしければぜひお出かけください。資料右端の八戸市から左端の相馬市までを結ぶ、長大なトレイルになっております。

私がこれまで皆さんから勉強させていただいたトレイルもそうでしたけれど、自然が創り出した見事な景色、東北に住む人々との心温まる交流、土地の暮らしが育んだ歴史や文化、自然の恵みとしての海の幸、そして、ご当地グルメを味わえる楽しみ——これがみちのく潮風トレイルの特徴なのですが、自然の脅威や津波の痕跡を体感できるのも、このトレイルならではの魅力だと思います。これが青森県八戸市・蕪島^{かぶ}から福島県相馬市の松川浦まで 1,000km、1 本の道としてつながるという、壮大なスケールのナショナル・トレイルの準備が進んでおります。

私は映画をやっておりますので、トレイルの動画を少々作成いたしました。短いものですが、フェイスブックやホームページからご覧いただければ、と思います。

先ほど金井さんのお話にもありましたが、このトレイルは海岸線を通るトレイルになっております。それから、ルート沿いに NHK の朝ドラ「あまちゃん」で有名になった三陸鉄道が走っておりまして、JR 八戸線など鉄道を伝いながら楽しんでいただけるようになっております。

それから、小さな漁村をたくさん通ります。ですから、そこで漁師の皆さんとか、ワカメを湯がいている皆さんとの交流なども楽しめる道になっています。また、深い森や林の中を縫ったり、峠を越えるような道もありまして、多種多様な道を楽しんでいただけます。

山も登ります。一番高いのは青森県にある階上岳^{はしかみ}という山です。今、写真に写っているのは田東山^{たつがねさん}という、南三陸町にある山の山頂から今年の冬、撮影した海岸線で、リアス式海岸の地形が大変良く見えています。

写真はそんなに多く用意してなくて大変申し訳ないんですが、皆さんにぜひいらしていただいて、雄大な風景をご自身の目で楽しんでいただければ、と思います。

この道は、作家でバックパッカーの加藤則芳さんという方が発案されたものです。ご存じの方も、ご存じではない方もいらっしゃると思いますが、日本にロングトレイルを文化として紹介した最初の方ではないか、と伺っております。こちらに書いてありますように、野生の自然の中に身をさらして学ぶことの大切さ、これをずっと訴え続けてこられた方で、震災前から三陸海岸にトレイルを、歩く旅の道を造ったらどうなんだ、というようなことを環境省の方にお話されていた、と聞いております。

ただ、みちのく潮風トレイルが実際に具体的に動くことになった契機は、やはり 2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災でした。これを契機に、環境省が三陸復興国立公園の創設を核とした「グリーン復興ビジョン」というものを、2012 年の 5 月 7 日に発表しています。

その基本理念は、国立公園の創設を核としたグリーン復興です。「森、里、川、海が育む自然とともに歩む復興」ということで、3 つの基本理念を掲げながら、具体的な取り組みとして 7 つの事業を策定しました。

そのうちの 1 つとして挙げられているのが、三陸海岸を南北につなぎ交流を深める道、「東北海岸トレイル」という長距離自然歩道です。先ほど環境省の鳥居さんからお話がございましたが、長距離自然歩道の構想が発表されたのは、昭和 44 (1969) 年の 1 月でした。みちのく潮風トレイルが全線開通するのは 2019 年ですから、ちょうど 50 年目という記念すべき年に、新しいトレイルが開通するわけで、それが東北の地であるということに非常に大きな意味があり、

感慨深いものがあります。

私の齢がばれてしましますが、実は 1969 年生まれでして、長距離自然歩道と同じ年ということで、この事業に関わっていることに何かご縁があるのかな、と勝手に思っています。

名称は一般公募により「みちのく潮風トレイル」に決定しました。平成 24 (2012) 年から環境省の自主事業として進め、これも先ほど鳥居さんのお話にありましたが、地元の方の声を聞きながら、ワークショップによる路線決定や、住民とともに現地調査もされたと聞いています。他方、様々なイベントによる普及・啓発活動もされたとのことです。

これは本当に震災直後の動きでして、いろいろ異を唱える方もいらっしゃったと聞いておりますが、環境省の皆さん、本当によく頑張られたな、と思います。その後、暗中模索していくなかで、路線の設定と並行して最優先事項の整理が必要だという流れになった際に、地域の合意と地域を挙げた機運の醸成、1,000km の道 (当時、私は 700km と聞いていましたけれども) を一定のクオリティで管理をすることと、路体管理者が 4 県 28 市町村に及ぶことの難しさが指摘されました。

ということで、過去の自然歩道と同じ轍は踏まないように、新しい仕組み作りが考えられました。担当者が代わってしまうという役所の宿命がありますので、それを途切れさせないためには、民間を交えた管理運営体制を構築すべきではないか、ということになりまして、そこから私が関わるようになっております。

そうして、みちのく潮風トレイル管理運営のための体制づくりというのを平成 27 (2015) 年から始めました。まずは全線の調査、それから 4 県 28 市町村にわたる 15 地域の民間団体のヒアリングも行いました。

それから、先進地事例の調査もしました。このときに高島トレイル、九州自然歩道、美里フットパス、そして、こちらの日本ロングトレイル協会のシンポジウムにも参加させていただくなどして、様々なことを学ばせていただきました。その節は、本当にありがとうございました。

そして、管理運営体制案を構築しまして、全ルートをいくつかのセクションに分け、管理コードを付けました。先ほど金井さんもおっしゃっていたように、区間ごとに区切って難易度や、課題をリストアップしていく作業をしました。

これが最初に作った管理運営計画なんですけれども、1,000km の道をいくつかのセクションに分けて、民間団体や東北の太平洋岸にある 4 つの環境省自然保護官事務所と連携した体制を構築してはどうか、ということを検討してまいりました。それから路体管理の仕組みも考えてみました。

ロングトレイルは造ることはできますが、やはりその管理が本当に大変だということを皆さんから教えていただいておりますので、いかに管理していくかということを一生懸命に考えてきました。

その結果、まず情報共有が足りていない、ということが課題となりました。関係する市町村や、全体での情報共有がなされていないということを痛感しまして、「保護官会議」という形で、環境省の保護官事務所にいる皆さんと綿密な会議を開催したり、市町村や地域関係者との情報

交換の場をつくりましょう、ということを提案しました。そこで、平成 28 (2016) 年から現在まで、保護官会議を毎月実施して、情報共有に努めてきました。

やはり一番情報を持っていらっしゃるのは、路体の策定をされてきた環境省の保護官の皆さんでしたので、民間の我々がいろいろなことを教えていただいて、それをどう落とし込むかということを検討してきました。

あとは、共通理念としてのトレイル憲章の策定です。これは信越トレイルに教えていただきました。多くの方が関わるトレイルですので、何のために、誰のためにやっているのかということ、皆でしっかり、いつまでも忘れずに持っていけるものを作ろうということで、その策定も行いました。

それから、トレイル沿線の 6 ヶ所で、ミニ・フォーラムを開催しました。地域住民の方々に、みちのく潮風トレイルが全然浸透しきっていなかったもので、それを促進するためのフォーラムの開催です。それから、市町村の担当者や地域関係者を含むワークショップを開催して、皆さんがどんなことでお困りなのか、どういったことをお考えなのか、ということ聞きながら進めてきました。

また、翌年は先進地事例の調査として、スペインのカミーノ・デ・サンティアゴという、スペインの巡礼の道の調査も行いました。こうして管理体制を確立し、管理運営計画を策定していったわけです。

そのときに皆で作った理念がこちらです。前文と 6 項目から成っていますが、やはり自然の脅威である震災をきっかけにできたものですので、その自然から私たちが学ぶことが多いということ。それから、その自然とどのような関係を結ぶのか、というようなことを前文では謳っております。そして、美しい風土を楽しむ道や、交流が生まれる道、自然の優しさと厳しさを胸に刻む道、震災をいつまでも語り継ぐための記憶の道、それから豊かな自然文化を次世代へ受け継ぐ道と、トレイルを位置付けています。

そして、何よりも歩いてくださるハイカーの皆さん、地域の皆さん、それから歩くことを愛するすべての人々を歓迎して、一緒に皆で育てる道とします、ということを決めました。その結果、こういった沿線の 6 つの施設で全線を管理していく体制が整ってきました。

平成 28 (2016) 年から実際に立てた計画に沿って実施してきました。私は当時、くりこま高原自然学校という自然学校をサポートする形で、プロジェクト・マネージャーとして参加していたんですが、東北のロングトレイルを管理する団体を立ち上げるということで、「みちのくトレイルクラブ」という NPO を設立しました。我々が統括本部となり、5 つのビジターセンターやインフォメーションセンターと協働して、路体管理や情報収集を中心に管理運営していく体制になっています。今年は NPO に新たなスタッフを迎えて、様々な取り組みをしながら、全線 4 県 28 市町村の皆さんと連携して道の管理運営を進めているところです。

メンテナンス・マニュアルなどを策定して、巡視作業を市町村の皆さんときっちり行いながら、道の状態を把握する台帳の作成、それから利用促進のため情報を集約して発信していく事業などを進めています。そのために「サテライト連絡会」というものと、市町村の皆さんに

参加していただく「地域連絡会」というものを、年に2回ずつ開いています。

加藤則芳さんがおっしゃっていた、「ロングトレイルは、自治体間の連携と民間主導で維持管理することが重要だ」というアドバイスからも学びまして、このような形で、これからも管理運営を続けていきたいと思っております。

「みちのくトレイルクラブ」は中心にいるわけではなくて、主役は本当に地域の方、住民の方、市町村の方、サテライトの方、それから歩いてくださるハイカーの皆さんです。環境省と今まで手を組んで、ずっと一緒にここまで進んできましたが、これからも良いチームワークを保ちながら、やっていきたいと思っております。

本当に多くの方々に感謝しております。さて、これで終わりかと思いきや、実はここからが本番です。私どものベースとなる名取トレイルセンターというものが完成しまして、開所式があります。また、6月9日にはトレイルの全線開通記念式典とシンポジウムもあります。そして、ハイカーの皆さんを迎え入れるための準備をしなければなりません。

これは、「2019年に外国人が訪れるべき日本の観光地ランキング」です。トップ10のうち鳥取県が1位ですが、みちのく潮風トレイル（青森県～福島県）は6位に入りました。ですから、受け入れ態勢の整備と、さらなる利用促進、1,000km分の情報収集、それから情報発信が大切ですね。

そして、データブックです。先ほど金井さんが持ってらっしゃったような、ああいった手持ちで歩ける情報をデータブックと言いますが、その作成を検討し、今はスルー・ハイカーに現地調査をしてもらっています。それから、年に1回はスルー・ハイカーによる全線踏査を実施したいと考えております。また、デジタルマップやアプリの検討も必要でしょう。さらに、沿線でいろいろお手伝いしてくださる方がいらっしゃると思いますが、いわゆるトレイル・エンジェルさんとのネットワークの構築や、踏破認定制度の策定、トレイル・グッズの開発なども考えられます。

現在、海外からの問い合わせも結構増えてきていますので、ツアーのプランも考えなければいけません。また、こういった所で登壇の機会をいただいたりして、広報活動もしっかりやっていかなければ、と考えております。あと、『グリーンレター』という雑誌でロングトレイルの特集をしていただきまして、みちのく潮風トレイルを6ページ取り上げていただきました。

そのほか資金調達。これは我々理事の仕事になっております。そして、何よりも4県28市町村、環境省、そして地域との連携を強化し、このチームをしっかりつないでいくことが大事だと思っております。

最後に、トレイルの写真ではないんですけども、私が大好きな写真を1枚お見せします。これは大船渡市の三陸町という駅の前にあるプレハブなんですけど、震災以降の写真です。仮設の商店街にあった美容院なんですけれども、そこにいろいろな方が来て、いろいろな絵を描いてくださって、いろいろな思いの詰まったプレハブでした。ところが、美容院の本店ができたために、つぶしてしまうということになり、それはもったいないので、移築して今、ハイカーを泊めてくださっています。

もうボランティアは本当に減ってしまったんですが、こういった様々なボランティアの方に支えられた東北の地に、これからはハイカーが歩きに来てくれるだろう。そういった人々を恩返しとして温かく迎え入れてあげよう、ということを、東北の人々は皆さんおっしゃっています。

ですので、温かい気持ちを持った東北の皆さんの所にぜひお越しいただけるよう、東北人の一人としてお願いいたします。そして、環境省をはじめ多くの皆さまに、ここまでご協力いただいたことを大変感謝しております。ご清聴ありがとうございました。

トレイル報告② 広島湾岸トレイル

田川 宏規（広島湾岸トレイル協議会 会長）

広島湾岸トレイル協議会の田川です。私のトレイル報告は、今のみちのく潮風トレイルと違いました、その後を追うように昨年、西日本豪雨災害という未曾有の災害に見舞われた話が中心になります。

我々の活動は今から 6 年前、広島にロングトレイルを造ろう、ということで始めました。そのときは有志 3 人で始めたわけですが、現在は 28 の山団体、自然環境団体、整備団体が集い、約 1,900 人がこの活動に関わっております。



我々の主たる目的というのは、このトレイルを維持管理することによって、多くの方にトレイルを活用していただく、ということです。そして活用の結果、地域振興や山岳振興、観光振興につながれば、という考え方から活動しております。

これが先ほど紹介いたしました 28 団体の名前です。我々の活動の多くは、トレイルの維持管理活動で、「草刈り隊」と呼んでおります。この草刈り隊の基本的な活動方針として、「1 人 100m 草刈り運動」というのをやっております。これはどういうことかと言いますと、1 人の方が 1 年に 1 回山に入っていただく。鎌なり鋏なり鋸なり持って入ってもらい、100m の草を刈っていただく、という運動です。1 人 100m の草を刈っていただければ、3,000 人の市民の方がこの活動に参加することで、おのずから 300km 近いトレイルは、常に良い状態で維持管理できるのではなかろうか、という考えに基づいております。

これは 1 年に 1 回、35 会場ぐらいで実施しております、歩いてトレイルをきれいにしようという活動です。そのほか、トレイル体験会や、安全登山推進講座、トレイル説明会、交流会、いろいろな催しをしまして、我々の協力者を募るとともに、活動家を募るということを日々行っております。来年の春には、国際的なトレイルランニング・レースをやろうということで、今、着々と準備を進めております。

昨年の豪雨災害の実態について説明させていただきます。広島は花崗岩でできた、非常に雨

にもろい地域なんです。したがって、大体 400 mm ぐらいの雨が降ると、非常に崩れやすいという環境下にあります。50m 以上にわたって崩壊した斜面が 8,400 ヶ所、土石流の数が 7,600 ヶ所でした。これを聞いただけでも、想像できないぐらいの災害だったということが理解していただけたと思います。4 年前にも、同じく広島市の北地区で「広島土砂災害」というのがありましたが、今回は、スケールから言ったらそのときの 400 倍もの災害でした。

この災害が起きたのが、去年の 7 月 6 日です。では、我々は一体何をしたかと言いますと、本当はすぐにでも山に入ってどういう状況になっているか調査したい、ということだったんです。けれども、我々の活動テーマが「市民の、市民による、市民のためのトレイル」ということを目指しておりますので、まずは救済事業をしようということで、8 日後には「お手伝い隊」なるものを編成しまして、被災地域にシャベルなどを持って、土砂をかき分ける作業に日々費やしました。データの新しいものがなかったんですけれども、出勤回数として 11 回行きました。

3 市 2 町、26 団体プラス市民 221 人の人間が、この土砂災害の救助活動をしたということで、地元の方からはずいぶん「ありがたい」とお褒めの言葉をいただきまして、ますますトレイルを維持管理していこう、永続的なものにしていこう、という気持ちを強めたということでした。

その活動を 7 月と 8 月、2 ヶ月間行いました。9 月からは、いよいよ我々の本業であるトレイルの維持のために、実際にどういう状況になっているのか、ということで調査に入りました。ご覧のとおり、登山道は崩壊し、そのほか土砂崩れで全く通れない、竹林が倒れて整備しないといけない、という所が数えきれないぐらいあったわけです。そのような状況なので、当初の予定では半年はかかるだろうと計画していたんですけれども、多くの市民の方がこの活動に参加してくださいまして、なんと 12 月 1 日には、迂回路を含む全線が開通しました。

それ自体も驚くべきことだったんですけれども、そういう活動の中で、本来の我々の活動資金獲得の一端である、現在、私が身に着けている T シャツやキャップをご購入いただきたく、多くの市民の方に呼び掛けさせてもらいました。復旧のための活動資金づくりに、なんとかご協力をお願いしたいということで、広島湾岸トレイルを「一つの願い」と書いて、無理やり「一願道（ワンガン・トレイル）」と読ませていただいております。

おかげさまで多くの方々から人的にも資金的にもご協力をいただいた結果、わずか 3 ヶ月近くで全通したということなんです。後で説明させていただきますけれども、実は先ほど紹介いたしました国際的なトレラン・レースをやろうというトレランのグループが、このシステムをそっくりそのまま使いまして、全国のトレイルランナーやトレランのファンの方に、協力してください、支援してくださいと T シャツを作りまして、なんと二千数百人の方が、この活動に協力してくださいました。

ただし、その資金は、中国地区の岡山県、広島県、愛媛県、山口県など、いずれもトレラン・レース会場となっている行政に、県単位で全部寄付させてもらいました。実は、これを今日、皆さんにご提案したいと思います。東日本大震災しかり、広島の豪雨災害しかり、必ずやいつかどこかで大きな災害が起きると思うんですね。そういうときに、ロングトレイル協会として、

こういう形で全国の方々に支援・協力を求めるという方法はどうか、ということです。ぜひとも、こういう形をシステム化できれば、と思っております。

この形をもう一步進めて、メーカーとショップと市民とトレイルが一体となって一つのシステムをつくる、というのはいかがでしょう。昨今、いろいろな形で社会に情報が流れておりますけれども、一つの例として、広島山崎製パン工場において地元の産品を使って商品開発して、その売り上げの一部を森林環境整備事業に寄付するというシステムがあります。つまり、4者が一体となって社会貢献するという方式が、いろいろな形ででき上がっているようです。

我々も以前から、こういう形でやってはどうか、と考えておりました。こういう形で、一つの事業を、願いを一つにして社会貢献するスタイルをつくれば、民間でも誰の負担もなく、なにがしかの事業ができるのではなかろうか、と思います。先ほどお話しましたが、我々が湾岸トレイルブランドの商品を世に出したように、それをロングトレイル協会全体でやってみてはどうでしょうか。先ほどのように、災害が起きたときのことを考えると、そうすべきではなかろうか、と思っております。ぜひとも、これにご賛同、ご協力いただければと願っております。

なお、この件につきましては、メーカーやショップとの交渉方法、いろいろな形やシステムの内容について、いつでも丁寧に詳細を説明させていただきますので、ぜひともご協力をお願いいたします。

わずかな時間で話をさせていただきましたけれども、現状の広島湾岸トレイルは、市民が立ち上げ、市民が開発し、市民が運営する、「市民の、市民による、市民のためのトレイル」を目指しているということです。私からのご報告を終わらせていただきます。どうもありがとうございます。

トレイル報告③ ぐんま県境稜線トレイル

齊藤 義之（群馬県スポーツ振興課スポーツプロジェクト推進室長）

群馬県生活文化スポーツ部スポーツ振興課の齊藤と申します。こちらにありますとおり、ぐんま県境稜線トレイルは昨年の6月、皆さんの仲間入りをさせていただきました。誠に新参者でございますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

なお、このトレイル自体は、昨年8月11日に全線オープンいたしておりますが、今日は、このぐんま県境稜線トレイルがどんな所なのか、そういったことを知っていただきたいと思い、お時間を頂戴しました。よろしくお願いいたします。

今日の話の中身ですが、まずは、ぐんま県境稜線トレイルの取り組みの概要について、それから取り組みの体制について、また今後の取り組みについて、そして今後の課題についてお話ししたいと思います。実はPR映像があるんですが、ちょっと今回はお時間の関係もありますの



で、できれば私も話を早めに切り上げて、最後に映像のさわりの部分だけでもご紹介させていただきたい、と思っております。

初めに、ぐんま県境稜線トレイルとは何か、ということを説明させていただきます。このトレイルは、群馬県と新潟県、長野県の県境にあり、太平洋側と日本海側とに分かれる中央分水嶺に沿って開かれています。その稜線の雄大な山岳景観が楽しめますし、また、沿線には四方^{しまた}や草津、万座など、群馬県を代表する著名な温泉地があり、山旅の疲れを癒すこともできます。詳しくは、こちらのロングトレイル協会のホームページにも掲載させていただいておりますので、ご覧いただければ、と思います。

なお、このぐんま県境稜線トレイルは、実は全部整備したわけではなく、地図上の赤い線の区間はすでに登山道があったんですが、真ん中にある青い線の登山道がなかったため、東西が分断されておりました。この青線の区間は約 10km あるんですけど、その 10km について伐開工事を行いまして、全体をつなげることによって、稜線だけで約 100km あるロングトレイルが生まれたということです。それを、ぐんま県境稜線トレイルと命名させていただきました。

このトレイルがどのような所を通っているのかと言いますと、大体の俯瞰イメージをご覧くださいのですが、群馬県が手前にあります。そして、新潟県と長野県の県境に接しておりまして、ここが中央分水嶺です。

まずは、谷川岳の登山口として知られる土合から白毛門に登ります。ここから谷川岳に向かって始まるのが「馬蹄形縦走路」と言われている区間で、笠ヶ岳、朝日岳、清水峠、蓬峠、一ノ倉岳、そして谷川岳に至ります。そこから先は谷川連峰の主稜線の縦走路で、展望の開けた、気持ちの良い稜線が万太郎山、仙ノ倉山、平標山^{たいらっぴょう}と続き、三国街道の要衝、三国峠となります。

そして、ここから先は谷川連峰から離れ、稲包山を越える、三坂峠です。ここから先が、これまでつながっていなかったんですが、濃い笹ヤブを切り開いてつなげることができました。峠の先には上ノ倉山、忠次郎山、上ノ間山があり、やがて白砂山に到達します。この 10km 区間は、非常に体力のいる上級者コースです。

その先は堂岩山、地蔵山を越えて、いったん野反湖に下ります。この湖は、初夏になるとノゾリキスゲなど多くの高山植物が咲いて、非常にきれいな場所です。湖から三壁山に登り、さらに西に向かって進みますと、大高山、赤石山、そして鉢山と越えます。このあたりは湿地帯があったりして、北には志賀高原が広がります。

さらに横手山、渋峠から万座温泉を経て毛無峠に至り、破風岳、土鍋山、浦倉山とたどって日本百名山の四阿山^{あがまや}に立ちます。四阿山の山麓には、東には嬬恋村があり、西には菅平高原があったり、多くのリゾート地が並ぶ所で、非常に優れた、楽しいエリアだと思います。そして、的岩を経て最後の鳥居峠に下ればゴールです。大体 115km あります。

以上がルート概要ですが、このトレイルの自慢の一つとして、この 100km すべてが上信越高原国立公園のエリアに入っています。ご存じのとおり、上信越高原国立公園は自然環境が非常に素晴らしく、その景観の美しさに加えて、レクリエーション施設が充実していたり、ある

いはアウトドアのアクティビティがいろいろあったりと、レジャーのバラエティに富んでいるエリアです。こういった点も、我々の自信の背景になっているのではないかと考えております。

さて、はしょりながら話してきましたが、若干、行政的な話をさせていただきます。ぐんま県境稜線トレイルをどんなふうに進めているかと言いますと、行政の方はこれを見てもらうと分かるとおり、結構力の入っている特殊な組織構成でして、この図のような組織の中で動いているトレイルです。環境省の自然保護管事務所にも入っていただき、ご協力をいただいております。

次に、今後の主な取り組みについてお話します。先ほど、約 10km 伐開工事を行って、トレイルをつなげたというお話をしました。ところが、実はこの区間はなかなか 1 日で通過するわけにいかないで、間に避難小屋が必要だということになりました。そこで来年度、今年の夏ですが、ここには避難小屋を予定しております。ムジナ平という所です。

ですから、この青線の区間だけでも 8 時間かかりますので、今のところエスケープ・ルートもないし、避難小屋もないので、私どもとしましてはホームページや、今日、会場で配らせてもらっています「ぐんま県境稜線トレイルおすすめルートマップ」などで、注意喚起を行っているところです。

なお、ご紹介させていただきました「おすすめルートマップ」ですが、これの 2019 年版ということで、最新の情報を載せていきたいと思っています。昨年度の「おすすめルートマップ」は、4 万部作ったんですけども、エリア別に案内されているということで非常に人気がありまして、あっという間になくなってしまいました。全国から引き合いがあったものですから、新しいものを作ろうと思っています。

また、専用のホームページを作りたいと思っています。今まで群馬県のホームページを使っていたんですが、やはり、どうしてもビジュアル的に限界がありますし、また、SNS などと連携も取りにくいということもありますので、新しいホームページを今年の夏までには作りたいと思っています。そこには、タイムリーな見どころ情報や、周辺観光の情報なども載せたいと考えております。また、安全パトロールを実施しようと思っていますが、そういった危険箇所の情報とか、それに加えて、今、沿線ではどんな花が咲いているか、というような情報も載せたいと思います。そして、ホームページは、いろいろ応援していただいた皆さま方と一緒に作りたいと思っていますので、そういった方々の紹介などもさせていただきたい、と思っています。

今後の課題ということになりますが、まず一つには、先ほど申しましたとおり 100km もありますから、そこには初心者向けの区間もありますし、一方、上級者向けの区間もあります。そういった意味で、トレイルの安全対策もしっかりやっていきたいな、と考えております。避難小屋の設置ももちろんですし、全体を見渡す安全パトロールと情報提供、それから安全講習会なども実施したいと考えております。ぐんま県境稜線トレイルと名乗っておりますが、これは群馬県がしっかり対応させていただく、という意味で名乗っております。

ただ、ご覧のとおり、このトレイルのエリアは新潟県と長野県のエリアも入っていますので、皆さんと一緒に広域の連携をしていきたいと考えています。それから、官民一体となって協働していきたいと思っていますところでは。

最後になりますが、これから 5 分ぐらい PR 動画のご紹介をさせていただきます。11 分間のうち 5 分間ぐらいしか時間がないということですので、さわりの部分だけ、ご覧にいただきたいと思います。なお、この動画は YouTube で見られますが、実は、群馬県の広報課という所で出している YouTube の動画の中では人気 11 位です。もう少しで 10 位になれるので、皆さん、どうかクリックしてください。よろしくお願いいたします。ではお時間をいただきまして、PR 動画を見ていただきたいと思います。

【ナレーション】 天空を縫うように走る稜線。大自然の中に身を置く贅沢な時間。日常を忘れさせてくれる癒やしの場所。魅力あふれる 100km が、ここにあります。

ぐんま県境稜線トレイルは、群馬県と新潟県、長野県の県境 100km に連なる稜線です。みなかみ町土合から嬭恋村の鳥居峠を結ぶ山道で、途中には 2000m 前後の山々がそびえ、山の稜線の長さが国内最長となるロングトレイルです。

みなかみ町のルートは、日本百名山の谷川岳を含む谷川連峰が占め、多くのハイカーに愛されている稜線です。土合の登山口から標高差 1000m の急登、登り上がる白毛門への登山道。西の対面には、日本三大岩場と言われる主峰・谷川岳の岩壁が迫り、豪快な景色に圧倒されます。

初夏にはシャクナゲが登山道で迎えてくれます。笠ヶ岳から朝日岳へ。6 月、山頂付近では貴重な高山植物が咲き乱れます。エーデルワイスの仲間、ホソバヒナウスユキソウです。

新潟県との県境、険しい山の様相を見せる一ノ倉岳です。この地域は日本でも有数の豪雪地帯。雪の浸食により急峻な地形が形成されたのです。

谷川連峰の主峰・谷川岳にはオキの耳、トマの耳の 2 つのピークがあります。9 月下旬、ドウダンツツジやミネカエデが見事な紅葉で山肌を赤く染めます。谷川岳から西に進む稜線。起伏あるダイナミックなトレイルを楽しむことができます。

標高 2026m の仙ノ倉山。その山頂は谷川連峰の最高峰にふさわしい。〈以下、略〉

続きは YouTube の方でご覧いただけますでしょうか（笑）。以上でございます。そんなことで、ぐんま県境稜線トレイルも、皆さまのお仲間に入れていただきました。貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございました。

報告②「山の日とロングトレイル」

磯野 剛太（全国山の日協議会 理事長、日本山岳ガイド協会 理事長）

全国山の日協議会の磯野剛太と申します。

「山の日とロングトレイル」ということで話をするように、と伺っているんですが、これは今後、どのように進めたらいいかということ、今日お集まりの皆さまにも、一緒に考えていただきたいということで、お話をしようと思っております。



祝日の山の日は8月11日で、「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」ということで決まりました。では、その祝日を一つのシンボルにして、どう展開していくんだという課題がありまして、私ども、祝日を制定させていただいた後も、将来にわたってこの山の日をプロモーションしていく立場になりました。

山の日というのは、一見すると誤解されていまして、山を愛する登山者の人たちからすると、「登山の日」なのかな、というようなイメージを持たれております。実はそうではなくて、むしろ8月11日の祝日だけに限って申し上げると、夏休み中だけでも、家族皆で故郷の自然に触れて、故郷を味わおう、と。そして、そういう情景を阻害するようなものがあれば、それに対してどう対処していこうか、ということだとお考えいただければよろしいかと思います。

日本という国は、世界でもまれな美しい自然を持っております。皆さんご存じのように、緯度経度の幅が広く、大きな海流が2つ流れ込んでおります。そういう場所ですので、四季がしっかりとあるわけです。

そういう美しい自然の中にあって、皆さんが何をもって、それを自分のメリットとして感じていくかというのは、いろいろ考えられると思います。一方、そのような自然資源や惹き付ける魅力に反応して、最近では訪日外国人の人たちが、次々にいろいろな場所にやって来ているというのが現実ですね。

しかも日本の地形というのは、この写真は利尻島ですけれども、ご覧のように海と山が非常に近く、とても標高差があるわけですね。富士山もそうですけれども、世界で一番短い海岸線からの距離の中で、かなり標高差があります。したがって、川は急流が多く、渓谷も美しく、そして、水が豊かであるということになります。水が豊かであるということは、ひいては海が豊かになり、海産物も素晴らしいということになります。そういう意味で、日本には四季折々、このロングトレイルも含めて歩ける場所、あるいは楽しめる自然がたくさんあるわけです。

木もそうです。ご存じのように、照葉樹林という非常に共生化された樹林が、日本のあちこちにあるわけです。ブナ林が一つの典型ではありますが、日本では、あらゆる種類の木が、非常に美しい森林を形成しております。

水もそうですね。この写真は広島県の三段峡だったと思いますけれども、こういう水の情景も、

日本は大変素晴らしいものがあります。飲み物としても素晴らしく、今や秋田、新潟の漁港から、タンカーではるばる中国へ水が運ばれているという事実もあるぐらいです。

登山とロングトレイル、あるいは山とロングトレイルということで考えてみますと、今ほど、みちのく潮風トレイル、広島湾岸トレイル、それから、ぐんま県境稜線トレイルの皆さまのご紹介がありましたが、それぞれ特徴のある地形の中にトレイルが設けられているわけなんですけれども、「道」という意味ではどれも一緒ですね。

ところが、面白いことに日本では、雪のないシーズンは特にそうなんですけれども、歩く道の標高差がある高い山になりますと、登山の世界に見えてしまうんですね。ぐんま県境稜線トレイルもそうですけれども。でも、実は世界的に見ると、登山やクライミング、あるいはマウンテンアリングと言われるような世界というのは、まさにこの写真のような世界でして、道がない所を、自分たちの持てる技術や体力を使って登るという形です。これは一般的にアルピニズムと言っておりますけれども、これが世界的に見たスポーツ登山の姿であります。

ですから、現象としての登山というよりも、スポーツとしての登山、あるいは冒険としての登山の分野だ、ということなんです。したがって、日本ではこの文化も含めて、あらゆる意味ですべての無雪期の登山道というのが、実はロングトレイルなんだということを、もう一度、皆さまにはぜひ認識していただきたいと思っております。

ただ、残念ながら登山界の皆さんは意外とそういうことを思わないで、これは私たちの世界だ、登山の世界だと、かなり限定的に規定してしまっている節があります。残念ながら今の登山界というのは、一つは年齢が非常に高齢化しております、そういう意味で、昔取った杵柄きねづかの感覚、あるいは感性から抜け出せていない、ということが言えるのかもしれません。

それからもう一つ、都会の周辺を歩くウォーキングがありますが、ウォーキングの皆さんも、ある意味で非常に高齢化しております。日本ウォーキング協会の皆さんが、25万人から30万人ぐらいいらっしゃると思うんですが、その方たちも非常に年齢が高くなっております。

今や山と自然というのは、どなたでも自由に、いろいろな歩き方ができていいはずなんですけれども、一つ大きな問題があります。日本のロングトレイルというものが、縦断・横断的に位置付けられると思うんですけども、それに何を加味していくか、ということです。トレイルを歩くということは一つの動態ではあるんですけども、それにいろいろな歴史や文化、風土などを入れていく。もちろん、それに伴っていろいろな分野の産業というものが関連してくるわけです。

ひとつ皆さんでこれから考えていただきたいのは、そこには一種のフィロソフィー、哲学的なものがきっと必要になってくるだろう、ということです。何を目指して、どういうふうに展開していくのか。例えば、安全だけを図るということでしたら、一つの技術ですから、あるやり方をつくれればいいわけなんですけれども、それだけではなく、日本の中でこのロングトレイルを皆さんが利用する、あるいは歩くことによって、どんな幸福が得られるのだろうか、ということを皆さんで考えていっていただきたい、と思います。私ども全国山の日協議会も考えていきたいと思ひますし、いわゆる、その接着剤になるような、あるいはコーディネーターにな

れるような役割を、これから担っていきたいと思っております。

いろいろな問題が提起されると思います。特に今、地方創生という言葉がよく叫ばれておりますけれども、地域の活動に関わって、地域をどう活性化していくかというのが、本当は大事ななんだろうと思っております。実は、政府が補助金を出したり、あるいは中央官公庁の皆さんがいろいろ協力をしてくれたりということは、とても大切ではあるんですけれども、現状を維持し、将来に向かって管理していこうというときに、予算がなくなったので、それでおしまい、というケースが結構あります。

先ほどもご指摘やご意見がありましたけれども、そういう意味で、地域の中でそれを持続していくことが、とても大切だと思います。広島湾岸トレイルの運営資金をどう確保するかというお話も、もちろん大きな課題ですし、そのようにして地域に住む人たちから賛同者が増えていくということが大事だろう、と思っています。

私は日本山岳ガイド協会の方も関係しておりますが、日本各地で、特に北海道とか屋久島などで、結構ガイド組織をつくっている所がありまして、東京や大阪などという大都会から移り住んで、ガイドの仕事を始めている人たちがずいぶん増えております。ロングトレイルも同じで、そのロングトレイルが活性化することによって、地域に住む人たちが元気になったり、あるいはなにがしかの経済的なプラスがあったら、その意義は大きいと思います。そういう方向に向かって、皆さんもご一緒に対応していただきたい、というふうに思っております。

もちろん、災害や遭難の防止、その軽減対策、あるいは訪日外国人がどんどん増えているなかで、どういう対策をとっていくかなど、課題はいろいろあります。特に、外国人たちが来ることによって、皆さんが豊かにならなければいけないだろうと考えますが、その形や流れをどのようにつくっていくか、これも喫緊の課題であると思います。

一方、少子化問題もありますが、その少子化のなかで今、残念ながら子どもたちの自然体験学習というのは、そう増えておりません。長野県などで、中学・高校の学校登山を一生懸命プロモーションしておりますけれども、反応は鈍いようです。それには、やはり先生方の経験の少なさという問題もあるそうです。いずれにしても、自然の中で生き抜く力を養うために、どのように子どもたちを育成していくかということは、大変重要な課題になっていると思います。

そもそも、今年度は明治元年から150周年になるわけなんです、日本人は自然をよく知り、鋭敏な五感を具えた、歩く専門家だったはずですよ。そういうなかで、皆さんはこれからロングトレイルを通じて、「歩く」というごく当たり前で、基本的な行動を再認識していく活動を広めていってほしいと思います。ロングトレイルを地域の学校で利用したり、子どもたちを親が連れて歩いたり、あるいはおじいさん、おばあさんも一緒に歩いているという、そういう構図をぜひ描いていただければと思います。そして、海外から来る人たちを呼び込むだけでなく、トレイルのある地域の方たちも一緒にそこを歩いているというシーンが出現することを願っております。

全国山の日協議会では、この地域活性化と、たくましい子どもたちを育成することに特に重点を置いて、今後も活動を推進していく予定です。私どもの活動にご興味がある方は、ぜひコ

ンタクトを取っていただければ、と思っております。

私ども協議会が、山の日を通じて地域活性化とたくましい子どもたちの育成を目指していくためには、安全というバックボーンが必要です。この安全管理に関しては、日本ロングトレイル協会と全国山の日協議会がチームを組んで、推進していくつもりであります。

さらに、日本山岳ガイド協会のガイド教育を一層深化させ、安全管理のためのガイド育成に努める予定です。特に山岳分野のガイドだけでなく、自然ガイド、それからトレイルガイドの分野の国際組織とも、間もなく提携を結ぶ予定ですので、世界的なスタンダードを確立できるものと考えております。今後、多くの外国人を受け入れていくとき、外国のガイドも入ってきますので、お互いのスタンダードな資格が一致していることは、大切なことと考えます。

最後に一言。ロングトレイルを全国的に展開し、さらにまた、JAPAN TRAIL という壮大な計画もあると聞いております。それには非常に時間がかかるとは思いますが、じっくりじわじわと、長いスパンで考えて、次の世代に引き継いでいってほしいと思います。その点、皆さんぜひご協力をお願い申し上げます。また、全国山の日協議会や日本山岳ガイド協会に対して、何かございましたら、いつでもお声掛けいただきたいということを申し上げて、お話を終わらせていただこうと思います。どうもありがとうございました。

報告② 「安藤財団のロングトレイル振興への取り組みについて」

荒金 善一（安藤スポーツ・食文化振興財団 事務局次長）

安藤財団の荒金と申します。冒頭の安藤理事長の挨拶にありましたように、安藤財団では大きな柱となる4つの事業を展開しております、この2番目の自然体験活動の支援事業について、ご説明、ご報告させていただきたいと思います。

大きく3つの事業があります。「トム・ソーヤースクール企画コンテスト」の開催、それから、ここ安藤百福センターでの人材育成やアウトドア活動の啓蒙、そして、ここを拠点にしたロングトレイルの普及支援です。それと理事長が副会長をしております全国山の日協議会での安全対策事業の支援などを、安藤財団の自然体験活動事業として行っております。

封筒の中にチラシが入っていたと思うんですけど、今ちょうど「トム・ソーヤースクール企画コンテスト」の募集を始めたところです。2002年から始まりまして、もう18回目を迎えることになりました。詳細については、後ほどゆっくりご覧いただきたいと思います。2月1日から応募が始まっており、5月17日まで受け付けております。おおむね10名の小学校、中学校の子どもたちを含む自然体験活動の応募企画をお待ちしております。

自然体験活動の概念としては、アウトドア全般を対象としておりますので、特にカテゴリーは決めておりません。どしどしご応募いただきたいと思います。



コンテストの流れとしましては、まず応募を受け付けまして、6月中旬に50団体に絞ります。そこで活動資金の一部となります10万円を贈呈させていただきます。そして、10月末までの期間の中で活動してもらい、その後、活動報告書を頂戴して審査の上、12月中旬に優秀団体を決定します。次に、翌年1月の最終土曜日に、優秀団体の表彰をするという流れで毎年行っております。

学校部門と一般部門がありまして、学校部門の最優秀は文部科学大臣賞で、副賞100万円とチキンラーメン1年分です。一般部門の安藤百福賞も同様です。優秀賞が50万円で、そのほか特別賞として推奨モデル、トム・ソーヤー奨励賞、努力賞などを贈呈しております。

これまでの17年間で、応募件数が約3,000団体ありました。その応募活動人数が63万人で、大変多くの子どもたちが頑張って活動してくれました。そのうち、先ほど申しました50団体に当たる部分の支援団体が770団体、約24万人が財団の支援の中で活動してきました。

前年度は216件の応募が寄せられ、子どもたち7万2000人の活動がありました。6月の半ばに50団体を選んで10万円の支援をいたしまして、この1月26日の表彰式では、13団体の表彰を行いました。

活動内容の特徴としては、冒険的要素が非常に強い活動もありますし、自分たちの周りの自然や郷土を見直そうという活動も多く見られました。

今年の講演会のゲストは、サッカーの元日本代表監督の岡田武史さんでしたが、サッカーだけでなく自然体験活動にも非常に造詣の深い方で、あっという間に時間が経ったという印象でした。サッカーJ2のFC今治を運営している会社が、「しまなみ自然学校」という自然学校も経営されていて、子どもたちを指導されているということでした。

これが表彰団体の集合写真です。13の表彰団体の中から、特に2つだけピックアップしてみたいんですけど、1つは一般団体の最優秀賞です。これは東京都の北区にある星美ホームという児童養護施設の子どもたちが、過去13年間、毎年、日本百名山に登ろうということで企画してきたものです。日本海からスタートして、全行程徒歩で3つの百名山に登るということで、去年は白馬岳と五竜岳、鹿島槍ヶ岳に登っています。子どもたちにとっては、非常にハードな山行だったと思いますし、指導者の先生方も大変なご苦労だったと思います。一部、脱落者も出たそうですけど、非常に有意義な活動だと思います。

次は、新潟県の燕三条青年会議所OBらが企画しているイベントで、これも恒例になっているようですけれど、子どもたちが100kmを4泊5日かけて郷土を歩くという大規模な企画です。8月上旬の炎天下だったんですけど、誰一人脱落者がいなくて、小学生73名が完歩されたということです。こちらは優秀賞、50万円を贈呈しました。

以上がトム・ソーヤー企画コンテストでした。2つ目は、ここ安藤百福センターをベースとして、アウトドアの啓蒙活動をしております。このセンターは2010年の5月にできまして、もう間もなく丸9年になります。

こちらのカンファレンスルームにおける、野外体験活動全般の指導者養成のための講座や学習会がメインですが、それ以外に、こちらの敷地は5万m²ほどあるんですけど、ツリーハ

ウスが7つ点在しております。一般的なツリーハウスではなくて、デザイナーや建築家を作った、一風変わった形のツリーハウスです。こちらで去年は春と秋の2回、一般市民の方にご案内してイベントを催したんですけれど、首都圏から来られた方も大勢いました。ツリーハウスに登ってみたり、飲食ブースで食べたり、ワークショップで体験したり、半日ぐらい自由に楽しんでもらおうという企画をしています。

こちらのように、実際にツリーハウスに登ることもできます。こちらの写真は去年の秋、敷地内に移設したのですが、クライミングウォールですね。敷地の東側にあるんですけれど、子どもたちは、非常に楽しそうに1日を過ごしてくれました。

次に、財団の活動の中におけるロングトレイルへの取り組みです。「保育」ならぬ「歩育」が大切だということで、ロングトレイルの支援をしているという経緯があります。

まず、2010年5月、このセンターができてすぐに、研修の一環ということで、周辺にトレイルを策定しました。今では5コース、延べ40kmになっています。整備中のものを含めたら、もう140kmぐらいになっているのでしょうか。ご存じのように、それらを「浅間・八ヶ岳パノラマトレイル」と命名しました。名前のとおり非常に展望の良いコースでして、沿線には歴史的な見所や文化財も多く、御牧ヶ原という非常に牧歌的な、北海道のような風景の所もあります。

トレイルを策定するようになって、もちろん整備もしましたし、地図も作成しました。この写真が、一番標高の高い所から見た八ヶ岳です。この概念図は当初、安藤理事長から「ロングトレイルとはなんぞや」という質問がありましたので、簡単に理解していただけるようにと作ったものです。

支援の経緯ですけれど、スマホのウェブサイトを作ったのが2014年でして、特に青印のトレイルに対してすでに支援しております。封筒の中に名刺大のカードが入っていたと思うんですけれど、こちらは去年の12月に運用を開始しました、スマホアプリ「トレイル巡り」のカードです。全国9つのトレイルが見られるようになっています。トレイルコースの閲覧や、トレイル計画の作成・提出ができ、歩いたルートの記録などの機能を備えております。アプリとウェブサイトの違いというのはご存じだと思うんですけれど、アプリの方は通信環境に関係なくて、非常に優位なところが多いのが利点です。遭難することはありませんし、平坦な道を歩く場合でも有効なアプリじゃないかな、と思います。去年の12月から運用を開始していますので、AndroidもiPhoneもどちらでもご利用できますから、ぜひともダウンロードしていただきたいと思います。

次に赤字で書いてありますが、話題になっております「JAPAN TRAIL」です。こちらの地図を作るというのは非常に時間がかかることですし、莫大な費用もかかりますので、このアプリを使って、うまく応用していきたいと考えております。ご期待いただきたいと思います。私からは以上でございます。どうもありがとうございました。

昆虫が生息しやすい環境を整備
～みんなで作ろう！昆虫 100 種大図鑑～

小諸絶滅危惧種ビオトープ プロジェクト

概要

自然豊かな長野県小諸市には、多種多様な動植物が生息・生育しており、なかには絶滅危惧種などの希少な種もいる。

そこで日清食品グループは、CSR 活動「^{ひやくふくし}百福士プロジェクト」の第 19 弾として、安藤百福センターの敷地内にビオトープ*1 を造成することで、昆虫が住みやすい環境を整える活動を 2017 年 11 月に開始した。2019 年 3 月には、このビオトープを訪れた昆虫全 100 種の写真を集めたデジタル昆虫図鑑を制作し、プロジェクトを完了した。



長野県内の生物多様性の現状

生物多様性とは、生物同士のつながりのこと。すべての生物は直接的・間接的に支え合って生きている。食料や水、気候の安定をはじめ、私たちの暮らしは生物多様性の恩恵によって成り立っているのだ。

長野県には、県内とその周辺地域にのみ生息・生育している固有種が数多く存在し、種や生態系レベルで高い多様性が見られる一方、「長野県版レッドリスト(動物編) 2015 年」(絶滅のおそれのある野生生物のリスト) では、絶滅危惧種 614 種を含む計 774 種のうち、昆虫類が 586 種を占め、多くの昆虫たちの生息が脅かされている。

活動内容

このような背景から、生態系の保全・生物多様性の向上を目的に、昆虫写真家で日本昆虫協会理事の海野和男氏監修の下、日清食品グループは、安藤百福センターの敷地内にビオトープを造り、小諸市に生息する絶滅危惧種をはじめとする、昆虫が住みやすい環境づくりを行った。

(1) 造成作業

2017 年 11 月 10 日～12 日の 3 日間、日清食品グループ社員有志 23 名と地元のボランティア 6 名の合計 29 名で、ビオトープ造成場所の草刈りや土地の整備を行った。朽ちた丸太と落ち葉でカブトムシの産卵場所づくり、木の枝でカミキリムシの住処づくり、池の土掘りなども

行う。また、海野氏による小諸市の自然環境と絶滅の懸念があるチョウに関する講義や、ビオトープの設計を手掛けた造園家で、登録ランドスケープ・アーキテクトの河合嗣生氏による、安藤百福センターのフィールド観察およびワークショップも実施した。



(2) 小諸ツリーハウスプロジェクト「森の生きものがたり」

2018年5月11日には、日清食品グループ社員有志15名でビオトープの草刈りを行った。翌12日には、小諸ツリーハウスプロジェクトの春のイベント「森の生きものがたり」で、日清食品グループ社員と一般参加者で、ビオトープにチョウの食草や蜜源植物（ミツバチが蜂蜜を作るために、花から蜜を集める植物）となる草花を植栽した。また、これ以外にも一般参加者向けのワークショップとして、海野氏による「昆虫撮影会」や、昆虫の住処となる「昆虫ハウス」づくり、ビオトープに立てる看板づくりを行った。これらの植栽やワークショップには、一般参加者計339名が参加した。

また同日、小諸市内に生息するチョウなどの昆虫をはじめとした絶滅危惧種の保護対策を一層推進するため、日清食品ホールディングス株式会社、長野県、長野県小諸市、安藤百福センターの4者は、「生物多様性保全パートナーシップ協定」*2を締結した。この協定により、生物多様性の保全をはじめ、地域社会への貢献、持続可能な社会の実現へ向けた体制構築に、4者が連携して取り組んでいくこととなった。



(3) 小諸ツリーハウスプロジェクト「いきものに感謝祭」

2018年11月3日には、日清食品グループ社員有志14名で、ビオトープの草刈り、落ち葉掻き、花の植え、シイタケの柵木でクワガタの産卵場所づくりを行った。翌4日には、小諸ツリーハウスプロジェクトの秋のイベント「いきものに感謝祭」で、「シイタケ菌打ち」と

「旬の味覚を味わおう！」と題したワークショップを実施した。菌打ちをしたシイタケの柵木は、シイタケの栽培が終わった後、クワガタの産卵場所としてビオトープで活用する予定だ。「旬の味覚を味わおう！」では、ビオトープ整備で集めた落ち葉を活用して、長野県の旬の味覚である白土馬鈴薯のホイル焼き、シイタケピザ、シナノゴールドを使った焼きリンゴを作った。これらのワークショップには、一般参加者約 100 名が参加した。



(4) 昆虫 100 種大図鑑

ビオトープを訪れた昆虫を把握・記録するため、2018 年 5 月より安藤百福センターのウェブサイト内に「小諸絶滅危惧種ビオトーププロジェクト」の特設サイトを設置し、一般の方からの写真投稿を受け付けた。2018 年 11 月までに投稿数 278 枚、絶滅危惧種 4 種を含む計 151 種類の写真が集まった。

2019 年 3 月には、投稿いただいた写真の中から種類の異なる昆虫写真 100 枚を集め、「昆虫 100 種大図鑑」を完成させ、安藤百福センターのウェブサイトに掲載した。

(<http://www.momofukucenter.jp/biotope/dpb.html>)

また、2018 年 11 月 4 日の小諸ツリーハウスプロジェクト「いきものに感謝祭」では、投稿いただいた写真の中から優秀作品を昆虫写真家の海野氏に選んでいただき、「百福士昆虫博士」として表彰式を実施した。



今後

安藤百福センターのビオトープは、今後も定期的に整備・メンテナンスをして継続していく。皆さんのお越しを期待したい。



- *1 ドイツ語の「BIO」（生きもの）と「TOP」（場所）から成る合成語で、その中で地域の野生の生きものが生息、生育する空間。
- *2 長野県内の自然環境や生物多様性の保全活動に、市民団体と企業・学校などが協働して取り組むことを約束したもの。

■関連情報

□ウェブサイト

- ・ ~みんなで作ろう！昆虫 100 種大図鑑~ 小諸絶滅危惧種ビオトープ プロジェクト
https://www.nissin.com/jp/about/csr/hyakufukushi/019_biotope/
- ・ 日清食品ホールディングス、長野県、長野県小諸市、安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター間による「生物多様性保全パートナーシップ協定」
<https://www.nissin.com/jp/news/6955>
- ・ 小諸ツリーハウスプロジェクト「森の生きものがたり」
<http://www.momofukucenter.jp/treehouse/list/530.html>
- ・ 小諸ツリーハウスプロジェクト「いきものに感謝祭」
<http://www.momofukucenter.jp/treehouse/list/632.html>
- ・ 昆虫 100 種大図鑑
<http://www.momofukucenter.jp/biotope/dpb.html>

□^{ひやくふくし}百福士プロジェクト

日清食品グループは、社会貢献活動に情熱を注いだ創業者・安藤百福^{ももふく}の志を継ぎ、50 年間に 100 の社会貢献を行う「百福士プロジェクト」を 2008 年から実施している。江戸時代、外交使節団の代表を「正使」といい、正使の下で働く人を「副使」と呼んだ故事にならい、安藤百福の志を継ぐ社員を「百福士^{ひやくふくし}」と名付けた。「百福士プロジェクト」は、「創造」「食」「地球」「健康」「子どもたち」の 5 つを活動テーマに掲げている。

（文責）日清食品ホールディングス株式会社 広報部 CSR 推進室

事業報告

2018 年度 ロングトレイルのつくり方講座

ロングトレイルを構想段階から運用まで体系的に考察し、整備に携わる人材の育成を行う講座を開催した。特に今年度は、トレイルをいかに運営していくかという視点で学んだ。

■各回共通

対 象：ロングトレイルを整備・制作したい自治体や団体、観光協会など

定 員：20 名

参加費：各 7,500 円（2 日間の講習代、宿泊代、食事代込）

※第 3 回は 1,000 円（講習代のみ）

主 催：安藤百福センター

共 催：NPO 法人日本ロングトレイル協会

第 1 回「ロングトレイルのマーケティング」

日 程：2018 年 9 月 29 日（土）13 時 30 分～30 日（日）12 時 30 分

参加者：20 名

講 師：木村 宏（北海道大学 特任教授／日本ロングトレイル協会 常務理事）

村田 浩道（高島トレイルクラブ 理事／日本ロングトレイル協会 事務局長）

小金澤 喜代治（信州・長和町観光協会 トレイル運営部会）



第 1 回は、ロングトレイルのマーケティングを学ぶ。はじめに、高島トレイルの村田浩道氏より、顧客を惹き付けるガイディングについて話が合った。トレイルの魅力を伝えてリピーターを生むには、ガイドが重要であることがひしひしと伝わる内容であった。



続いて、北海道大学特任教授の木村宏氏より、トレイルの誘客方法について、マーケティングの手法を交えながら、トレイルの魅力を発信し、顧客満足（CS）を高めるにはどうしたらよいか、レクチャーを受けた。



2日目は、信越トレイルと霧ヶ峰・美ヶ原中央分水嶺トレイルをケース・スタディとして、ロングトレイルにいかに関客するか、また、顧客満足度を高めるにはどうすればよいかを検討した。トレイルを永続的に運営していく上でのヒントを探るべく、活発な意見交換が繰り広げられた。

第2回「ロングトレイルのエンゲージメント」 2018年11月17日～18日⇒都合により中止

第3回「ロングトレイルのマネジメント」

日 程：2019年2月24日（日）9時30分～12時30分

参加者：26名

講 師：大西 宏志（信越トレイルクラブ 事務局長）

村田 浩道（高島トレイルクラブ 理事／日本ロングトレイル協会 事務局長）



第3回は、ロングトレイルのマネジメントを学ぶ。はじめに信越トレイルの大西宏志氏より、トレイルの組織体制づくりについて話があった。信越トレイルを事例に、具体的で分かりやすい説明は多くの示唆があった。



続いて、高島トレイルの村田浩道氏より、トレイルのリスクマネジメントについてレクチャーを受けた。高島トレイルで実際にあったヒヤリハット事例も紹介され、速やかで誠実な対応がいかに重要か、考えさせられる内容であった。

その後、時間ギリギリまで質疑応答を行い、2018年度の講座は終了した。本講座は国内初の試みだったが、この2年間でトレイルの整備・運用に関わる人材を多く輩出し、ロングトレイルの裾野を広げるのに大いに役立ったと言える。

2018年度ロングトレイルハイカー入門講座

主催：NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構

共催：安藤百福センター

第1回 事前準備と歩き方を知ろう

日程：2018年 6月9日（土）～10日（日）

内容：1日目（机上）：ロングトレイルとは何か、計画の立て方、装備の基本、
歩き方（ストック実習含む）

2日目（実習）：浅間・八ヶ岳パノラマトレイル「軽井沢コース（約13km）」

参加人数：参加人数：20名（申込者24名）



昨年度に引き続き、ロングトレイルを歩きたいと考えている人のための初心者向け講座を開講した。

まずロングトレイルとは何かに始まり、日本や世界のロングトレイルを紹介。



続いて「ロングトレイルの歩き方」を解説。準備編では、どんな情報が必要でどう集めるのかや、持ち物の選び方などを教わった。実物を見ながらの講義に、参加者は熱心に耳を傾けていた。



後半の実践編では、ストックを使った歩き方の実習を行った。敷地内の散策路を歩きながら、段差のある場所での使い方、斜面での使い方などを学ぶ。初めて使うという人も効果を感じることができたようだ。



夜は夕食を兼ねた懇親会。杉板を使って焼き上げた豚肉で乾杯！すでに多くの山を登ってきたという経験者も、今年装備を買ったばかりという初心者も歓談に耽った。



2 日目は実習。浅間・八ヶ岳パノラマトレイルの軽井沢コース（約 13 キロ）を歩く。晴れていれば遠くに浅間山を望めるが、あいにくの小雨模様。しかし、別荘地内は新緑が雨に濡れ、一層鮮やかであった。



離山頂上にて。結局天気は回復しなかったが、雨の中を歩くという、普段あまりできない経験ができた。また、この行程を通して、レインウェアの大切さや、自分の装備の劣化に気付いた参加者もあり、実りある実習となった。

第 2 回「天気と地図の読み方を学ぼう」

日程：2018 年 7 月 28 日（土）～29 日（日）

内容：1 日目（机上）：読図、コンパスワーク、気象

2 日目（実習）：車坂峠～高峰山～水ノ塔山～籠ノ登山～池の平（約 9km）

参加人数：参加人数：13 名（申込者 28 名）



第2回のテーマは「天気と地図」。地図の種類や読み方、プレートコンパスの使用法を学ぶ。地図上の細かい情報を読み取れるようになるまでは時間がかかりそうだが、講座を終えるころには、「見方が変わった！」と、嬉しそうな参加者も。



後半は山岳気象について。天気図や雲の種類、注意したい天気図などを教わった。変わりやすい山の天気を把握しておくことも、ハイカーにとって大切な要素の一つだ。



懇親会は、炭火で焼いた差し入れのトウモロコシやトルネード・ソーセージ、スパムの燻製、メインには地元産の朝鮮ニンジンを使ったサムゲタンなどを囲んで歓談。デザートの花ラゼリーには大歓声が上がる。よく食べよく飲みよく語り、英気を養い翌日に備えた。



2日目は車坂峠から水ノ塔山、箆ノ登山、池の平までの縦走に挑戦。天気が心配だったものの、途中からは青空が広がった。これは眺めが良さそうだと期待が高まる。



水ノ塔山の山頂で昼食を取ったのち、コンパスを使って実習を行う。「あっ、見えた!」。参加者同士で教え合い、全員目標物を見付けることができた。



籠ノ登山にて、これまで歩いてきた道を振り返る。「きつかったが自信になった」という声もあり、下山後は全員で完歩の喜びを分かち合った。

第3回「トラブル対処法を身に付けよう」

日程：2018年 9月8日（土）～9日（日）

内容：1日目（机上）：救急法、セルフレスキュー、（実習）：テーピング

2日目（実習）：浅間・八ヶ岳パノラマトレイル「千曲川コース（約15km）」

参加人数：参加人数：16名（申込者23名）



第3回のテーマは「トラブル対処とファーストエイド」。急なトラブルの原因や対処法について学んでいく。トラブルは起きないのが一番だが、起こってしまったときに冷静に対処できるよう学んでおくのも大切だ。



後半は実習だ。今回はキネシオ・テーピング協会より加藤幸光講師をお招きし、テーピング講座を開講した。こむら返りや捻挫の予防、膝が痛むときのテーピングなどを実際に体験。「全然違う！」とすぐに効果を実感することができた。



懇親会は屋外バーベキュー。年齢も性別もバラバラの参加者たちだが、「お肉焼けましたよ」という一言をきっかけに会話が広がっていく。肉もビールも会話もぐんぐん進む。楽しいひとときはあっという間に過ぎていく。



2日目は、浅間・八ヶ岳パノラマトレイルの千曲川コースを歩く。千曲川流域を中心とした約15kmの、多様な里山の自然と歴史が楽しめるコースだ。

アップダウンの多いコースだが、まだ青々とした木々と色付き始めた稲穂がちょうど季節の変わり目を感じさせる。



そびえ立つ岩根の断崖や古い吊り橋の架かった千曲川の流れ、かつて養蚕が盛んだった集落など、所々ガイドによる説明が参加者の興味を引く。



コースの終わりには氷集落の風穴を見学。風穴保存会の方からお話を聞き、その涼しさを体感させてもらう。9月でも風穴内部は2〜3℃しかない。風穴で冷やしておいたジュースはキンキンに冷え、参加者の疲れた体と喉を潤した。

第4回「ロングトレイルを縦走しよう」

日程：2018年 10月20日（土）～21日（日）

内容：1日目（実習）：センター～糠地～みはらし交流館（約7km・テント泊）

2日目（実習）：みはらし交流館～深沢溪谷～高峰温泉（約10km）

参加人数：参加人数：11名（申込者21名）



第4回のテーマは「ロングトレイルの縦走」。初日は縦走体験で、テントや寝袋などを担いで歩く。あいにくの小雨模様で景色は楽しめないが、体力の消耗は抑えることができる。



千曲川からじわじわと登り、本日のゴールが見えてきたところで馬に遭遇。去年はなかったので、今年新しくできたもののようだ。疲れを感じ始めていた人にとっては、思いがけない癒しとなった。



テント場に到着したら、講師によるテントのレクチャーがあり、それを踏まえて各自でテントを張る。初めてのテント泊という人も多く、戸惑いながらも無事やり遂げることができた。



夕食は、ピザ釜で焼く手作りピザがメイン。地元で採れた食材をトッピングして乾杯した。バーナーで炙ったもつ鍋や、参加者から本格スパイスカレーの差し入れもあり、多国籍料理を楽しむ懇親会となった。



2日目は好天に恵まれ、足取りも軽く溪谷を遡っていく。途中からは紅葉が始まり、やがて頭上にねんぼう岩が現れた。かつて三方ヶ峰が噴火した際に出現した（その時の噴火口が後に池の平湿原になった）と言われるが、想像以上の大きさに度肝を抜かれる。



昼食を済ませたら、クマザサ（熊が食べるからではなく、葉に限取りがあるのが由来）の繁る道をじりじりと上がっていく。紅葉がピークを迎えており、その美しさを愛でながらの山行となった。



橋を渡り、旧高峰温泉跡地を過ぎると、いよいよつづら折りの坂道が始まる。温泉に入りここに上り下りしていた先人の苦労を思いながら、残り 1km を登り切り、無事完歩となった。

第5回「雪のトレイルを歩こう」

日程：2019年 2月2日（土）～3日（日）

内容：1日目（実習）：アサマ 2000 ～水ノ塔山～高峰温泉～アサマ 2000（約 4km）

2日目（実習）：車坂峠～高峰山～車坂峠～車坂山～アサマ 2000（約 4.5km）

参加人数：参加人数：14名（申込者 24名）



1年間の締めくくりは「雪のトレイルを歩こう」をテーマにスノーシュー・ハイキング。1日目は水ノ塔山を目指す。

慣れないうちは自分のスノーシューを踏んづけて転んでしまうが、転んでもふかふかの雪が受け止めてくれるので痛くはない。



2時間ほどで山頂に到着。頂上からはかすかに富士山も見え、展望を堪能した。

まっさらな新雪に足跡をつける喜びを噛みしめながら下山。これこそスノーシューの醍醐味だろう。



ミニレクチャー「雪の山を歩く」では、雪山を歩くために必要な装備や注意点などを、実際の道具に触れながら学ぶ。今回は出番のない、スノーシュー以外の道具も登場し、参加者の興味を誘った。



夜は信州味噌のちゃんこ鍋と野沢菜鍋でエネルギーを補給。この講座も5回目、すっかり顔見知りの参加者たちは、地元の食材を使ったメニューに舌鼓を打ちながら親交を深めた。



2日目は車坂峠から高峰山に向けて出発。雲一つない青空へ向かって、ぐいぐいと登っていく参加者たち。スノーシューにもすっかり慣れ、さくさくと小気味良い音が上がる。昨日のミニレクチャーで習ったように、レイヤリングを調整すれば快適さは段違い。足取りも軽くなる。



スタートから1時間半ほどで山頂に到着し、高峰神社に参拝。山頂から少し下った所で昼食を取ると、高峰山を一気に下り、今度は反対側の車坂山を目指す。



車坂山の下りは滑り台！ ふかふかの雪で思うようには滑らなかったが、雪を払い落とす参加者たちの顔はニコニコ。来た道を引き返し、スノーシュー・トレッキングは無事に終了となった。

これにて 2018 年度、5 回にわたって開催したトレイル講座はすべて終了した。好評のため、引き続き次年度も開催する。

トレイルを活用した実証実験事業

大人のトレイル歩き旅講座

■趣旨：ロングトレイルを活用したモデル事業の一環として行い、成果やノウハウ等の情報を発信し、歩く機会の創出に寄与することを目的とする。ロングトレイルと様々な専門テーマを組み合わせたモデル事業が普及することで、各地でトレイルを活用した新たな取り組みにつながる事が期待できる。

■広報

- ・安藤百福センターHP など Web 媒体を活用
- ・首都圏および長野県内のアウトドア用品店（約 70 店舗）にチラシ発送
- ・長野県内のマスコミにプレスリリース
- ・トレイル関係団体および地元観光業者からの発信

→日本ロングトレイル協会、ヤマケイオンライン等、アウトドア・観光関係の Web に掲載（当日の取材はなし）

第 1 回「歩いて巡るローカルフードの楽しみ方」

日時：2018 年 10 月 6 日（土・晴れ）、7 日（日・晴れ）

コーディネーター：和久井 道夫（森の庭師）

造園家・故小形研三の下で庭造りの基礎を学ぶ。渡米し、オレゴン州ポートランド日本庭園協会のヘッドガーデナーとして庭園造りに携わる。帰国後は、和洋にこだわらず、住む人のライフスタイルに即した居心地の良い空間創りを提案しながら、各地で数多くの庭を手掛けるほか、玉崎弘志氏（国際バラとガーデニングショウ）、白井温紀氏（洗濯物が似合う庭）などの代表作を施工する。現在は小諸の丘の上で、ホームグラウンドとしての実験的な庭造りを継続中。



参加費：5,000 円 宿泊・食事代：3,000 円 募集：20 名（参加者 13 名、申込者 15 名）

■参加者属性

男女比 1：1（男性 7 名 女性 6 名）

平均年齢 50 歳

年代層 20×2 名、30×1 名、40×2 名、50×4 名、60×4 名

出身 長野×4、東京×6、埼玉×3

■スケジュールおよび活動レポート 1日目

11:00 小諸駅集合



初のローカルフード講座。ちょうど街中でも「ふーどまつり」が開催されており、地域の食を楽しもうという雰囲気の中スタート。

12:00 弁天の清水



小諸発祥の地、諸集落にある湧き水。10月にしては暑い日だったので、冷水で喉を潤す。

12:30 マンズワイン



数々の受賞歴がある工場の見学。スタッフお勧めのワインも試飲した。

14:45 和久井ガーデン



コーディネーターの和久井さんと合流。普段は非公開のガーデンも見せてもらった。

15:30 テール・ド・シエル



テール・ド・シエル（天空の大地）という名前のとおり、抜群の景色が広がる。地元のリングを使用したシードルで乾杯する。

16:30 テント設営（みはらし交流館）



暗くなる前に設営を完了させる。この日は夕焼けが美しく、山々が赤く染まっていく様子も楽しめた。

17:00 そば打ち体験



そば打ち名人に指導していただく。
そば粉も採れたて地元産のものを使用し
ており、風味が素晴らしかった。
トロトロのそば湯が最高の贅沢らしい。

18:00 地元の方々と交流



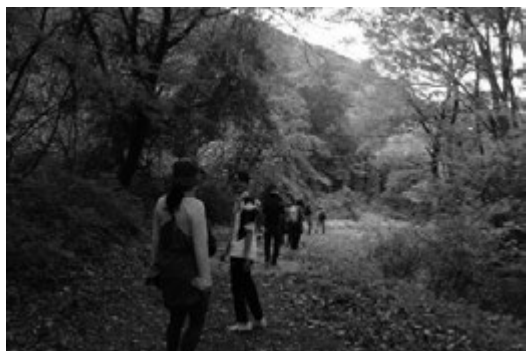
キノコ採りの達人や、リンゴ園のオーナーたち
も駆けつけ、次々と出てくるローカルフードを
会話とともに楽しんだ。

懇親会メニュー：

手打ちそば、天然キノコ鍋、ナス煎餅、七代会村のおやき、BBQチキン（和風サルサヴェ
ルデソース味）、柿の生ハム巻き、手作り漬物、ほか差し入れなど

2日目

6:00 キノコ採り（希望者のみ）



キノコ採りの達人について山の中へ。素人が
まず手を出せない、貴重な体験ができた。

8:30 朝食（かまど炊きごはんなど）



朝食も地元産のタマゴや漬物、味噌を
使ったものが中心となった。かまど炊き
ご飯は、火加減に苦戦したがなんとか成功。

9:30 みはらし交流館出発



様々な設備が揃ったキャンプも楽しめる体験施設だった。ピザ窯もあったので、別の機会に挑戦したい。

10:00 菅沼果樹園



70年の歴史がある果樹園で、オーナーから説明を受ける。この時期はシナノスイートと秋映が採れ、どちらも甘みが詰まっていた。

10:45 終了（タクシーにて小諸駅まで移動、解散）

■主な参加者評価（アンケートより）

- ・地元の郷土料理やキノコ鍋が食べられたのが良かった
- ・そば打ちや体験型の食事会が良かった
- ・キノコがあまり採れなかったのが残念

■総合評価

ローカルフードと生産者を訪ねる旅として初めて開催した。地元の人と自然と食べ物をたっぷり楽しむという点では成功だったかもしれないが、アクティビティを詰め込み過ぎて、やや忙しくなってしまったのが大きな反省。また、歩いたコースのガイド情報も少なかったので、今後こまめに収集する必要がある。ハイカーとの交流が良かったのか、協力してくれた地元の方からの評価は高く、次回開催を望む声もあった。

■備考

参加者持ち物

- ・テント、シュラフ ・運動靴またはトレッキング・シューズ
- ・動きやすい服装、防寒着（手袋やニット帽など含む）・レインウェア
- ・ザック（ザックカバーも） ・1日目昼食 ・水筒 ・ヘッドライトまたは懐中電灯
- ・着替え、タオル、洗面用具など、1泊2日の生活に必要なもの

主催者準備物

- ・トレイルマップ ・BBQ グリル、炭など

第2回「実践！相手に伝わる風景撮影術」

日時：2018年10月27日（土・晴れ）、28日（日・晴れ）

講師：山本 啓一（一般社団法人日本写真講師協会認定講師、
公益社団法人日本写真協会会員、フォトマスター検定エキスパート）

撮影ジャンルは風景全般。森の中を歩きながら撮影することが好きで、八ヶ岳に移住。自然の中で何か面白いもの、楽しいものはないかと探している。「分かりやすく、楽しく」をモットーに、上級者を目指す方から初心者の第一歩にも対応。



参加費：5,000円 ※宿泊・食事代は希望者のみ別途

募集：20名（参加者10名、申込者14名）

■参加者属性

男女比 2：3（男性4名 女性6名）

平均年齢 56歳

年代層 30×1名、40×1名、50×5名、60×2名、70×1名

出身 長野×4、東京×3、埼玉×1、群馬×2

■スケジュールおよび活動レポート 1日目

13:00 レクチャー「撮影の基礎」

14:30 実践



室内での基礎講習からスタート。講師が撮影した写真を基に、絞りや露出などのポイントを説明。



野外での撮影実習。まずはセンター敷地内の森の中で試し撮り。

15:00 実践



風穴、氷集落、千曲川を過ぎて、布引観音へ。朱色の観音堂と、背後にある浅間山を同時に写すのに苦戦していた..

16:30 レクチャー「星空撮影法」



秋の夜長を楽しむために、星空の撮影技術を学ぶ。この日は快晴だったので、夜も期待できそうだ。

19:00 懇親会



主に地元の食材を使ったおでんと、各テーブルごとにお好み焼きを作り、乾杯した。

21:00 実践



星空撮影の実習。雲一つない空に、無数の星々を眺めることができた。ただ、見るのと撮るのでは大違いで、試行錯誤しながら練習は続く。

懇親会メニュー：ローカルおでん、お好み焼きビュッフェ、おつまみ3種類、ほか差し入れ

2日目

9:00 レクチャー「ボカシ」



前ボケの取り方を学ぶ。花をボカしながら、背景にピントを合わせる練習。

10:00 実践



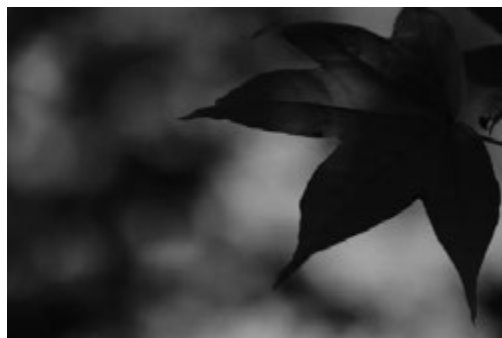
続けて野外で実践練習。黄葉が進む森の中で思い思いの自然を撮る。

12:00 フォトコンテスト

最優秀賞



お気に入りの1枚を印刷し、全員参加のコンテストを実施。どれも2日間の成果が出たと感じられる写真だった。



ボケ具合とコントラストが印象的だった。

12:30 終了

■主な参加者評価（アンケートより）

- ・前ボケなど、その都度詳しく教えてもらえてよかった
- ・写真を撮る時間がもっと多いと嬉しい
- ・好天だったので、トレイル歩きをもう少ししたかった

■総合評価

昨年度に引き続き、2度目の開催となった。前回同様、野外での実習時は各自のペースで撮影をしてしまうので、隊列が伸びて目が行き届かなくなることがあった（対策として、撮影ポイントを示し、そこ以外は歩くというルールにしていたが、撮影意欲の方が勝ってしまったようだ）。安全管理上、さらなる対策が必要。それ以外は撮影の考え方、スキルの話が適度であり、好天にも恵まれ撮影日和となった。次回は季節を変えて実施予定。

■備考

参加者持ち物

- ・一眼レフ、またはミラーレスカメラ ・三脚 ・運動靴またはトレッキング・シューズ
- ・動きやすい服装、防寒着（手袋やニット帽など含む）・レインウェア
- ・ザック（ザックカバーも） ・水筒 ・ヘッドライトまたは懐中電灯
- ・着替え、タオル、洗面用具など、1泊2日の生活に必要なもの

主催者準備物

- ・レンタル用三脚（×5）、写真用紙（A4、2Lサイズ）、プリンター×2台

第3回「手書きで残すトレイルノートの作り方」

日時：2018年11月10日（土・晴れ）、28日（日・晴れ）

江村 康子（グラフィック・デザイナー、手書き地図推進委員会公認手書き地図作家）

新潟県出身。結婚をきっかけに長野県へ、現在は佐久市在住でフリーランス。紙モノをメインにデザインの仕事をしているが、最近はイラストを使って手書き地図や絵メモを書いたりすることが増えた。身近にあるもので記録を残していく「気軽さ」を一緒に楽しみたい。「教えて！ドクター」という医療サイトをデザイン。グッドデザイン賞とキッズデザイン賞をダブルで受賞。



参加費：5,000円 文具代：1,360円（実費）※宿泊・食事代は希望者のみ別途
募集：20名（参加者15名、申込者16名）

■参加者属性

男女比 1：2（男性5名 女性10名）

平均年齢 49歳

年代層 30×6名、40×1名、50×4名、60×3名、70×1名

出身 長野×4、東京×3、埼玉×2、神奈川×2、群馬×2、岩手×1、愛知×1

- ・当初は女性の参加者を想定していたが、男性の参加も目立った
- ・参加目的がトレイルを歩くことなく、イラストを学びに来たという人もいた

■スケジュールおよび活動レポート 1日目

13:00 オリエンテーション



自己紹介を兼ねて似顔絵を作成。飾り文字の書き方、似顔絵のコツを教わり各々ペンを取る。

13:30 レクチャー「レイアウトの基本」



ノート作りに大切なのはレイアウト。基本的なパターンを学んだ後、雑誌などからレイアウトのラフを書き起こす練習をした。

15:00 レクチャー「イラストの書き方」



イラストの書き方も教わった。リボンや旗の書き方、ただの線でもペンを持つ手を加えるだけで視線を惹き付けるようになる。

16:00 実践「ノートづくり」



テーマは自由で、今日の出来事をノートにまとめてみる。何名かに発表してもらう。

18:30 懇親会



懇親会はサラダやカルパッチョ、もつ鍋、豚の塩釜焼きなどを囲んで歓談した。



各地から参加された方からの差し入れも多く、その珍しさに盛り上がった。

懇親会メニュー：たたき長芋の梅のりがけ、マッシュポテト、タコの和風カルパッチョ
大根とツナの簡単サラダ、牛もつ鍋、豚肩ロースの塩釜焼き、リンゴゼリー

2 日目

9:00 実践



いよいよトレイルノート作りへ。布引観音コース短縮の約 4.5km、2 時間の行程だ。

10:00 実践



布引観音を拝観した後は、紅葉が鮮やかな林道歩き。ノートのテーマについて悩みながら到着。

11:00 実践「トレイルノートづくり」



早速書き始める参加者、レイアウトに悩む参加者それぞれの個性が出る。

12:00 発表&講評



トレイルノート完成。見てきたものは同じでも、視点やまとめ方の違いがあり、どれ一つとして同じものがないのが面白かった。

12:30 終了

■トレイルノート（講師制作）



■主な参加者評価（アンケートより）

- ・ノートづくりのポイントを知ることができて良かった
- ・イラストをうまく書くコツが分かった
- ・トレイル・ノートを書く時間がもう少し欲しかった

■総合評価

イラストレーターがアウトドアの講座を行うといった初の試みだったが、内容はかなり充実しており、完成度の高いノートづくりを学ぶことができた。また、イラストに興味があつて参加した方に、トレイル歩きの楽しさを知ってもらうことができた。

素材探しで自然や文化財などをじっくりと見るため、子どもたちが地域を知る手法としてトレイル・ノートは活用できそうだ。

■備考

購入品 ・測量野帳 ・呉竹ペン 12 色 ・フリクション・ペン（ブラックブルー）

※1 人に付き 1,350 円（参加者実費精算）

参加者持ち物

- ・筆記用具（各自のメモ用） ・カメラ機能の付いた携帯電話、またはカメラ
- ・トレッキング・シューズや運動靴 ・動きやすい服装、防寒着（手袋やニット帽など含む）
- ・ザック（飲み物や防寒着が入るサイズ）
- ・着替え、タオル、洗面用具など、1泊2日の生活に必要なもの

主催者準備物

- ・プロジェクター ・スクリーン ・トレイルマップ（コピー）

第4回「自然の見かたが変わるネイチャートレッキング」

日時：2018年11月23日（土・晴れ）、24日（日・晴れ）

講師：杉山 隆（October Deer 代表、信州登山案内人）

埼玉県出身。国際アウトドア専門学校卒業。哺乳類を筆頭に生き物大好き。動物の頭骨や毛皮を多数所持。昔はカモシカにお熱だったが、フィールドを八ヶ岳に移してからはニホンジカをメインにインタープリテーションを行っている。趣味はスノーボード、クライミング、コーヒー、読書、野外料理、車中泊。最近はキノコにハマる。



参加費：5,000 円 ※宿泊・食事代は希望者のみ別途

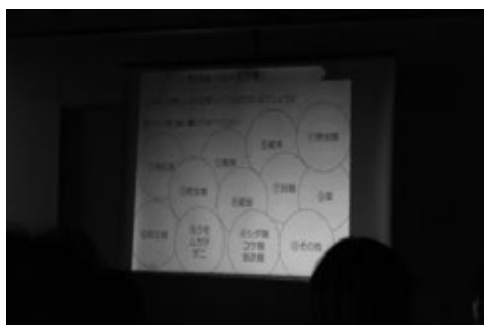
募 集：20 名（参加者 15 名、申込者 18 名）

■参加者属性

男女比 2：3（男性6名 女性9名） 平均年齢 53歳
年代層 30×6名、40×1名、50×4名、60×3名、70×1名
出身 長野×4、東京×2、埼玉×5、群馬×3、岩手×1

■スケジュールおよび活動レポート 1日目

13:00 オリエンテーション



山や森にはどんな動物が生息しているか
考え、発見するためのフィールド・サイン
について話を聞く。

13:30 実践



フィールド・サインを探しながら歩く。
木の上、土の中、鳥の羽など様々な
メッセージがあることを学ぶ。

16:00 レクチャー「骨と皮の構造」



「これは何のフンでしょう？」参加者の
想像力を掻き立てる。



骨の仕組みにも一つ一つ理由があった。
たくさんの骨に触れる。

18:30 懇親会



皮にも生き残るための戦略が隠されていた。



皆で作った鍋料理で温まる。

懇親会メニュー：燻製3種、タコの和風カルパッチョ、白菜とツナの旨だれナムル、アンチョビ・ポテト、ねぎ塩豚鍋、山形庄内風芋煮汁、ふじりんご

2 日目

9:00 実践



浅間連峰の成り立ちを学ぶには、もってこいの快晴。八ヶ岳や北アルプス方面も見ることができた。



トレイルから外れて、けもの道を歩く。フィールド・サインも見付けたが、昔の人が暮らしていた痕跡も見付けられた。

12:00 終了

■主な参加者評価（アンケートより）

- ・野生動物の話だけでなく、植物や文化までつながった解説が勉強になった
- ・普段見落としていた自然の姿に気付くことができた
- ・生のカモシカやタヌキが見たかった

■総合評価

昨年度に比べてフィールド・ワークを多くした結果、参加者からの評価が大分上がった。フィールド・サインも適度に発見することができて、最後まで飽きない内容となった。次回は開催時期をずらすか、フィールドを変えて実施したい。

■備考

参加者持ち物

- ・トレッキング・シューズや運動靴
- ・双眼鏡（あれば）
- ・動きやすい服装、防寒着（手袋やニット帽など含む）
- ・ザック（飲み物や防寒着が入るサイズ）
- ・着替え、タオル、洗面用具など、1泊2日の生活に必要なもの

主催者準備物

- ・プロジェクター ・スクリーン

第5回「シェフから学ぶソトゴハン」

日時：2018年12月8日（土・晴れ）、9日（日・晴れ）

講師：鴨川 知征（イタリア料理シェフ、浅間兄弟代表）

神奈川県出身。信州・小諸発信の料理ユニット「浅間兄弟」代表&洋担当シェフ。東京のイタリア料理店にて勤務後、2016年に長野県小諸市へIターン。移住担当の小諸市地域おこし協力隊も兼務する。得意な「食」を通しての地域おこしを模索中。



参加費：5,000円 食材代：3,000円 ※宿泊代は希望者のみ別途

募 集：20名（参加者21名、申込者24名）

■参加者属性

男女比 3：4（男性9名 女性12名）

平均年齢 45歳

年代層 30×8名、40×5名、50×3名、60×5名

出 身 長野×7、東京×8、埼玉×5、千葉×1

■スケジュールおよび活動レポート 1日目

13:00 レクチャー「ソトゴハンの基本」



ソトゴハンに適した道具や食材について解説。そのときの気分でメニューを決められるよう、応用の利く食材や調味料を選ぶのがポイント。

13:30 実践「簡単ショートパスタ」



シェフの実演の後、アイスブレイクとランチを兼ねて、グループ料理に挑戦（前回実施レシピ）。



乾物、鮭フレーク、粉ミルクを組み合わせたクリームソース・パスタが完成。お湯が沸いてから約5分でできるお手軽メニュー。

15:00 実践「ペミカン（保存食）」



メインレシピであるペミカンを仕込む。翌日のトレイル歩きで、これを活用した料理を各自で作る。

16:00 実践「行動食」



翌日用の行動食も作る。グラノーラとチョコを使ったトレイル・ミックスバー。

18:30 懇親会



シェフがいたので、いつもより豪華なコースメニューとなった。写真はBBQ料理。

懇親会メニュー：バーニャカウダ、鶏レバーペースト、サラミ入りアラビアータ、滋養たっぷりリゾット、豚肩肉と豆の煮込み、BBQ チキンウイングほか

2日目

9:00 実践「朝食」



漬物や乾物を活用したクイック・リゾットを作った。疲れた胃に優しいメニューだ。

ペミカン完成



一晩冷蔵庫に入れて固まったペミカン。どのようなメニューに変化するのだろうか。

行動食完成



高カロリーで腹持ちが良い行動食。

実践「トレイル歩き」



仕込みを終えて、センターから懐古園まで歩く。師走の寒さが身にこたえるが、到着後の食事を楽しみに足が進む。

12:00 実践「昼食」



いよいよペミカンを活用したメニューに挑戦。5種類のメニューがあり、各自が食べたいものを作った。



メニューの一つ、担々麵風パスタ。辛い山椒が体を温めてくれる。ソトゴハンは手軽なだけでなく、やはり味が重要なんだ、と再確認できた。

13:00 終了（懐古園付近で解散）

■主な参加者評価（アンケートより）

- ・ペミカンの味に驚いた。知ることができて良かった。
- ・早くて簡単でおいしいレシピをいくつも教えてもらえた。
- ・夏のレシピも知りたい。

■総合評価

前回は全員で決められたメニューを作ったが、今回はペミカンベースにして幅を持たせたのが好評だった。歩く距離（短い）や、作る場所（景色がイマイチ）については、もう少し検討の必要がある。

■備考

購入品

- ・調味料ケース、ウェット・ティッシュ（ともに参加者への配布物）

参加者持ち物

- ・筆記用具（各自のメモ用） ・エプロン、バンダナや帽子
- ・お気に入りの調理道具（ある人） ・トレッキング・シューズや運動靴
- ・動きやすい服装、防寒着（手袋やニット帽など含む）
- ・ザック（飲み物や防寒着が入るサイズ）
- ・着替え、タオル、洗面用具など、1泊2日の生活に必要なもの

主催者準備物

- ・調理用品 ・食材

第6回「大地の見かたが変わるジオトレッキング」

日時：2019年2月9日（土・雪）、10日（日・晴れ）

講師：竹下 欣宏（信州大学教育学部准教授）

愛知県新城市出身。2004年3月、信州大学大学院博士課程を修了。栃木県立博物館、戸隠地質化石博物館、信州大学教育学部助教を経て2012年より現職。地球の歴史の中で一番新しい時代の地層（第四紀）や岩石を対象として、大地の生い立ちを読み解く研究をしている。



参加費：5,000円 ※宿泊・食事代は希望者のみ別途

募集：20名（参加者15名、申込者28名）

■参加者属性

男女比 1：1（男性8名 女性7名）

平均年齢 50歳

年代層 10×1、30×3名、40×2名、50×3名、60×5名、70×1名

出身 長野×4、東京×4、埼玉×3、群馬×3、神奈川×1

■スケジュールおよび活動レポート 1日目

13:00 実践「フィールドワーク」



初日の舞台は布引観音。崖に見える横のシマシマは何か？という問い掛けから始まった。



石の形、色、崖の削られ具合から、地形の成り立ちを読み解く。



各々触り、地層の違いを確認する。硬い層、柔らかい層などがはっきりと分かる。



地層になるまでの実験。様々な大きさの石があっても、振るときれいな層ができる。

レクチャー「火山の成り立ち」



浅間山をモデルに、山体崩壊から現在の形になるまでの流れを考察した。初心者にも分かりやすい言葉を使った説明が印象的だった。

18:30 懇親会



打ち合わせで来ていたセンター長と、ワールド・トレイルズ・ネットワークの会長も参加しての懇親会は、夜遅くまで続いた。

懇親会メニュー：四川風火鍋、海鮮風寄せ鍋、カキのオイル漬け、ゆず大根、イカとセロリのマリネ、漬物、枝豆、フルーツ盛り

2日目

9:00 実践「フィールドワーク」



2日目は小諸大橋からスタート。御牧ヶ原台地を下から望む。この岩塊は浅間山ではなく、遠く八ヶ岳からやって来たようだ



最後は懐古園から、2日間歩いた地形を眺め、まとめを行う。千曲川は1万年かけて削られ、今の景観を造り出しているようだ。

12:30 終了

■主な参加者評価（アンケートより）

- ・講師がなるべく専門用語を使わずに説明してくれたので、とても分かりやすかった
- ・見方のポイントになるキーワードをたくさん教わり、面白かった
- ・実際に歩きながら学べたのが良かった

■総合評価

何より講師の説明が分かりやすく、地学初心者にもついていける内容だったのが高評価につながったようだ。開催時期としても、草がなく地層が見やすい冬季が適していると思われる。子どものスタディ・ツアーにも活用できそうだ。

■備考

参加者持ち物

- ・トレッキング・シューズや運動靴 ・双眼鏡（あれば）
- ・動きやすい服装、防寒着（手袋やニット帽など含む）
- ・ザック（飲み物や防寒着が入るサイズ）
- ・着替え、タオル、洗面用具など、1泊2日の生活に必要なもの

主催者準備物

- ・プロジェクター ・スクリーン

第 11 回 橋谷晃さんと歩くトレッキング講座

自然の美しさ、雄大さ、繊細さに触れるガイドウォークを行い、ただ歩くだけではないトレッキングの魅力を伝える体験講座を開催した。

今回も、幅広い世代に人気のある山岳ガイド・橋谷晃氏にご協力いただき、トレッキングの楽しみ方を知ることが目的に実施した。

日程：2019 年 1 月 19 日（土）9 時 ～ 20 日（日）14 時

内容：1 月 19 日（土） 湯ノ丸山スノーシュー・トレッキング

1 月 20 日（日） 黒斑山スノーシュー・トレッキング

人数：参加者 12 名（男性 4 名、女性 8 名）、申込者 14 名

講師 1 名、事務局 2 名

講師：橋谷 晃（ネイチュアリングスクール木風舎代表）

■活動の様子



天候に恵まれた初日、集まったのはほとんどが県外からの参加者 12 名。挨拶を済ませ、早めの昼食を取ってから出発した。リフトを降りればすぐ目の前に、今日の目的地である湯ノ丸山が見える。スノーシューは初めてという参加者も何人かおり、最初のうちは自分のスノーシューを踏んでしまい苦戦していた。



ダケカンバとシラカバの違いや動物の足跡など、経験豊富な講師ならではの自然解説をときおり聞きながら、2 時間ほどで山頂に到着。360 度開けた大展望に歓声を上げる参加者。見渡す限りの山々を橋谷さんに解説してもらい、大パノラマを満喫した。



下りは鹿沢温泉へ向かう。トレースのない斜面に我先にと足跡をつけるが、すぐに雪に足を取られて転倒。しかし、転んでも痛みはなく、笑い声が絶えない。樹林帯に入ったあたりから疲れの見てきた参加者たち。2時間かけてようやく下山した。



夜はお待ちかねの懇親会。お好み焼きやもつ鍋を囲んで、大いに語り合った。共通の趣味があれば初対面でも話題には事欠かないが、やはり中心は橋谷講師。これまで行った山やテレビの収録の話など、講師への質問が相次いだ。



2日目はあいにくの雪となった。車坂峠から出発し、トーミの頭を目指す。1日目よりも慣れた足取りでさくさくと登っていく。例年どおりなら車坂山からの下りでは滑り台ができるのだが、雪の少なさから笹が顔を出していた。



シェルター付近で昼食を取ったのち、槍ヶ鞘へ。晴れていればここから雄大な浅間山を望むことができるのだが、残念ながら天気は回復せず。トーミの頭で記念写真を撮り、下山した。

今回、雪は少なかったものの、1日目は360度のパノラマを楽しむことができた。また、2日目は視界の悪い中を歩くという経験ができ、雪山の様々な側面を知ることができたのではないだろうか。引き続き、自然の魅力に触れ、大いに楽しめるような企画を行っていきたい。

みんなでダイヤモンド浅間を見に行こう！

8月11日の「山の日」に、地元の山に親しみ、山への感謝の機会をつくろうと、「ダイヤモンド浅間」を見に行くイベントを企画。浅間山の山頂と朝日が重なり、ダイヤモンドのように輝く神秘的な現象を一目見ようと、地元を中心に多くの申し込みをいただいた。残念ながら山の日には雨のため中止としたが、イベントに対する期待値は相変わらず高かった。

期 日：2018年8月11日（土・祝）⇒雨天中止（申込者33名）

2018年8月25日（土）3時00分～7時30分

行 程：高峰高原ビジターセンター→〈中コース〉→トーマの頭→〈表コース〉→高峰高原
ビジターセンター

参加者数：参加者23名、ガイド・スタッフ7名

参 加 費：1,000円（保険代込み）

■活動の様子



山の日には雨天中止となったので、今度こそと意気込んで出発。初めは暗い夜道を歩くが、大勢であれば怖くはない。ほとんどの人にとっては新鮮な体験だ。



しかし、霧は一向に晴れず、ついに日の出の時間を迎えても、眺望は開けなかった。落胆の色を隠せないまま、皆帰途につく。



今回も残念ながらダイヤモンド浅間を拝むことはできなかった。夏は霧が発生しやすいため、なかなか思うようにはいかないが、期待は高いので、今後も続けていきたい。

みんなでダイヤモンド浅間を見に行こう！

【日の入り編】

浅間山の新たな魅力に迫ろうと、「ダイヤモンド浅間」「パール浅間」を実施してきたが、これまでは南麓だけであった。そこで今回は、ガイド同行でないと歩けない牧場の道（ランチウェイ）を歩いた後、北麓の優美な浅間山に沈む太陽を拝むツアーを企画。この奇跡の絶景を一目見ようと、平日にもかかわらず22名の参加者とともに歩いた。

期 日：2018年11月1日（木）14時30分～19時15分

行 程：浅間牧場第1駐車場→第2駐車場→牛舎→天丸山→第2駐車場→第1駐車場

参加者数：参加者22名、ガイド・スタッフ3名

参 加 費：1,000円（保険代込み）

■活動の様子



集合時はまだ山頂に雲が懸かっていたものの、晴れることを期待して出発。すると間もなく、紅葉の大パノラマが開け、参加者から感嘆の声が挙がる。



台地に上がると牧草地が広がり、ここからは牧場の雄大な景色を楽しみながらのんびりと歩く。浅間山の雲も次第に取れ、期待できる展開だ。



ところが、天丸山に到着したころには、再び頂上付近に雲が懸かってしまった。日の入りが先か、雲が消えるのが先か……すると、直前になって雲が切れ、見事なダイヤモンド浅間を見ることができた。思わず拍手する参加者たち。北麓でも期待どおりの絶景となったので、今後も継続できれば、と思っている。

みんなでパール浅間を見に行こう！

昨年引き続き「パール浅間」を見に行くイベントを企画した。浅間山の山頂部に満月前後の月が懸かり、パールのように淡く輝く神秘的な現象は、様々な条件が重ならないと見られず、天気が良くても年に 1～2 日程度しかない。この奇跡の絶景を一目見ようと、平日にもかかわらず多くの申し込みがあり、地元を中心とした 26 名の参加者とともに歩いた。

期 日：2018 年 10 月 24 日（水）14 時 30 分 ～ 19 時 00 分

行 程：高峰高原ビジターセンター→〈表コース〉→トーミの頭（夕焼け）→トーミの頭と黒斑山の間点→〈中コース〉→高峰高原ビジターセンター

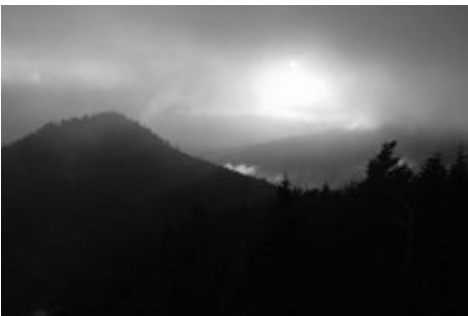
参加者数：参加者 26 名、ガイド・スタッフ 6 名

参 加 費：1,000 円（保険代込み）

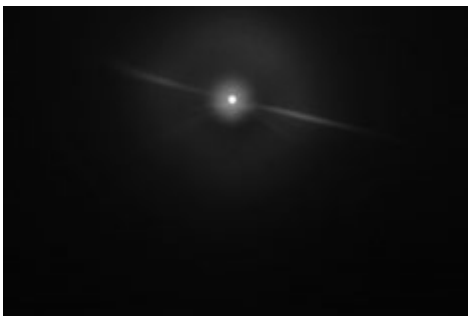
■活動の様子



天気が回復に向かいつつあるものの、山上はいまだ雲の中。期待と不安が交錯しながら、黄葉の森を登っていく。



トーミの頭に到着しても、相変わらずガスが懸かって見通しが利かない。しかし、夕暮れどきになって太陽が垣間見え、神々しい光景が突如広がった。このまま雲が切れれば……。



だが、時間になっても浅間山に懸かった雲は残ったまま。やがて月の出を迎えると、一瞬月が姿を見せたものの、浅間山は最後まで全貌を現すことはなかった。今回は残念な結果に終わったが、来年はリベンジできれば、と思っている。

事業総括

2018年度は、主催・共催合わせて22（延べ36日）の事業を行った。トレイルをテーマとした人づくり講座は大きく3つ。まず、3年目となる「ロングトレイルハイカー入門講座」（歩き方を学ぶ内容で、全5回）では、男女比が逆転し、女性の参加が7割を占めた。登山に比べてスタートしやすいこと、自然だけではなく、その土地の歴史や文化、さらには地域住民との交流を楽しめる点が、女性にマッチした結果かもしれない。

2年目となる「大人のトレイル歩き旅講座」（楽しみ方を学ぶ内容で、全6回）は、前年度の3テーマから倍の6テーマに増やし、特定のスキルを持つ地元の方々に講師をお願いした。様々なコンテンツとの組み合わせができることを証明する実験的な面もあったが、参加者の声やアンケートから、トレイルでのキャンプ・スキルや自然観察スキルなど、その幅の広さに多くの可能性を見出すことができそうだ。

最後に、同じく2年目となる「ロングトレイルのつくり方講座」（マネジメントを学ぶ内容で、全3回）。諸事情により1回は中止となってしまったが、残り2回は参加者も多く、潜在的な運営希望者が眠っている可能性が感じられた。

トレイルに関する人づくり講座は、現時点ではほかに目立った動きはない。安藤百福センターが先導となって、全国のトレイルを支援できるよう、役割を果たしていきたい。また、受講のニーズもますます高まっているので、継続した開催が望ましいだろう。

年に1回行っているロングトレイルシンポジウムでは、過去最高の参加人数を記録した。応募状況を見ると、例年より地元住民の参加が顕著だった。「トレイル」という言葉に抵抗感なく参加した人が多かったのは、いい傾向に違いない。

周辺のフィールドを活用したプログラム開発を目的として、5年前から実施してきた「トレッキング講座」も11回目を迎えた。プロの山岳ガイドの指導の下、実施したことが各トレイル講座を生み出すきっかけとなり、重要な役割を果たしたと言える。

地域資源の掘り起こしを目的とした、ダイヤモンド浅間、パール浅間（ともに3年目）は、完全に天候次第のイベントだが、貴重な瞬間を見たいというニーズが高く、申し込みが途切れることがない。一人では行きにくい（夜間の移動なので、リスクが高い）という課題も解決できるというメリットもあるようだ。

来年度も、「歩く」ことをベースとした講座・イベントを企画し、より幅広い対象者をトレイル歩きの世界に誘えるよう、尽くしていきたい。

～事務局スタッフ近況～

■安藤 伸彌（あんど う のぶや）



古道トレイル（本文参照）の影響で、山岳信仰に興味を持つようになりました。出羽三山や大峯奥駈道などで山伏体験をしてみようかと夢想しつつ、仕事で休みが取れない現実に直面しています。とりあえず、体が動くうちに戸隠山にでも挑戦してみようかと思っている今日このごろです。

ちなみに、3歳の息子が（自分が休日も浅間山の調査等に出掛けていることもあって）「お父さんとお山に行く」と言っていますが、さすがにまだ早いので、やんわりと断っています。まあ近いうちに見捨てられると思いますが…（↓）

■小島 真一（こじま しんいち）



4月から長女が小学生になりました。自分が小学生の子を持つ親になろうとは、なんとも月日が経つのは早いなあ。独りでできることも増えてきて、「パパ、あっち行って」と言われる回数も増えてきました（ちょっと早くないか?）。そんな子どもたちの成長に負けまいと、新たなチャレンジとしてスキーを始めました。イメトレは十分。勇んでゲレンデに突入するも、スピード感に腰が引けてしまい、転倒の連続（しかも起き上がれない……）。はたして華麗なシュプールを描ける日はやって来るのだろうか。

■横堀 咲紀（よこぼり さき）



犬を飼い、車を買って福岡に行き、高野山参拝、愛犬の短歌が結社誌の巻頭を飾るなど、生きることの面白さを実感しながらの越冬でした。11月の京のかたな展、京都博物館のお高い（らしい）照明のおかげで、推し刀・へし切長谷部の地鉄は新雪の如く輝き、一層私を魅了しました。しかも展示されたのは滅多にお目にかかれない差裏。あのライティングで見られて幸せでした。1月の福岡市博物館の展示では撮影もでき大満足。今でも毎日見返しています。写真はレプリカのへし切長谷部を手におおはしゃぎ、溢れる笑みをこらえきれない変質者です。

卷末資料

マスコミ掲載（一部）



「ロングトレイル」の文化を語るシンポジウム

2019.02.23 - 16:30更新

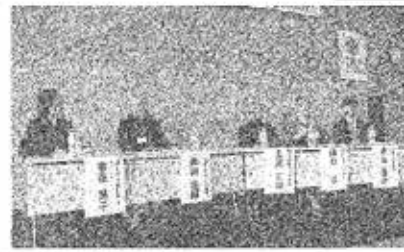
日本ロングトレイル協会の事務局が置かれている小諸市の安藤百福センターに全国から約120人が集まり、普及促進や今後の整備の仕方などを議論した。ロングトレイルは国内24カ所、総延長は2500kmに及ぶ。



2019年2月23日 長野朝日放送



2019年3月12日 コミュニティテレビこもろ



「道と山小屋」

テーマに議論

小諸 NPO がシンポ

NPO 法人日本ロングトレイル協会(小諸市)は23日、第6回ロングトレイルシンポジウムを安曇巨摩記念自然体験活動指導者養成センター(同)で開いた。同協会の節田重節会長や、北アルプスの酒沢ヒュッテ社長の山口孝さんら山小屋関係者が「登山文化を支えてきた道と山小屋」をテーマに座談会形式で議論。自然を楽しみながら長距離を歩くロングトレイルの愛好家ら約130人が聴いた。座談会には黒田合正(ヒョウタ)氏(八ヶ岳の米山正利さん、双六小屋(北アルプス)の池田孝さん)も参加。山口さんは「山小屋に続く道は山小屋の生命線。毎日小屋番が小まめに手入れするのが一番いい」と話し、山道整備の重要性を伝えた。節田さんは「山の歴史に心を通わせながら歩いてほしい」と来場者に呼び掛けていた。ニュージャーランドのロングトレイルの魅力を紹介する講演などもあった。

2019年2月24日 信濃毎日新聞

ロングトレイルシンポ

140人が参加

小諸市大久保の安藤百福センターに事務局がある「日本ロングトレイル協会」が主催する6回目のシンポジウムはこのほど、同センターで開き、全国から約140人が参加した。同協会はロングトレイルを「歩く旅」を楽しむために作られた「道」と定義。今回は「トレイル文化を語る」をテーマに、同センターの中村達センター長がロングトレイルの現状について話したほか、同協会の節田重節会長と酒沢ヒュッテ社長の山口孝さんなど山小屋主人3人による



「登山文化を支えてきた道と山小屋」と題した座談会を行った。シンポジウムには、同協会名誉会長で日清食品ホールディングス社長の安藤宏基さんも参加。安藤さんはあい

さつで「全国のロングトレイルがつながって日本を縦断する『ジャパントレイル』もそう遠くない未来にできると思うが、それには今日集まった皆さんのような人の協力が必要。それをボランティアで行ってくれていることに大きく感謝している」と話していた。

2019年3月15日 小諸新聞

「生物多様性保全パートナーシップ協定」を締結

昆虫が住みよい環境を



協定書のお披露目、左から中村センター長、小泉小諸市長、上村CCO、中島副知事

東京都の日清食品ホールディングス株式会社と安藤株式会社は、このほど、県や小諸市、安藤百福記念自然体験活動指導者養成センターと「生物多様性保全パートナーシップ協定」を締結した。

小諸市の安藤百福センター



植栽したバイオープ(日清食品HD提供)

「バイオープ」は、森の生きものが「オリーブ」のオーニングセルの生息、生育空間が自然に成り立っている場所。小諸市に生息する絶滅危惧1B類(近い将来に絶滅の危険性が高い)のミヤマシジミやヤマキチョウをはじめとする昆虫が住みやすい環境を整えていく「小諸絶滅危惧種バイオーププロジェクト」をスタートしている。今回は、一般参加者とともにバイオープにミヤマシジミの食草であるコマツナギといった蝶の食草や昆虫の蜜源植物を50種類ほど植栽した。

小泉市長は「県や市で推進している生物多様性の保全を目的とした、絶滅危惧種である昆虫が住みやすい環境づくりの活動。このバイオープの植栽をきっかけに関係者が協力して、小諸、長野県の豊かな自然を守っていききたい」と述べた。

中島副知事は締結について、「バイオープが地域の生物多様性を豊かにする先進的なモデルとして、県としても発信していきたい。ここから皆さんの豊かな自然が守られるような取り組みが全国に広がることを期待したい」と御礼のあいさつを述べた。

長野県には県内とその周辺地域にのみ生息、生育している固有種が数多く存在し、種や生態系レベルで高い多様性が見られる一方、「長野県版レッドリスト(動物編)2015年」(絶滅のおそれのある野生生物のリスト)では、絶滅危惧種614種を含む計774種のうち昆虫類が586種を占め、多くの昆虫の生育、育成が脅かされている。

同協定は、市民団体と企業、学校などが協働する自然環境の保全活動をより推進するために2015年からスタートした制度で、現在までに本件を含む14の協定が締結されている。

安藤百福センター 運営組織

顧問

荒牧 重雄	東京大学名誉教授、火山学者
安藤 昭一	千葉大学 シニアフェロー
荻原 健司	スキーノルディック複合五輪金メダリスト、北野建設株式会社スキー部 GM
林 貞行	元外務事務次官、元駐英特命全権大使
丸山 庄司	元全日本スキー連盟 専務理事

運営委員会

委員長	安藤 宏基	公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団 理事長 日清食品ホールディングス株式会社 代表取締役社長・CEO
副委員長	安藤 徳隆	公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団 副理事長 日清食品ホールディングス株式会社 代表取締役副社長・COO
委員	飯田 稔	仙台大学 上級研究アドバイザー
	小泉 俊博	小諸市長
	中村 達	アウトドアジャーナリスト・プロデューサー 特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会 代表理事 安藤百福センター センター長
	水野 正人	ミズノ株式会社 相談役会長

諮問委員会

委員長	節田 重節	特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会 会長
委員	磯野 剛太	公益社団法人日本山岳ガイド協会 理事長 一般財団法人全国山の日協議会 理事長
	神長 幹雄	株式会社山と溪谷社 編集者
	木村 宏	北海道大学 特任教授 特定非営利活動法人信越トレイルクラブ 理事
	橋谷 晃	木風舎 代表
	山田 俊行	トヨタ白川郷自然学校 学校長

(50 音順、2019 年 3 月現在)

2018 年度 安藤百福センター実施事業

■主催

5/12	小諸ツリーハウスプロジェクト「森のいきものがたり」
8/11	ダイヤモンド浅間を見に行こう！（悪天候のため中止）
8/25	ダイヤモンド浅間を見に行こう！
9/29～30	第1回ロングトレイルのつくり方講座「マーケティング」
10/6～7	第1回大人のトレイル歩き旅講座「ローカルフード」
10/24	パール浅間を見に行こう！
10/27～28	第2回大人のトレイル歩き旅講座「風景撮影術」
11/1	ダイヤモンド浅間を見に行こう！（日の入り編）
11/4	小諸ツリーハウスプロジェクト「いきものに感謝祭」
11/10～11	第3回大人のトレイル歩き旅講座「トレイルノート」
11/17～18	第2回ロングトレイルのつくり方講座（諸事情により中止）
11/23～13	第4回大人のトレイル歩き旅講座「ネイチャートレッキング」
12/8～9	第5回大人のトレイル歩き旅講座「ソトゴハン」
1/19～20	第11回橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
2/9～10	第6回大人のトレイル歩き旅講座「ジオトレッキング」
2/24	第3回ロングトレイルのつくり方講座「マネジメント」

■共催

	特定非営利活動法人アウトドアライフデザイン開発機構
6/9～10	第1回ロングトレイルハイカー入門講座「歩き方、装備」
7/28～29	第2回ロングトレイルハイカー入門講座「地図、コンパス」
9/8～9	第3回ロングトレイルハイカー入門講座「安全管理」
10/20～21	第4回ロングトレイルハイカー入門講座「テント、縦走」
2/2～3	第5回ロングトレイルハイカー入門講座「スノーシュー」
2/23	特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会 第6回ロングトレイルシンポジウム
2/17～18	公益社団法人日本山岳会 第8回登山教室指導者養成講習会

2018 年度 研修利用状況表

月	日	団 体 名	事 業 名
4	1～3	東京農工大学環境教育学研究室	ゼミ合宿
	9～11	(公社) 日本山岳ガイド協会	検定員研修会
	23～24	NPO 法人静岡山岳自然ガイド協会	平成 30 年度総会・危急時対応研修
	26～28	日清食品 HD (株)	新入社員研修
5	8～9	(株) 丸山珈琲	丸山珈琲宿泊研修
	11～13	安藤百福センター	ツリーハウスプロジェクト
	14～16	森環境教育事務所	NEAL リーダー養成講習会
	27	ボーイスカウト長野県連盟	指導者講習会事前会議
	30～31	(株) 丸山珈琲	丸山珈琲宿泊研修
6	8～9	清泉女学院大学	初年時入学生学外研修
	9～10	NPO 法人アウトドアライフ デザイン開発機構	第 1 回ロングトレイルハイカー入門講座
	16	小諸市役所	アースデイ
	17	氷風穴の里保存会	風穴学習会
	16～17	NPO 法人日本ロングトレイル協会	理事会・総会
	16～17	「JAPAN TRAIL」プロジェクト会議	第 1 回「JAPAN TRAIL」 プロジェクト会議
	23～24	長野県レクリエーション協会	Enjoy 信州レクカレッジ 2018
	25	長野県植物誌改定チーム上田	植物分類研修会
7	7	連合長野佐久地域協議会	トレイルを活用した地域観光研修
	8	ボーイスカウト長野県連盟	ボーイスカウト指導者講習会長野第
	14～15	長野県レクリエーション協会	Enjoy 信州レクカレッジ 2018
	21～22	長野県レクリエーション協会	理事会&理事学習会
	27	自然エネルギー佐久地域協議会	夏休みエコキッズツアー
	27～28	浅間連峰地区遭難防止対策協会	救助隊員・相談員研修会
	28～29	NPO 法人アウトドアライフ デザイン開発機構	第 2 回ロングトレイルハイカー入門講座
8	1～3	長野県レクリエーション協会	教員免許更新講習会
	4	日清食品長野営業所	おいしいしょくいくスクール
	3～5	清泉女学院短期大学	保育特別講座（自然体験活動指導者養成）
	7～8	日清食品 HD (株) 人事部	2019 年度新卒内々定者研修
	15～16	日清食品 HD (株) CSR 推進室	ビオトープ調査

8	19～21	東京農工大学	工学部教職合宿
	25	安藤百福センター	ダイヤモンド浅間を見に行こう！
	30～31	(公社) 日本山岳ガイド協会	危急時対応講習会
9	1～2	長野県将来世代応援県民会議	長野県ネクストリーダー養成塾
	3～4	拓殖大学松橋ゼミナール	松橋ゼミナール
	8～9	NPO 法人アウトドアライフ デザイン開発機構	第3回ロングトレイルハイカー入門講座
	10～15	筑波大学山岳科学学位プログラム	山岳科学フィールド実習
	15～16	長野県レクリエーション協会	Enjoy 信州レクカレッジ 2018
	29～30	安藤百福センター	第1回ロングトレイルのつくり方講座
10	4～5	(株) 丸山珈琲	入社3年目スタッフ研修
	6～7	安藤百福センター	第1回大人のトレイル歩き旅講座
	9～10	小諸市役所	新入職員研修
	10～12	日清食品 HD (株)	マーケティングインターンシップ
	12～14	森環境教育事務所	NEAL リーダー養成講習会
	20～21	NPO 法人アウトドアライフ デザイン開発機構	第4回ロングトレイルハイカー入門講座
	24	安藤百福センター	パール浅間を見に行こう！
	27～28	安藤百福センター	第2回大人のトレイル歩き旅講座
11	1	安藤百福センター	ダイヤモンド浅間を見に行こう！
	2～5	安藤百福センター	ツリーハウスプロジェクト
	5～6	(公社) 日本山岳ガイド協会	自然ガイドに必要なロープワーク
	10～11	安藤百福センター	第3回大人のトレイル歩き旅講座
	19～20	(公社) 日本山岳ガイド協会	危急時対応講習会
	21～22	長野県自然保護課	自然保護レンジャー全体研修会
	23～24	安藤百福センター	第4回大人のトレイル歩き旅講座
	25～28	森環境教育事務所	NEAL リーダー養成講習会
	29～30	「JAPAN TRAIL」プロジェクト会議	第2回「JAPAN TRAIL」プロジェクト会議
12	1～4	(公社) 日本山岳ガイド協会	ファーストエイド講習会
	6～7	NPO 法人蓼科・八ヶ岳国際 自然学校	指導者研修会
	8～9	安藤百福センター	第5回大人のトレイル歩き旅講座
	11～12	長野県環境部自然保護課	自然保護レンジャー全体研修会
	13～16	NPO 法人国際自然大学校	スキー指導者研修会
	17～19	信州外あそびネットワーク	NEAL インストラクター養成講座

1	13～14	信高山岳会	高校生の登山指導、遭難防止
	19～20	安藤百福センター	第 11 回橋谷さんと歩くトレッキング講座
	27	氷風穴の里保存会	風穴学習会
2	2～3	NPO 法人アウトドアライフ デザイン開発機構	第 5 回ロングトレイルハイカー入門講座
	6～8	日清食品 HD (株)	営業・マーケティング研修
	9～10	安藤百福センター	第 6 回大人のトレイル歩き旅講座
	16～17	(公社) 日本山岳会	第 8 回登山教室指導者養成講習会
	17	小諸ミズオオバコ保全会議	たんけんビオトープの思い出スライドショー
	18～20	信州外あそびネットワーク	Leave No Trace トレーナー研修会
	20～21	信州外あそびネットワーク	総会
	23	NPO 法人日本ロングトレイル協会	第 6 回ロングトレイルシンポジウム
	24	安藤百福センター	第 3 回ロングトレイルのつくり方講座
	24	「JAPAN TRAIL」プロジェクト会議	第 3 回「JAPAN TRAIL」プロジェクト会議
3	2～3	森環境教育事務所	安全研修
	4～5	長野県農政部農村振興課	平成 30 年度里親農業者研修会
	9	小諸市役所農林課	アグリカルチャー・ミーティング
	16～17	小諸市役所企画課	自然を生かした映像撮影研修
	23	氷風穴の里保存会	風穴学習会
	29～31	東京農工大学環境教育学研究室	ゼミ合宿

編集後記

令和元年、最初の仕事として取り組んだ報告書は、執筆者・関係者のおかげで無事に発行することができました。心から感謝申し上げます。◆講座・イベント数が、これまでで一番多かった 2018 年度。トレイルを歩くにしても、裏方で走り回るにしても、体力の衰えを痛感することがしばしばありました。そろそろ健康に気を遣う歳なのでしょうか（若くはないということか……）。◆表紙は、浅間・八ヶ岳パノラマトレイルのコース途中にある「氷風穴」です。かつて全国に約 300 あった風穴のうち、蚕種の貯蔵量で第 4 位の実績を持っていたそうです。ちなみに、1 位は近くにあった小諸風穴（現存せず）です。夏場でも内部は 1~3℃に保たれる天然の冷蔵庫。ここに吹きだまる冷気は、体感する価値ありです。◆1 年のお休みを経て、ツリーハウスイベントが復活。生き物が集まるようビオトープも造り、大人だけでなく子どもたちにも楽しんでもらえる環境に変化してきました。ところで、イベント内でシイタケの菌打ちを大量に行っていました。どれだけ採れるのか、期待に胸が膨らみます。(K)

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
2018 年度 事業報告書

発行日：2019 年 5 月 31 日

発行人：安藤 宏基

編集人：中村 達

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
〒384-0071 長野県小諸市大久保 1100

Tel : 0267-24-0825

Fax : 0267-24-0918

URL : <https://momofukucenter.jp/>

E-Mail : info-center@momofukucenter.jp